

彦根市における市民活動団体からみた交流の場と 情報発信に関する研究

森 友秀

環境計画学科環境社会計画専攻において学士(環境科学)の学位授与の資格の
一部として滋賀県立大学環境科学部に提出した研究報告書

2006 年度

承認

指導教員

表2 エフエムひこね関係者に対するヒアリング日時

日時	対応者	役職など
2005年11月25日		
2006年2月10日	O.Y氏	株式会社エフエムひこね代表取締役社長
2006年9月19日		
2006年2月24日	E.M氏	楽器店店主
2006年2月26日	Y.K氏	旅館店主
2006年2月28日	A.K氏	酒屋店主
2006年10月20日	A.Y氏	過去の市民活動団体番組担当
2006年10月30日	H.M氏	大学生パーソナリティ
2006年11月14日	T.Y氏	大学生パーソナリティ
2006年11月28日	Y.H氏	現在番組の中で市民活動団体について放送しているパーソナリティ

2-2 分析方法

本研究では市民活動団体の交流の場として、主にひこね市民活動センターについて、情報発信媒体としてはエフエムひこねの可能性についてそれぞれ考察を行う。さらに市民活動団体側からの交流の場と情報発信に関する意識についてまとめる。

市民活動団体に関する分析の流れを図1に示す。分析の流れとしては、市民活動団体のセンター利用目的を基に、勉強会型、情報交換型、独自型と分類したのちに、各類型について交流の場と情報発信に関する考察を行う。

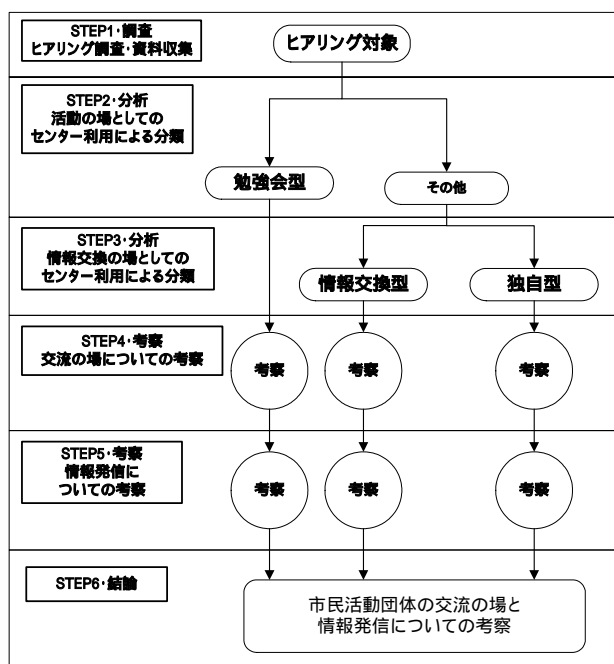


図1 分析のフロー図

また、分類によって類型化されたものの特長を以下に示す。

表3 各類型の特徴

類型	特徴
勉強会型	主に活動の場としてひこね市民活動センターを利用している団体。団体によっては活動の場の他に交流の場として利用している。
情報交換型	彦根市民活動団体を活動の場としていないが、交流の場として利用している団体。2006年9月～12月の情報交換会に、必ず一度は出席している団体。
独自型	ひこね市民活動センターに登録しているが、活動の場としても交流の場としてもセンターを利用していない団体。2006年9月～12月の情報交換会に、一度も出席していない団体。

3. 市民活動団体の交流の場について

3-1 ひこね市民活動センターの果たす役割

ひこね市民活動センター代表 I.K 氏に対するヒアリング調査から、ひこね市民活動センターの機能として、以下の4点が浮かび上がってきた。

センター内での登録団体間の交流の場としての機能
事務局機能を持たないセンター登録団体の事務局としての機能

自力での広報力が低い団体による情報発信の場としての機能

市民活動に興味を持つ人の窓口としての機能

ひこね市民活動センターにおいては、センター内で行われた情報交換が外部に伝わりにくいという現状が明らかになった。そこで交流の場に求められる機能として、交流の場で行われた情報交換を外に発信するという『情報発信』が必要だと考えられる。

3-2 彦根市における他の交流の場について

ひこね市民活動センター以外の交流の場として、『プレイハウス晒庵』や『ひこね「街の駅」寺子屋力石』などにおいても市民活動団体が交流の場として利用していることが明らかになった。

4. 市民活動団体の情報発信の場について

4-1 エフエムひこね側の市民活動団体情報発信の意思

市民活動団体の情報発信媒体として、まちのラジオといわれているコミュニティ FM の中でもエフエムひこねに注目し、考察を行った。

エフエムひこねの受け入れ意思として、エフエムひこね代表取締役社長のO.Y氏は、以下の2点を挙げられている。

- ・局としての受け入れは行っている。
- ・市民団体が番組に出演することによりスポンサーがついて欲しい。

という点である。また、「門戸は開いているつもりだが、市民団体側が何を思い、考えているのかこちらとしても見えない部分があるので、現在はアプローチをしていない。」ということからエフエムひこね側としては、受け入れる意思はあるが、現在は市民活動団体側との接点を積極的に求めているという現状が明らかになった。

4-2 エフエムひこねにおける市民活動団体番組の状況

エフエムひこね開局当時に市民活動団体番組が存在していたことが明らかになった。しかし、この番組は仲介役となる人物に大きく依存していたため、この人物が番組を降板することで終了した。

現在、エフエムひこねにおいて市民活動団体の情報のみを扱った番組は放送されていない。一番組上で放送されるさまざまな情報の中で週に一度市民活動団体についてを放送している程度であり大きく取り扱われていない。

4-3 市民活動センター登録者からみたエフエムひこね

ひこね市民活動センターに登録していながら、エフエムひこねでパーソナリティを務めるようになったT.Y氏は、ひこね市民活動センターの情報も番組を通して発信したいと考えておられる一方で、そういった情報が聴取者に

受け入れやすいものなのかという点について懐疑的であった。この点では、過去の市民活動団体番組の担当者においても同様の意見がみられた。

4-4 情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性

現状としては、エフエムひこねの内部でもメディアとしての多数の聴取者に受け入れられると考えられる放送を行うのかで意見が分かれていると考えられる。

仮に多くの聴取者に受け入れられる放送番組となることで、既存のマスメディアのような大衆化された番組に近づいていくのではないかと考えられる。そのため、エフエムひこね代表取締役社長 O.Y 氏のいう「地域に濃い情報を発信する。」という方針とのズレが生じると考えられる。

5. 市民活動団体側からの考察

勉強会型、情報交換型、独自型の3類型をそれぞれ項目ごとにまとめていき、それぞれの交流の場と情報発信についてまとめる。

5-1 交流の場について

勉強会型

表4 勉強会型のまとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	主に、活動の場としてのみ利用している団体と、交流の場としても利用している団体で半数に分かれた。
ひこね市民活動センター利用目的別の団体数	活動の場として利用している団体：3団体 交流の場として利用している団体：3団体 事務局として利用している団体：1団体

勉強会型のひこね市民活動センターの利用目的としては、活動の場としての利用、交流の場として利用している団体がいる一方で、交流を通して自分の活動を広めようとしている団体の存在も明らかになった。

情報交換型

表5 情報交換型のまとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	交流の場としてのみの利用するという団体と、交流を通して他団体に対する情報発信が行われていた。
ひこね市民活動センター利用目的別の団体数	活動の場として利用している団体：1団体 交流の場として利用している団体：7団体 事務局として利用している団体：0団体

全ての団体においてひこね市民活動センターはさまざまな団体との交流の場としての役割を果たしていると考えられる。

独自型

表6 独自型のまとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	センターにはほぼ登録しているのみである。
ひこね市民活動センター利用目的別の団体数	活動の場として利用している団体：0団体 交流の場として利用している団体：0団体 事務局として利用している団体：0団体

ひこね市民活動センターを交流の場の一つと考えている団体が存在する一方で、積極的に交流の場として利用していない団体、ひこね市民活動センターの必要性を感じていない団体が存在することが明らかになった。

5-2 交流の場についてのまとめ

実際の意見をみても、情報交換型が最も交流の場に対して利用意欲が高い。勉強会型の中には、活動の場としての利用以外にも、交流の場としての利用を行う団体もみられた。独自型については全体的に交流の場としての利用意欲

が低かった。このことから、ひこね市民活動センターは全ての団体にとって必要な交流の場であるとはいえないと考えられる。

5-3 情報発信媒体について

情報発信媒体について類型ごとにまとめる。

勉強会型

表7 勉強会型まとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	主に、活動の場としてのみ利用している団体と、交流の場としても利用している団体で半数に分かれた。
情報発信に対する意識	意識の高い団体：3団体 やや高い団体：2団体 迷っている団体：なし 消極的な団体：1団体
情報発信の内容	運営スタッフの募集を目的としている団体：1団体 イベント参加者の募集を目的としている団体：4団体 普及を目的としている団体：1団体 その他の内容を発信している団体：1団体（情報発信に消極的な団体）
利用広報媒体	最も多く利用されている広報媒体：口コミ 個人で活動している組織の媒体数：1～4種類 団体で活動している組織の媒体数：1～5種類 その他：イベント告知を望んでいる団体がいる一方で、大勢に來れると対応できないという意見もみられた。
広報ひこね利用に対する意識	「広報ひこね」を利用している団体：1団体 その他：情報発信に対する意識は比較的高い類型であるが、「広報ひこね」を利用している団体は1団体であった。 その他：「広報ひこね」が活動に活かされた話や団体がいる一方で、利用しなかったが利用できなかったと話した団体もいた。
エフエムひこね利用に対する意識	イベント告知をしたい：4団体 活動の話をしたい：1団体 利用に関しては消極的：1団体 その他：
エフエムひこね利用に対する不安	窓口が分からない：1団体 エフエムひこねが市民活動団体に興味があるか分からない：2団体 エフエムひこねの広報力に疑問がある：なし その他：出演した場合うまく喋れるか分からないという意見がみられた。

イベント情報の発信に対する傾向がみられたために、地域情報の発信を放送局コンセプトに掲げるエフエムひこねを情報発信の場として利用することも考えられる。

情報交換型

表8 情報交換型まとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	交流の場としてのみの利用するという団体と、交流を通して他団体に対する情報発信が行われていた。
情報発信に対する意識	意識の高い団体：6団体 やや高い団体：なし 迷っている団体：なし 消極的な団体：なし
情報発信の内容	運営スタッフの募集を目的としている団体：3団体 イベント参加者の募集を目的としている団体：3団体 普及を目的としている団体：2団体 その他の内容を発信したい団体：なし
利用広報媒体	最も多い利用広報媒体：口コミ 個人で活動している組織の媒体数：2種類 団体で活動している組織の媒体数：3～6種類 その他：人数が多くないので、広報に力を入れられないという意見がみられた。
広報ひこね利用に対する意識	「広報ひこね」を利用している団体：1団体 その他：情報発信に対する意識は全団体で高かったが、「広報ひこね」を利用している団体は1団体のみだった。 その他：「広報ひこね」を利用していない理由として特徴的なものは見られなかった。
エフエムひこね利用に対する意識	イベント告知をしたい：1団体 活動の話をしたい：なし 利用に関しては消極的：2団体 その他：名前を売るためにとにかく人前に露出していくことの必要性についてコメントがあった。
エフエムひこね利用に対する不安	窓口が分からない：2団体 エフエムひこねが市民活動団体に興味があるか分からない：3団体 エフエムひこねの広報力に疑問がある：1団体 その他：エフエムひこねを知らないという意見がみられた。

エフエムひこねの利用に関しては、情報発信媒体の一つと

して考える一方で、窓口が分からない、自分たちの活動に興味を持っているか分からないなど、市民活動団体にとってエフエムひこね側の考えが不透明であるため、情報発信媒体として認識されにくいと考えられる。

独自型

表9 独自型まとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	センターにはほぼ登録しているのみである。
情報発信に対する意識	意識の高い団体: 3団体
	やや高い団体: なし
	迷っている団体: 1団体
	消極的な団体: 1団体
情報発信の内容	運営スタッフの募集を目的としている団体: なし
	イベント参加者の募集を目的としている団体: 2団体
	普及を目的している団体: 3団体
	その他の内容を発信したい団体: なし
利用広報媒体	最も多い利用広報媒体: 10種類
	個人で活動している組織の媒体数: 8種類
	団体で活動している組織の媒体数: 4~10種類
	その他: 個人で活動しているのは「団体13」であるが、活動にある程度満足したため、現在はほとんど口コミだけの利用しか行っていない。
広報ひこね利用に対する意識	「広報ひこね」を利用している団体: 2団体
	その他: 2団体中の1団体は「団体13」であるが、現在は「広報ひこね」についても利用していない。
	その他: 広報ひこねへの信頼を寄せる団体がいる一方で、自分たちの言おうとしていることが、「広報ひこね」に掲載するための検閲で変わってしまうと否定的な意見もみられた。
エフエムひこね利用に対する意識	イベント告知をしたい: なし
	活動の話をしたい: 1団体
	利用に関しては消極的: 2団体
	その他: 市民活動にとって、エフエムひこねを含めた情報発信の場がなかなかないとコメントする団体のみみられた。
エフエムひこね利用に対する不安	窓口が分からない: 1団体
	エフエムひこねが市民活動団体に興味があるか分からない: なし
	エフエムひこねの広報力に疑問がある: 1団体
	その他: エフエムひこねでの情報発信の前に、情報発信すること自体に消極的な団体のみみられた。

あまりひこね市民活動センターの利用を行わない独自型は、利用広報媒体として、さまざまなメディアを利用している。また、独自型には彦根市内だけでなく、滋賀県全域や全国に目を向けて活動している団体が見られるために、情報発信媒体としてのエフエムひこね利用意思は他の類型よりも低いと考えられる。

5-4 情報発信媒体についてのまとめ

市民活動団体の情報発信媒体としてのエフエムひこねの利用類型ごとに異なってくると考えられる。勉強会型は、口コミなどじょじょに広まる広報を求めている一方で、エフエムひこねについてはイベント告知をする際に利用したいという意見が多かったことから、利用可能であると考えられる。情報交換型に関しては、エフエムひこねに対して評価する意見がみられる。一方で両類型においてエフエム彦根に対する疑問点や不安な点がみられた。こういった点が改善されない限り、今後の市民活動団体側からの積極的な情報発信媒体としてのエフエムひこね利用は望めないと考えられる。また、独自型については今後も積極的なエフエムひこね利用は望みにくいと考えられる。

6. 結論

6-1 彦根市における交流の場の必要性について

彦根市における交流の場の必要性については、類型ごとに

異なっていることが明らかになった。しかし、彦根市における交流の場の機能として、交流の場で行われた情報交換を外に発信するという情報発信の機能加わることによりさらに交流の場は活発になると考えられる。この情報発信によって、交流の場の存在や、情報が彦根市に行き渡り、その情報を得た市民、市民活動団体が交流の場に加わると考えられるからである。

6-2 交流の場としてのひこね市民活動センター

情報交換型と勉強会型の一部にとってひこね市民活動は交流の場としての機能を果たすと考えられるが、一般的に民間の中間支援センターの資金難といわれていることから、この交流の場を継続していくことには大きな労力が必要であると考えられる。また、ひこね市民活動センター代表の言葉から、市民活動センターとしての広さについても課題があると考えられる。今後、多数の団体が情報交換会を訪れる状況が発生した際には、ひこね市民活動センターの広さでだけでは十分ではないと考えられる。

6-3 彦根市における今後の市民活動団体の交流の場

彦根市における市民活動団体の交流の場は、一般的な市民活動センターのように交流の場の機能など多様な機能が一極に集中するのではなく、ひこね市民活動センターをはじめとする、晒庵や、力石など分散型に分散していると考えられる。それぞれについてはそれほど大きなスペースを保有していないが、分散されることによりそれぞれ交流の場としての機能が保たれていると考えられる。そのため、今後の彦根市における交流の場の課題の一つとして、こういった分散的な交流の場がいかに結束し交流の場同士の情報交換を進めていくかであると考えられる。

6-4 彦根市における今後の市民活動団体の情報発信

エフエムひこねはコミュニティエフエムでありながら、市民との関係が薄いメディアであると考えられる。しかし、現在の市民活動団体を取材しているパーソナリティがいるように、地道に取材していくことで彦根市民との交流が生まれ、まちのラジオとしての認識も増すのではないかと考えられる。そこで今後はエフエムひこね全体として市民活動団体に注目していくことが望まれる。

<参考文献>

- 1) 滋賀県県民文化生活部県民文化課 NPO 活動促進室:ポランティア NPO ガイドブック,2006
- 2) 椎木哲太郎:日本型「市民活動」の源流 1868-1951,経営・情報研究:多摩大学研究紀要,7,pp.65 - 82,2003
- 3) 庄治睦浩:地域を支える(438)大阪府みのお市民活動センター(大阪府箕面市)活動拠点の提供で NPO 支援,厚生福祉,5150,11,2003
- 4) 大西 隆:まちづくりを支える財源,地域開発,490,pp.2-6,2005
- 5) 伊丹敬之:場の論理とマネジメント,東洋経済新報社,p.42,2005
- 6) 塚本美恵子:コミュニティ放送への市民参加 コミュニティ放送局の現状とエフエム入間の事例から,文化情報学:駿河台大学文化情報学部紀要,9(2),pp.47 - 63,2002
- 7) 福井文雄・他:京都コミュニティ放送の評価に関する調査報告『市民制作番組の発信と受信の意識』,立命館大学産業社会学部津田研究室,2006

Place of exchange seen from the citizens activity group in Hikone City and research on information sending

Kondo laboratory 0312039 Tomohide Mori

1. Background of research

1-1 Background of this research

Recently, needs of the society are said that it is not possible to complicate, and to meet needs of well with the administration and corporate while diversifying it. It makes 'At last, "Civic action" of Japan obtained the social cognition through the enactment of the nonprofit activities promotion law in 1998.' Mr. Sugai who is the center head of the civic action center of seeing 'NPO and the volunteer group in various fields gather, cooperation and making the side between groups a network are aimed at, and not having done in an individual group becomes possible.' It is thought that it is the one to useful for the citizens activity group the place of the exchange as made that Mr. Onishi is 'It ties the citizens who think similarly by what activity where is done being transmitted.' The information transmission between between the citizens activity groups is necessary as made it, and it is thought that the information sending is necessary, saying that 'Place of the exchange' for that.

1-2 Purpose of this research

In this research, the current state of the place of the exchange of the citizens activity group in Hikone City and the problem are clarified. In addition, the possibility of the FM lamplight mixing up that is community FM is referred as a medium of sending information on the citizens activity group.

1-3 Meaning of this research

The place of the exchange of the future in Hikone City that the citizens activity group requests and the necessity can be referred by clarifying the current state of the place of the exchange of the citizens activity group in Hikone City and the problem. Moreover, the possibility of mutual cooperation with the FM lamplight mixing up that is community FM to which 'The region stick' hangs as an information sending medium can be referred.

1-4 About the place of the exchange of the citizens activity group

Generally, the existence of the citizens activity center is thought as a place for the exchange of the citizens activity group. It is thought that various functions such as 'Information sending' exist in the citizens activity center, and it tends to concentrate on the citizens activity center as a place of the exchange of the region usually. Then, 'Citizens activity center' in Hikone City was paid to attention, and the place of the exchange of the citizens activity group in Hikone City was paid to attention.

2. Research method

2-1 Examination method

Where's of the report was able to be understood in 48 groups that registered to the citizens activity center, the object was squeezed to 18 groups that accepted the hearing investigation cooperation, and hearing was investigated. Moreover, to consider the place and the information sending medium of the exchange of the activity group, hearing was investigated for the FM lamplight mixing up with the citizens activity center.

2-2 Analysis method

The possibility of the FM lamplight mixing up is chiefly considered respectively as an information sending medium about lamplight mixing up Shi people activity center in this research as a place for the exchange of the citizens activity group. In addition, the place of the exchange of the citizens activity group and consideration concerning the information sending are brought together. Figure 1 shows the flow of the analysis concerning the citizens activity group. A study meeting type, an information exchange type, an original type, and after it classifies it, the place of the exchange and consideration concerning the information sending of each pattern are done as a flow of the analysis based on a central purpose of use of the citizens activity group.

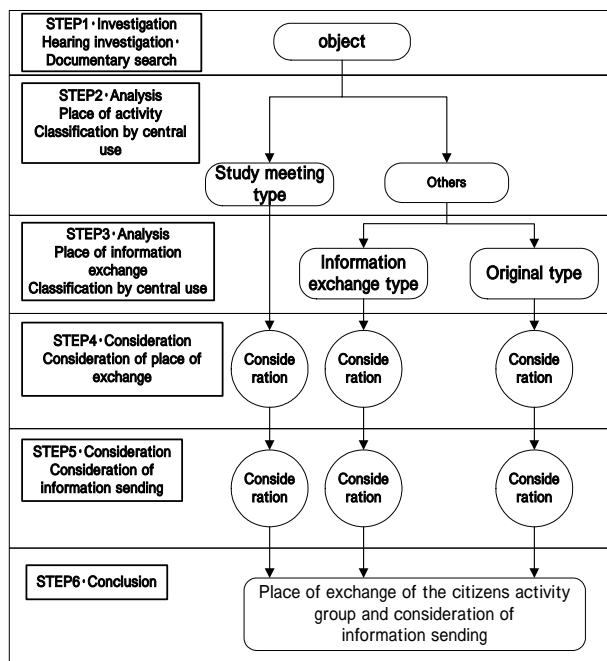


Figure1 Flow chart of analysis

Table1 Feature of each pattern

Pattern	Feature
Study meeting type	It is a group that chiefly uses the citizens activity center as a place for the activity. It uses it according to the group as a place for the exchange besides the place of the activity.
Information exchange type	It is a group that uses it as a place for the exchange as for the Hikone City people activity group though is not as a place for the activity. September, 2006-in December the information exchange association . it is always a group once that attends.
Original type	The group that doesn't use the center as a place of the activity or a place of the exchange though registered to the citizens activity center. September, 2006 in December. Group that never attends information exchange association

3. About the place of the exchange of the citizens activity group

3-1 Role that the citizens activity center plays

The current state that it was not easy to transmit in the information exchange done in the center outside was clarified at the citizens activity center. Then, it is thought that 'Information sending' of sending the outside the information exchange done in the place of the exchange is necessary as the function requested from the place of the exchange.

3-2 About the place of other exchanges in Hikone City

It is clarified to use it as a place for the exchange such as 'Playhouse Saraiori' and '"Station on the street" private school ..mixing up the lamplight.. Chikaraishi' the citizens activity group as a place for the exchanges other than the citizens activity center.

4. About the place of sending information on the citizens activity group

4-1 Intention of the citizens activity group

information sending on the part of FM

lamplight mixing up

The current state of not positively requesting the point of contact with the citizens activity group was clarified now though FM Gawa had the accepted intention.

4-2 Situation of the citizens activity group program in FM lamplight mixing up

The program that treated only information on the citizens activity group when mixing up it the FM lamplight is not broadcast now. It is not handled too much greatly by extent in which of the citizens activity group is broadcast once a week in various information broadcast on the class.

4-3 Possibility of FM lamplight mixing up as information sending medium

It is thought it is divided in opinion whether to do broadcasting thought that it is accepted by a lot of listeners as media internally of the FM lamplight mixing up. Whether it approaches the popularized program like an existing mass media by becoming a

broadcast program accepted by a lot of listeners is thought.

5. Consideration from the citizens activity group

5-1 Summary of place of exchange

The information exchange type is high even if an actual opinion is seen and the use desire is the highest compared with the place of the exchange. The group that used it as a place of the exchange was seen in the study meeting type besides use as the place of the activity. The use desire of an original type as the place of the exchange was overall low. It is thought that the citizens activity center is not necessarily a place of a necessary exchange for all groups from this.

5-2 About the information sending medium

It is thought that it differs in each use pattern of the FM lamplight mixing up as the medium of sending information on the citizens activity group.

6. Conclusion

6-1 About the necessity of the place of the exchange in Hikone City

It was clarified to be necessary of the place of the exchange in Hikone City different in each pattern.

6-2 The citizens activity center as place of exchange

It is thought that there is a problem from citizens activity center representative's word about the area as the citizens activity center. When the situation in which a lot of groups visit the information exchange association is generated, it will be thought enough only by the area at the citizens activity center in the future.

6-3 Place of exchange of the citizens activity group in the future in Hikone City

It is thought that the place of such a decentralized exchange unites as one of the problems of the place of the exchange in Hikone City in the future very and the exchange of information on the place of the exchange is advanced.

6-4 Sending of information on the citizens activity group in the future in Hikone City

Whether recognition as the radio of waiting increases, too is thought by the exchange's with the Hikone City people giving birth in honestly covering as there is a personality to cover a present citizens activity group. Then, it is hoped to be going to pay attention to the citizens activity group as the entire FM in the future.

目次

第一章	序論	1
1 - 1	本研究の背景	1
1 - 2	本研究の目的と意義	1
1-2-1	本研究の目的	1
1-2-2	本研究の意義	1
1 - 3	市民活動団体の交流の場と情報発信について	1
1-3-1	市民活動団体の交流の場	1
(1)	本研究における「市民活動」の位置づけ	1
(2)	交流の場の定義	2
(3)	地域における市民活動団体の交流の場について	2
(4)	彦根市における市民活動団体の交流の場について	2
1-3-2	市民活動団体の情報発信媒体としてのコミュニティ FM	2
(1)	市民活動団体とコミュニティ FM の結びつきについて	2
(2)	コミュニティ FM の概要	3
(3)	既往研究からみるコミュニティ FM の特性	5
(4)	既往研究からみるコミュニティ FM への市民活動団体の参加	6
(5)	彦根市における市民活動団体の情報発信	6
1 - 4	本研究の構成	6
第二章	研究方法	9
2 - 1	研究対象の選定	9
2 - 2	調査方法	9
2-2-1	ヒアリング目的と項目について	9
(1)	ひこね市民活動センター	9
(2)	エフエムひこね関係者	10
(3)	ひこね市民活動センター登録団体	12
2-2-2	ヒアリング調査の実施	13
(1)	ひこね市民活動センター登録団体に対するヒアリング調査	13
(2)	エフエムひこねに対するヒアリング調査	15
2 - 3	分析方法	16
2-3-1	分析の流れ	16
2-3-2	市民活動団体の類型化について	17

第三章	彦根市における市民活動団体の交流の場について	19
3 - 1	ひこね市民活動センターについて	19
3-1-1	ひこね市民活動センターについて	19
(1)	ひこね市民活動センターの概要	19
(2)	ひこね市民活動センターの登録団体の特徴	20
(3)	ひこね市民活動センターの変遷	21
(4)	ひこね市民活動センター利用料金表	23
3-1-2	ひこね市民活動センターの果たす役割	24
(1)	ひこね市民活動センターの機能について	24
(2)	ひこね市民活動センターにおける情報発信について	25
(3)	情報交換会が果たす役割	26
3-1-3	ひこね市民活動センター管理運営団体について	27
(1)	ヒアリング対象者	27
(2)	『団体 1』の概要	27
(3)	ひこね市民活動センターとの関わり	28
(4)	『団体 1』の広報について	29
(5)	『団体 1』としてのエフエムひこねの利用について	30
3 - 2	彦根市における他の交流の場について	31
3-2-1	プレイハウス晒庵の概要	31
3-2-2	プレイハウス晒庵と市民活動団体の関わりについて	31
3 - 3	本章のまとめ	32
第四章	エフエムひこね側からみた市民活動団体情報発信の可能性について	34
4 - 1	エフエムひこねの概要	34
4 - 2	エフエムひこねとまちの関わり	34
4-2-1	番組の特徴	34
4-2-2	まちの出演者に対するヒアリング	35
(1)	出演までの経緯	36
(2)	番組内容	37
(3)	出演者側からみたエフエムひこねの評価点と改善すべき点	38
4-2-3	放送以外での聴取者との関わり	39
4 - 3	エフエムひこね側の市民活動団体情報発信の意思	39
4 - 4	エフエムひこねにおける市民活動団体番組	41
4-4-1	過去の市民活動団体番組	41
4-4-2	現在の市民活動団体番組	42
(1)	エフエムひこね側からみた現在の市民活動団体番組について	42

(2)	ひこね市民活動センター登録者側からみた市民活動団体番組について	43
(3)	市民活動団体の情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性について	45
4 - 5	本章のまとめ	46
第五章	市民活動団体の交流の場と情報発信についての考察	48
5 - 1	類型ごとの特徴と分類項目について	48
5-1-1	各類型の特徴について	48
(1)	勉強会型の特徴	48
(2)	情報交換型の特徴	52
(3)	独自型の特徴	56
5-1-2	分類項目について	60
5 - 2	類型ごとにみた交流の場としてのひこね市民活動センターについて	61
5-2-1	勉強会型	61
5-2-2	情報交換型	64
5-2-3	独自型	65
5-2-4	彦根市における市民活動団体の交流の場についてのまとめ	66
5 - 3	類型ごとにみた情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性について	67
5-3-1	情報発信意欲について	67
(1)	勉強会型	67
(2)	情報交換型	70
(3)	独自型	72
(4)	情報発信意欲についてのまとめ	75
5-3-2	情報発信の内容について	76
(1)	勉強会型	76
(2)	情報交換型	79
(3)	独自型	82
(4)	情報発信の内容についてのまとめ	84
5-3-3	利用広報媒体について	85
(1)	勉強会型	85
(2)	情報交換型	91
(3)	独自型	95
(4)	利用広報媒体についてのまとめ	99
5-3-4	エフエムひこね利用について	101
(1)	勉強会型	101
(2)	情報交換型	105
(3)	独自型	109

(4)	エフエムひこね利用についてのまとめ	112
5-3-5	彦根市における市民活動団体の情報発信媒体についてのまとめ	113
5 - 4	類型ごとのまとめ	114
5-4-1	勉強会型	114
5-4-2	情報交換型	116
5-4-3	独自型	118
第六章	結論	120
6 - 1	各章のまとめ	120
6 - 2	彦根市における今後の市民活動団体の交流の場について	121
6-2-1	彦根市における交流の場の必要性について	121
6-2-2	交流の場としてのひこね市民活動センター	121
6-2-3	彦根市における今後の市民活動団体の交流の場について	121
6 - 3	彦根市における今後の市民活動団体の情報発信媒体について	122
6 - 4	今後の課題	122

謝辞

APPENDIX

図表目次

【図】

図 1 - 1	京都市下京区の市民の情報発信したい内容	3
図 1 - 2	コミュニティ放送制度(放送法施行規則改正等の要旨)	3
図 2 - 1	分析の流れ	16
図 3 - 1	ひこね市民活動センターの概観	19
図 3 - 2	情報交換会の様子	27
図 3 - 3	晒庵概観	31
図 3 - 4	晒庵内部	31
図 4 - 1	過去の市民活動団体番組の番組形態	41

【表】

表 1 - 1	塚本の分類による放送局コンセプト別コミュニティ FM 局数	5
表 2 - 1	ひこね市民活動センターに対するヒアリング項目	10
表 2 - 2	O.Y 氏に対するヒアリング項目	10
表 2 - 3	A.Y 氏に対するヒアリング項目	11
表 2 - 4	Y.H 氏に対するヒアリング項目	11
表 2 - 5	T.Y 氏に対するヒアリング項目	11
表 2 - 6	市民活動団体に対するヒアリング項目	12
表 2 - 7	ひこね市民活動センターに対するヒアリング日時	14
表 2 - 8	市民活動団体のヒアリング対応者	14
表 2 - 9	エフエムひこね関係者に対するヒアリング日時	15
表 2 - 10	情報交換会出席団体(2006 年 9 月～12 月)	17
表 2 - 11	対象団体の類型化リスト	18

表 3 - 1	ひこね市民活動センター登録者名簿	20
表 3 - 2	ひこね市民活動センター利用料金表	23
表 3 - 3	『団体 1』の概要	27
表 3 - 4	『団体 1』の事業部別広報媒体	29
表 4 - 1	エフエムひこねの概要	34
表 4 - 2	エフエムひこね番組表	35
表 4 - 3	ヒアリング対応者の属性	35
表 4 - 4	番組出演までの経緯	36
表 4 - 5	番組内容に関するコメント	37
表 4 - 6	エフエムひこねに対するコメント	38
表 5 - 1	勉強型に分類される団体とその活動目的	48
表 5 - 2	『団体 2』の概要	48
表 5 - 3	『個人サポーター・K.K 氏』概要	49
表 5 - 4	『団体 3』の概要	49
表 5 - 5	『団体 4』の概要	50
表 5 - 6	『団体 5』の概要	51
表 5 - 7	『団体 6』の概要	51
表 5 - 8	情報交換型に分類される団体とその活動目的	52
表 5 - 9	『団体 7』の概要	52
表 5 - 10	『団体 8』の概要	53
表 5 - 11	『団体 9』の概要	53
表 5 - 12	『団体 10』の概要	54
表 5 - 13	『個人サポーター・K.S 氏』の概要	55
表 5 - 14	『団体 11』の概要	55
表 5 - 15	独自型に分類される団体とその活動目的	56
表 5 - 16	『団体 12』	56
表 5 - 17	『団体 13』の概要	57
表 5 - 18	『団体 14』の概要	58
表 5 - 19	『団体 15』の概要	58
表 5 - 20	『団体 16』の概要	59
表 5 - 21	勉強会型の交流の場に関するコメント	61
表 5 - 22	勉強会型の交流の場についてのまとめ	63
表 5 - 23	情報交換型の交流の場に関するコメント	64
表 5 - 24	情報交換型の交流の場についてのまとめ	64

表 5 - 25	独自型の交流の場に関するコメント	65
表 5 - 26	独自型の交流の場についてのまとめ	66
表 5 - 27	勉強会型の情報発信意欲に関するコメント	67
表 5 - 28	情報交換型の情報発信意欲に関するコメント	70
表 5 - 29	独自型の情報発信意欲に関するコメント	72
表 5 - 30	勉強会型の情報発信の内容に関するコメント	76
表 5 - 31	情報交換型の情報発信の内容に関するコメント	79
表 5 - 32	独自型の情報発信の内容に関するコメント	82
表 5 - 33	勉強会型の利用広報媒体	85
表 5 - 34	勉強会型の利用広報媒体に関するコメント	86
表 5 - 35	情報交換型の利用広報媒体	91
表 5 - 36	情報交換型の利用広報媒体に関するコメント	92
表 5 - 37	独自型の利用広報媒体	95
表 5 - 38	独自型の利用広報媒体に関するコメント	96
表 5 - 39	勉強会型のエフエムひこね利用に関するコメント	101
表 5 - 40	情報交換型のエフエムひこね利用に関するコメント	105
表 5 - 41	独自型のエフエムひこね利用に関するコメント	109
表 5 - 42	勉強会型のまとめ	114
表 5 - 43	情報交換型のまとめ	116
表 5 - 44	独自型のまとめ	118

第一章

序論

第一章 序論

1-1 本研究の背景

近年、社会のニーズの複雑化、多様化する中で行政や企業だけではそれらのニーズにうまく対応することが出来なくなっているといわれている。¹⁾その中で椎木(2003)²⁾は、「1998年の特定非営利活動促進法の制定を経て、日本の「市民活動」はようやく社会的認知を得た。」としている。『みのお市民活動センター』のセンター長である須貝氏は「さまざまな分野のNPO、ボランティア団体が集うことで、団体間の横の連携、ネットワーク化が図られ、個々の団体では出来なかったことが可能になる。」³⁾としているように、市民活動団体にとって交流の場が有用なものであると考えられる一方で、大西(2005)⁴⁾が、「どこでどのような活動が行われているかが伝達されることによって、思いを同じくする市民が結び付けられる。」としているように、市民活動団体間による相互の情報伝達が必要であり、そのための『交流の場』と『情報発信』が必要であると考えられる。

1-2 本研究の目的意義

1-2-1 本研究の目的

本研究では、彦根市における市民活動団体の交流の場の現状と課題を明らかにする。さらに市民活動団体の情報発信媒体として、コミュニティ FM であるエフエムひこねの可能性について言及する。

1-2-2 本研究の意義

彦根市における市民活動団体の交流の場の現状と課題を明らかにすることで、今後の彦根市における市民活動団体の求める交流の場とその必要性について言及できる。また、情報発信媒体として『地域密着』を掲げるコミュニティ FM である、エフエムひこねとの相互協力の可能性について言及できる。

1-3 市民活動団体の交流の場と情報発信について

1-3-1 市民活動団体の交流の場

(1) 本研究における「市民活動」の位置づけ

『市民』について定義されているものとして、以下の論文が挙げられる。津田(2006)⁵⁾は「＜市民＞とはおおまかに、『現代社会において、自己決定する意思をもち、権利意識と責任をもって政治や社会に参加し自治を目指す主体的生活者』一般をさすことにし、自らの生活圏における情報環境、コミュニケーション環境や政策についても、参加・自己決定してゆく人々である。」としている。

また、山岡(1998)⁶⁾は、『市民』、『市民活動』について、「特に確立した定義があるわけではないが、『社会に対して責任を感じた人々』をとりあえず『市民』と定義し、その個人個人の意識すなわち市民意識を基盤にして行われる活動を市民活動とし、それを組織的に行う団体を市民活動団体ということにしておこう。」としている。また、須田(1998)⁷⁾は「市民運動は、世の中の不合理をただす活動である。」としている。

これらはともに市民活動についてはっきりと定義しているわけではない。このことから『市民活動』という言葉は非常に曖昧な存在であることが分かる。しかし、この両者から『市民』にとって重要な要素として、自己決定の意識、社会に対する責任⁸⁾、の2点が推測される。

よって、本研究では市民活動の定義として、『自己決定の意思と社会に対する責任を持つ個人が社会にとって有益である活動』とする。また、市民活動団体をその個人が集団となり、同一目的で活動する団体とする。

(2) 交流の場の定義

伊丹(2005)⁹⁾は『場』の定義について、「場とは、人々がそこに参加し、意識・無意識のうちに相互に観察し、コミュニケーションを行い、相互に理解し、相互に働きかけ合い、相互に心理的刺激をする、その状況の枠組みのことである。」としている。

そこで、本研究における『交流の場』については、多種多様な人々による情報交換が行われる場として定義する。

(3) 地域における市民活動団体の交流の場について

本研究を行うにあたり、一般的な市民活動団体の交流の場として、各地の市民活動センターの果たす役割の傾向について調査した。ポータルサイト『Yahoo!JAPAN』¹⁰⁾において『市民活動センター』というキーワードで検索し、ヒットした上位5箇所の市民活動センターである、『市民活動センター神戸』¹¹⁾『東京ボランティア・市民活動センター』¹²⁾『財団法人 かわさき市民活動センター』¹³⁾『足利市民活動センター』¹⁴⁾『宇部市民活動センター「青空」』¹⁵⁾の果たす役割から、市民活動センターの果たす役割として、『市民活動団体の相談の場』『活動の場の提供』『情報の提供・発信の場』『交流の場』『市民活動の調査・研究』といった傾向がみられた。このことから一般的な地域においては、市民活動センターが交流の場の役割をはじめとする多様な機能を果たしていると考えられる。

(4) 彦根市における交流の場について

彦根市における市民活動団体間の情報交換は、市民活動団体同士の相互訪問や市民活動団体に関する会議において話し合いがもたれるなどが考えられる。その中で、ひこね市民活動センターにおける『情報交換会』が一つの『交流の場』であると考えられる。

1-3-2 市民活動団体の情報発信媒体としてのコミュニティ FM

(1) 市民活動団体とコミュニティ FM の結びつきについて

本研究において、市民活動団体とコミュニティ FM に注目する理由として、立命館大学産業社会学部津田ゼミが 2005 年に行った調査¹⁶⁾が挙げられる。

この調査は京都市下京区の 4 学区内の 800 世帯に対して行われており、下京区の住民のコミュニティ FM への関与意識を調査したものである。有効回答数 515 件中、京都コミュニティ放送局を用いた情報発信を望んだ回答数は 119 件であった。さらにこの 119 件の中から、複数回答であるが『政治』『社会福祉』『環境』について、情報発信に対する関心の高さが明らかになった。この結果より、同調査では京都市下京区の住民 800 世帯の住民においては、私的なテーマよりも公的なテーマに対する情報発信の意欲が高いとしている。

これは、市民活動に通ずる意識を市民が潜在的に有しているからであると考えられる。そこで本研究では市民活動団体の情報発信の媒体としてコミュニティ FM に注目する。

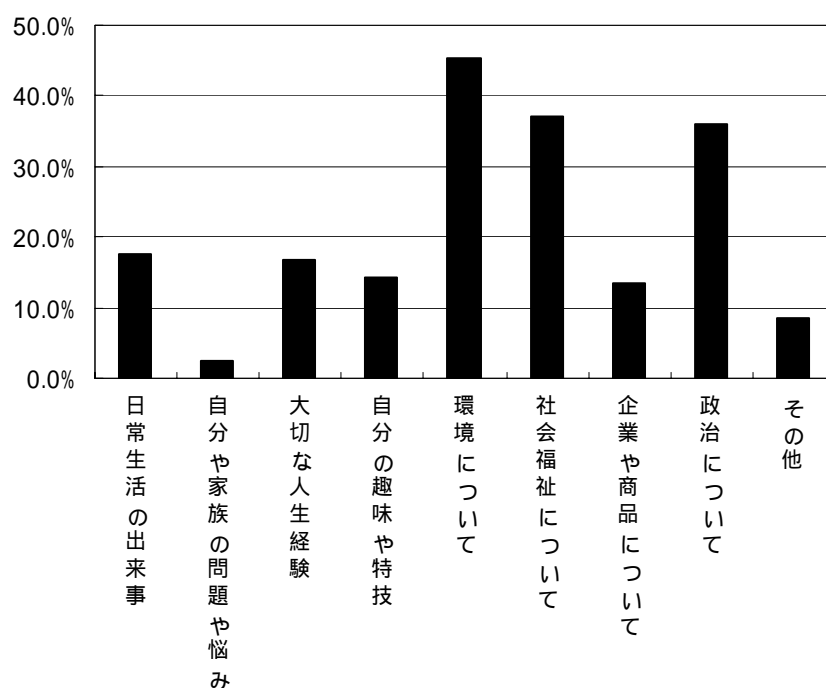


図 1-1 京都市下京区の市民の情報発信したい内容

(2) コミュニティ FM の概要

コミュニティ FM の興りとしては、1970 年代、欧米では電波管理の規制緩和が進み、市民のコミュニケーションを目的とした小規模ラジオ局が次々に誕生したことに始まる。日本でも 1980 年代、同様のラジオ局が広まりを見せていき、その後さまざまな変遷を経て、

郵政省は1991年に「コミュニティ放送」という新しい放送制度の構想を発表した。さらに翌1992年にコミュニティ放送制度が施行されるに至った。¹⁷⁾樋口(2005)¹⁸⁾はコミュニティFMについて「市町村(特別区を含む。政令指定都市では区)の一部の区域において、地域に密着した情報を提供するために、1992年1月に制度化された超短波(FM)を指す。一般の放送局同様、総務大臣の免許を受けて開局・運営するのが民間放送である。」としている。2006年12月20時点で、日本全国に200局を超えるコミュニティFM局が開局されている。

コミュニティ放送制度(1992年1月10～)
〔放送法施行規則等の改正の要旨〕

1. コミュニティ放送は、超短波放送用周波数を使用する放送であるため、超短波放送を行う一般放送事業者の放送を「県域放送」と「コミュニティ放送」に区分。
2. コミュニティ放送の定義を定める。
3. 全国各地域で実施されるコミュニティ放送の放送対象地域ごとに1系統の放送の普及を図る。
4. 市町村内の一部を対象とする小規模なラジオ局であることを勘案し、その運営に要する負担を減らすため、放送義務を緩和。
5. 行政情報など共通の情報を提供できるようにするため、コミュニティ放送の普及のために特に必要がある場合、同一市町村内に同一業者が複数のコミュニティ放送局を開局することを認める。

〔免許方針の要旨〕

1. 放送の目的

市町村内の商業・業務・行政等の機能の集積した区域、スポーツ・レクリエーション・教養文化活動等の活動に資するための施設の整備された区域等において、コミュニティ情報・行政情報・福祉医療情報・地域経済産業情報・観光情報等地域に密着した情報を提供することを通じて、当該地域の振興その他公共の福祉の増進に寄与する。

2. 周波数

周波数の選定はに当たっては、76MHzから90MHzまでの超短波放送用周波数の中から、既設の超短波放送の実施に支障を及ぼさない範囲において、1市町村ごとに1波選定されたものを使用する。

3. 空中戦電力

空中戦電力は、原則として1W以下で必要最小限のものとする。

(1991(平3)年12月20日 郵政省報道資料より)

図 1-2 コミュニティ放送制度(放送法施行規則改正等の要旨)¹⁹⁾

(3) 既往研究からみるコミュニティ FM の特性

平塚(2000)²⁰⁾は、1995 年 1 月に発生した阪神淡路大震災によるコミュニティ FM 局の活躍による地域災害情報メディアとしての世間からの注目の高まりについて言及しているように、コミュニティ FM は防災メディアとしての注目を集めたが、近年では、『地域密着』という、放送が届く範囲の住民に、そのまちの情報を発信する点に重点が置かれていると考えられる。

船津(1999)²¹⁾の行った、1998 年 8 月のアンケート調査によると、コミュニティ FM 局の設立理由としては「災害情報の提供」(86.6%)が最も多く、次いで「地域情報の提供」(83.6%)、「地域の活性化」(76.1%)、「情報の発信」(67.2%)、「地域文化の育成」(65.7%)、「住民の参加」(52.2%)と続いている。これを受けて、塚本(2002)²²⁾は「各局のアンケート結果と放送局コンセプトには、違いが見られるが、これは、1998 年の調査時が阪神・淡路大震災後であったことから、各コミュニティ放送局でも、防災が強く意識されていたことが考えられる。しかし放送局のコンセプトから見る限り、「防災・災害情報」よりも「地域/地域に密着した」の方が高い比率となっている。」としている。またその中で塚本は「各局の放送局コンセプトから見ると、地域に密着した住民参加型の地域情報と、防災をコンセプトにした放送局作りを目指していることが分かる。」としている。

表 1-1 塚本の分類による放送局コンセプト別コミュニティ FM 局数

放送局コンセプト	局数
地域密着型/地域に密着した	26局
市民参加/市民参加型/住民参加/みんなが参加する	19局
地域情報/市民情報/生活情報	12局
防災/災害	11局
交流/市民交流	6局
地域の活性化/地域振興	5局
親しまれる	5局
市民のための/地域住民のための	5局
情報発信	4局
日本の心の歌	4局
不明	55局
合計	97局

また、坂田(2003)²³⁾はコミュニティ FM の性質として、「制度面においても、コミュニティ放送局を設立・運営する要件として、放送の目的以外に地域社会との協力関係が明確に

うたわれている。例えば、「地域住民の要望にこたえる放送が、出来る限り 1 週間の 50%以上を占めていること」などの要件があり、多くのコミュニティ放送局は地域に密着した情報の発信という形で実践している。」としている。

(4) 既往研究からみるコミュニティ FM への市民活動団体の参加

津田(2001)²⁴⁾は、既存のメディアによる放送では、「地域密着番組」と称する番組の多くが、アナウンサーやレポーターが街角や現場に行って中継し、地域の人たちにインタビューする形がほとんどで、基本的に「市民・視聴者にマイクを渡す」という一線を越えることがない点を指摘している。しかし、森谷の調査²⁵⁾ではコミュニティ FM においては市民がパーソナリティと情報収集・提供を多く担当しており、市民がマイクを持っているケースが多く見られるとしている。また(1)で述べたように、コミュニティ FM への市民の関与意識に関する調査も行われている。このように、市民がコミュニティ FM への関与に対する調査は実施されており、市民のコミュニティ FM への参加の状況が把握されている一方で、市民活動団体を対象とした調査については発見できなかった。

(5) 彦根市における市民活動団体の情報発信

彦根市においては『広報ひこね』などの行政誌も媒体として考えられるが、本研究では、コミュニティ FM である、エフエムひこねに着目する。

1 - 4 本研究の構成

本研究の構成を以下に記載する。

第一章

本研究における、背景、目的、意義について述べた。また、市民活動の定義づけ、彦根市における市民活動団体の交流の場について述べ、情報発信媒体としてコミュニティ FM へ注目することについて述べた。

第二章

本研究の調査、分析方法について述べ、市民活動団体側のヒアリング対象の類型化を行った。

第三章

彦根市における市民活動団体の交流の場として、市民活動センターについての概要、現

状把握を行った。また、ひこね市民活動センターの管理運営団体である、『団体 1』と市民活動センター登録団体との関わり、市民活動センターを通して情報発信について考察を行った。さらに、もう一つの交流の場としてプレイパーク晒庵について考察を行った。

第四章

エフエムひこね側から見た市民活動団体の情報発信の場について考察を行った。

第五章

市民活動団体側からの情報交流の場、情報発信の場について各団体を類型化することによって、詳細に考察を行った。

第六章

結論として、今後の彦根市における市民活動団体の交流の場と情報発信について言及する。

第一章 脚注及び引用、参考文献

- 1) 滋賀県県民文化生活部県民文化課 NPO 活動促進室:ボランティア NPO ガイドブック,2006
- 2) 椎木哲太郎:日本型「市民活動」の源流 1868-1951,経営・情報研究:多摩大学研究紀要,7,pp.65 - 82,2003
- 3) 庄治睦浩:地域を支える(438)大阪府みのお市民活動センター(大阪府箕面市)活動拠点の提供で NPO 支援,厚生福祉,5150,11,2003
- 4) 大西隆:まちづくりを支える財源,地域開発,490,pp.2-6,2005
- 5) 津田正夫:市民アクセスの地平(中) 失われた表現とコミュニケーションの恢復を求めて,立命館産業社会論集,41(4),pp25 - 43,2006
- 6) 山岡義典:NPO - 特に市民活動団体の現状と今後の展望,地域政策研究,3,pp.14 - 22,1998
- 7) 須田春海:「市民運動全国センター」解消,地域開発,402,pp.26 - 28,1998
- 8) 本研究では、『社会』について「集まって生活を営む、その集団」とする。岩波国語辞典第5版,株式会社岩波書店,1994
- 9) 伊丹敬之:場の論理とマネジメント,東洋経済新報社,p.42,2005
- 10) Yahoo!JAPAN
<<http://www.yahoo.co.jp/>>,2006-1-20
- 11) 市民活動センター神戸
<<http://www.kobekec.net/>>,2006-1-20

- 12) ボラ市民 by 東京ボランティア・市民活動センター
<<http://www.tvac.or.jp/>>, 2006-1-20
- 13) 財団法人 かわさき市民活動センター
<<http://www.kawasaki-shiminkatsudo.or.jp/>>, 2006-1-20
- 14) 足利市民活動センター
<<http://www.shimin-act.jp/>>, 2006-1-20
- 15) 宇部市民活動センター
<<http://www.ubenet.com/>>, 2006-1-20
- 16) 福井文雄・他: 京都コミュニティ放送の評価に関する調査報告『市民制作番組の発信と受信の意識』, 立命館大学産業社会学部津田研究室, 2006
- 17) 日本コミュニティ放送協会: 日本コミュニティ放送協会 10 年史～未来に広がる地域の情報ステーション～, pp. 14-15, 2004
- 18) 樋口健一郎: 言語サービスと多言語コミュニティ放送 FM わいわいの事例から外国人住民への災害情報提供を考える, NIRA 政策研究, 18(9), 80, 2005
- 19) 日本コミュニティ放送協会: 日本コミュニティ放送協会 10 年史～未来に広がる地域の情報ステーション～, p. 15, 2004
現在は規制緩和により空中線電力は 20W 以下となっている。
- 20) 平塚千尋: 『災害情報とメディア』, リベルタ出版, p. 148, 2000
- 21) 船津衛: 地域情報と社会心理, 北樹出版, p67, 1999
- 22) 塚本美恵子: コミュニティ放送への市民参加 コミュニティ放送局の現状とエフエム入間の事例から, 文化情報学: 駿河台大学文化情報学部紀要, 9(2), pp. 47 - 63, 2002
塚本の調査では、日本コミュニティ放送協会登録団体 152 局の概要を用い分析を行ったが、当該項目が無記入の局もあったため、塚本は当該項目に記載のあった団体のみを対象としている。
- 23) 坂田謙司: コミュニティ放送局の存立要件 営利(FPO)と非営利(NPO)の違いは何を生み出すのか, 現代社会研究 4(5), pp. 49 ~ 63, 2003
- 24) 津田正夫: メディア・アクセスと NPO, リベルタ出版, p. 192, 2001
- 25) 森谷健: コミュニティ放送の現状と地域コミュニケーションの可能性 市民スタッフ問題を中心に, ハイライフ研究所
<<http://www.hilife.or.jp/9800c/9800c21.html>>

第二章

研究方法

第二章 研究方法

2 - 1 研究対象の選定

彦根市における市民活動団体の交流の場として、ひこね市民活動センターを対象とし、市民活動団体の情報発信媒体としてエフエムひこねを対象とした。さらに交流の場、情報発信媒体に対して市民活動団体の考えを把握するために、ひこね市民活動センターに登録している団体・個人を対象とした。ひこね市民活動センターを交流の場として取り扱う理由として、NPO 法人のように高度に組織化された団体と極めて小規模な市民活動団体の両団体が混在しており、多種多様な市民活動団体の集う場となっていると予想されるためである。

2 - 2 調査方法

本研究では調査方法として、ヒアリング調査を用いた。ヒアリング調査を用いたのは、対象の現状、持っている考えなど、他の調査方法では引き出しにくい詳細な情報を得られると考えたためである。

2-2-1 ヒアリング目的と項目について

以下にヒアリング対象とヒアリング目的、ヒアリング項目を記述する。

(1) ひこね市民活動センター

ひこね市民活動センター 代表 I.K 氏

ひこね市民活動センターの概要と、センターと市民活動団体との関わりなど運営側からみた、ひこね市民活動センター、市民活動団体の状況を把握することを目的としてヒアリングを行った。

表 2-1 は、I.K 氏に対して行ったヒアリングのヒアリング項目である。

表 2-1 ひこね市民活動センターに対するヒアリング項目

番号	ヒアリング項目
Q.1	・センターを利用する団体の特徴は？
Q.2	・各団体によるセンターの利用目的は？
Q.3	・センター運営団体として、各団体にセンターをどう利用して欲しいか？
Q.4	・センターからの広報の方法と、その利用媒体は？
Q.5	・センターとして過去にエフエムひこねへの出演は？
Q.6	・センターの設立経緯は？
Q.7	・管理運営団体としてのセンターへどのような関わり方をしているのか？
Q.8	・センターの運営費は？

(2) エフエムひこね関係者

エフエムひこねコミュニティ放送株式会社 代表取締役社長 O.Y 氏

エフエムひこねと市民活動団体とのこれまでの関わりについて、今後の局としての市民活動団体情報の取り扱いについて明らかにするためにヒアリングを行った。

表 2-2 は、O.Y 氏に対するヒアリング項目である。

表 2-2 O.Y 氏に対するヒアリング項目

番号	ヒアリング項目
Q.1	・なぜ、ラジオを始めようと思ったのか？
Q.2	・エフエムひこねの目指す放送とは？
Q.3	・エフエムひこねの課題は？
Q.4	・エフエムひこねの市民活動団体の受け入れ意思はあるのか？
Q.5	・エフエムひこねにおいて、過去市民活動団体番組は存在は？
Q.6	・過去の市民活動団体番組の放送形態は？
Q.7	・現在のエフエムひこねにおける市民活動団体番組は？
Q.8	・NPO 京都コミュニティ放送局のように、番組枠の販売を広く市民に募集するつもりはあるのか？

過去の市民活動団体番組担当者 A.Y 氏

主に過去の市民活動団体番組の状況を把握するためにヒアリングを行った。

表 2-3 は、A.Y 氏に対するヒアリング項目である。

表 2-3 A.Y 氏に対するヒアリング項目

番号	ヒアリング項目
Q.1	・過去の市民活動団体番組での周囲からの反応は？
Q.2	・番組が終了した理由は？
Q.3	・番組を放送したことによる効果は？
Q.4	・エフエムひこねに求めることは？
Q.5	・ラジオをまたやりたいと思うか？
Q.6	・市民活動団体の情報発信の場として、エフエムひこねを利用することについてどう思うか？

現在の市民活動団体番組担当者 エフエムひこねパーソナリティ Y.H 氏

現在のエフエムひこねにおける市民活動団体の情報の発信の状況を把握するためにヒアリングを行った。

表 2-4 は、Y.H 氏に対するヒアリング項目である。

表 2-4 Y.H 氏に対するヒアリング項目

番号	ヒアリング項目
Q.1	・なぜ、市民活動団体の情報を流すようになったのか？
Q.2	・どのぐらいの頻度で、市民活動団体の情報を流しているのか？
Q.3	・現在の番組の放送形態は？
Q.4	・どのようにして、放送する市民活動団体を探しているのか？

エフエムひこねパーソナリティ T.Y 氏

エフエムひこねでの放送に関わりながら、市民活動センターに登録しているため、実際に放送に参加している市民活動団体として、市民活動団体の情報を発信することに対する考えを把握するためにヒアリングを行った。

表 2-5 は、T.Y 氏に対するヒアリング項目である。

表 2-5 T.Y 氏に対するヒアリング項目

番号	ヒアリング項目
Q.1	・エフエムひこねに出演するようになった経緯は？
Q.2	・番組の放送内容は？
Q.3	・現在の放送内容について思うことは？
Q.4	・センターに登録した経緯は？
Q.5	・センター登録団体の情報を放送内容に取り入れていくつもりはあるか？

まちの出演者

予備調査として、エフエムひこねと関わるようになったきっかけとその理由、エフエムひこねに対しての思いを把握するために、まちの出演者である E.M 氏(楽器店店主)、Y.K 氏(旅館店主)、A.K 氏(酒店店主)、H.M 氏(大学生)に対してヒアリングを行った。

(3) ひこね市民活動センター登録団体

今回の調査では、2006 年 9 月 19 日現在の市民活動センター登録団体リスト記載の 48 団体中、連絡先の把握が出来、ヒアリングの許可が降りた 18 団体に対してヒアリングを行った。

表 2-6 は、市民活動団体に対するヒアリング項目である。

表 2-6 市民活動団体に対するヒアリング項目

番号	ヒアリング項目
Q.1	・団体の活動目的は？（活動の概要について）
Q.2	・活動課題は？
Q.3	・会員数は？
Q.4	・運営側の人数は？
Q.5	・資金源は？
Q.6	・利用広報媒体は？
Q.7	・なぜ、その広報媒体を利用するのか？
Q.8	・広報ひこねは利用しているか？
Q.9	・センターの利用目的は？
Q.10	・エフエムひこねの利用意思は？
Q.11	・エフエムひこね利用に対する疑問点、不安点は？

2-2-2 ヒアリング調査の実施

(1) ひこね市民活動センター登録団体に対するヒアリング調査

ひこね市民活動センターに対して、2006年9月1日と同年9月19日の2回に渡ってヒアリングを行った。

また、ひこね市民活動センター登録団体に対しては事前に各団体における資料をひこね市民活動センターもしくはインターネットなどから入手し、ヒアリングの際の参考資料とした。その後、ヒアリング対象者間でのコメントの差が最小限となるようにあらかじめヒアリング項目を作成した。(表 2-6)

実際のヒアリングでは、質問項目表を基に著者が質問し、対象者が回答するという形式を取った。同時にヒアリング対象者から、可能な限り活動に関わる資料を入手した。また、ヒアリング対象者の時間的制約などにより質問が漏れた場合に限り、後日再訪問、電話でのヒアリング、E-mail による質問などの補足的な調査を実施した。

プライバシーの問題などにより連絡先を入手できない団体や、ヒアリングを拒否された団体、30 団体に対してはヒアリング調査を実施できなかった。

表 2-7、表 2-8 はヒアリングを行った日時とその団体、対応者と団体での役職、さらにひこね市民活動センター登録者名簿に記載のあった活動内容についてまとめたもの¹⁾である。団体については、団体番号で表記する。

本研究においては、団体のトップではない人物にヒアリングをしている場合が存在する。これは、団体によってはひこね市民活動センターに代表ではない人物が登録者となっている場合があるからである。本研究では、市民活動団体とひこね市民活動センターとの関わりについて調べるため、代表でない場合もセンターとのつながりが深いと予想されるセンター登録者をヒアリング対象とした。また、空白の団体については役職名が存在しなかった。

表 2-7 ひこね市民活動センターに対するヒアリング日時

日時	ヒアリング団体	日時	ヒアリング団体
2006年9月1日	ひこね市民活動センター	2006年10月16日	団体 14
2006年9月19日		2006年12月15日	
2006年10月7日	団体 7	2006年10月19日	団体 4
2006年10月7日	団体 8	2006年10月20日	団体 15
2006年12月14日		2006年10月22日	団体 10
2006年10月8日	団体 2	2006年10月23日	団体 16
2006年10月12日	個人サポーター・K.K氏	2006年10月25日	個人サポーター・K.S氏
2006年10月13日	団体 12	2006年10月25日	団体 5
2006年10月15日	団体 9	2006年10月25日	団体 6
2006年11月15日		2006年11月15日	団体 11
2006年10月15日	団体 3	2006年11月14日	団体 1
2006年10月16日	団体 13	2006年11月30日	
2006年12月21日			

表 2-8 市民活動団体のヒアリング対応者

ヒアリング団体	対応者	役職	活動内容など
ひこね市民活動センター	I.K氏	代表	
団体 7	O.K氏	会長	環境・雨壺山整備
団体 8	K.S氏	代表	環境・東山整備
	F.K氏	事務局	
団体 2	Y.Y氏	代表	不登校支援
	ご主人	メンバー	
個人サポーター・K.K氏	K.K氏		研修企画
団体 12	F.K氏	理事	福祉
団体 9	M.N氏	代表	建築保存
団体 3	N.K氏	所長	カウンセリング
団体 13	Y.H氏		環境
団体 14	T.H氏	代表	環境
団体 4	Y.Y氏	事務局	不登校支援・教師と保護者研修
団体 15	O.M氏		福祉
団体 10	K.T氏	代表	まちづくり
団体 16	A.Y氏	理事長	環境
個人サポーター K.S氏	K.S氏		個人・企画
団体 5	N.Y氏	代表	情報交換
	U.Y氏	メンバー	
団体 6	U.Y氏	代表	学生勉強会
	N.Y氏	メンバー	
団体 11	D.T氏	代表	楽器演奏・パフォーマンス
団体 1	I.K氏	事務局	国際交流・人権・環境・子ども支援

ヒアリング対応者が複数いる際は、主なヒアリング対応者に「^①」を記入。

(2) エフエムひこねに対するヒアリング調査

エフエムひこね関係者に対するヒアリング日時は表 2-9 の通りである。

表 2-9 エフエムひこね関係者に対するヒアリング日時

日時	対応者	役職など
2005年11月25日	O.Y氏	株式会社エフエムひこね代表取締役社長
2006年2月10日		
2006年9月19日		
2006年2月24日	E.M氏	楽器店店主
2006年2月26日	Y.K氏	旅館店主
2006年2月28日	A.K氏	酒屋店主
2006年10月20日	A.Y氏	過去の市民活動団体番組担当
2006年10月30日	H.M氏	大学生パーソナリティ
2006年11月14日	T.Y氏	大学生パーソナリティ
2006年11月28日	Y.H氏	現在番組の中で市民活動団体について放送しているパーソナリティ

2 - 3 分析方法

2-3-1 分析の流れ

第三章で市民活動団体の交流の場について考察する。また、第四章で市民活動団体の情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性を考察する。

第五章では、主に市民活動センター登録の市民活動団体側の求める交流の場と情報発信に対する意識について類型ごとに考察する。第五章における分析の流れを図 2-1 に示す。

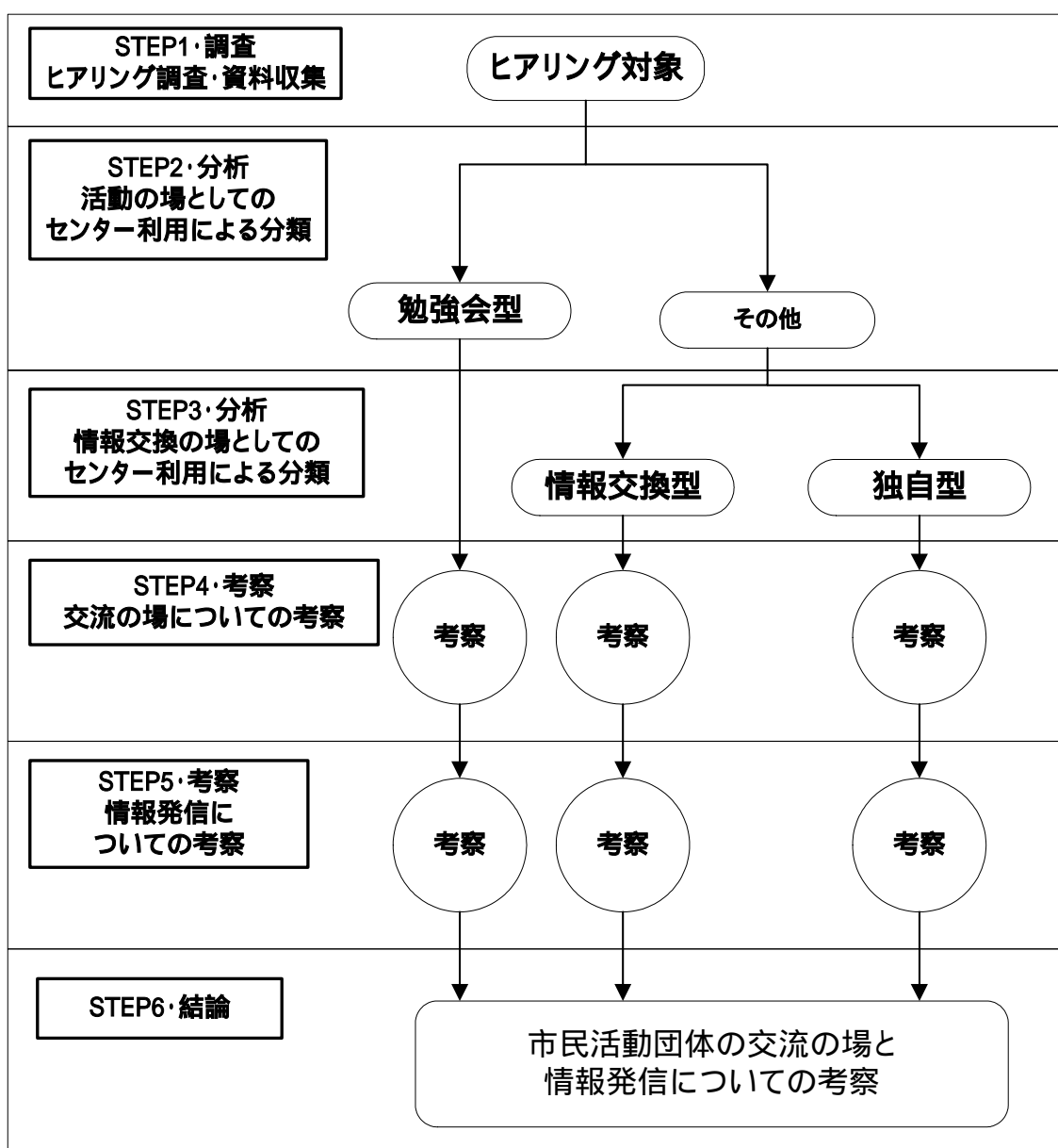


図 2-1 分析の流れ

2-3-2 市民活動団体の類型化について

各団体における交流の場としてのひこね市民活動センターの利用、情報発信の現況、また、新たな情報発信の場としてのエフエムひこねの可能性を見るために、まず活動の場としてひこね市民活動センターを利用している団体とそうでない団体に分類した。さらに、市民活動団体の現状を把握するため、最も市民活動団体が集う毎月 15 日に開催される情報交換会に、2006 年 9 月から 2006 年 12 月までの 4 ヶ月間に、計 4 回開催された情報交換会に一度でもメンバーが出席した団体とそうでない団体に類型化を行った。出席した団体については、ひこね市民活動センターの訪問者ノートで確認した。(表 2-10)

表 2-10 情報交換会出席団体(2006 年 9 月～12 月)

情報交換会出席団体	
団体 1	団体 8
団体 7	団体 11
団体 10	個人サポーター・K.K氏
団体 5	個人サポーター・K.S氏
団体 6	団体 9

この情報交換会に欠席した、『団体 12』、『団体 13』、『団体 14』、『団体 15』、『団体 16』の 5 団体については、現状としてはひこね市民活動センターを用いての情報交換の意識が低く、交流の場としてひこね市民活動センターの利用はしていないと判断した。これらの団体はひこね市民活動センターには登録しているものの、主に独自に活動している団体として類型化を行った。

類型化したものをそれぞれ、勉強会型、情報交換型、独自型、と名づけた。

勉強会型

主に活動の場としてひこね市民活動センターを利用している団体。団体によっては活動の場の他に交流の場として利用している。

情報交換型

彦根市民活動団体を活動の場としていないが、交流の場として利用している団体。2006 年 9 月～12 月の情報交換会に、必ず一度は出席している団体。

独自型

ひこね市民活動センターに登録しているが、活動の場としても交流の場としてもひこね市民活動センターを利用していない団体。2006年9月～12月の情報交換会に、一度も出席していない団体。

各類型に分類したものの一覧は表 2-11 の通りである。ただし、ひこね市民活動センターの管理運営団体については、特殊な事例としてこの分類からは除き個別に考察を行う。

表 2-11 対象団体の類型化リスト

分類名	団体名
勉強会型	団体 2
	個人サポーター・K.K氏
	団体 3
	団体 4
	団体 5
	団体 6
情報交換型	団体 7
	団体 8
	団体 9
	団体 10
	個人サポーター・K.S氏
	団体 11
独自型	団体 12
	団体 13
	団体 14
	団体 15
	団体 16

第二章 脚注及び引用、参考文献

- 1) 電話でのヒアリングは補足的な事項がほとんどであるため、表への記載は控えた。

第三章

彦根市における 市民活動団体の交流の場について

第三章 彦根市における市民活動団体の交流の場について

本研究では彦根市における市民活動団体の交流の場として、主にひこね市民活動センターの考察を行う。さらに、彦根市における他の交流の場についても考察を行う。

3 - 1 ひこね市民活動センターについて

彦根市における市民活動団体の交流の場としてのひこね市民活動センターについて記述する。「」内はヒアリング対応者が直接発言したものである。ただし、団体名が会話中、資料中にある際の団体名は団体番号として表記している。

3-1-1 ひこね市民活動センターのについて

ひこね市民活動センターの現在までの経緯、ひこね市民活動センターの果たす役割について、ひこね市民活動センターの代表であり、センターの管理運営団体である『団体 1』事務局を担当している I.K 氏に対してヒアリングを行った。

(1) ひこね市民活動センターの概要

建物自体は、アメリカ人技師のウィリアム・メレル・ヴォーリズ(1880 - 1964)によって設計された歴史的にも貴重な建物である。取り壊しが決定していたが、市民運動により保存が決定し、市民活動をサポートする市民活動センターとなった。

現在は、『団体 1』がひこね市民活動センターの管理運営を担当している。



図 3-1 ひこね市民活動センターの外観

(出所：2007 年 2 月 17 日ひこね市民活動センターにおいて著者が撮影)

(2) ひこね市民活動センターの登録団体の特徴

表 3-1 はひこね市民活動センターで入手した登録者名簿¹⁾をデータ化したものである。本来は登録団体名、個人名が記載されているが、団体名については記載しない。

同表より、多様な活動目的を持つ団体がひこね市民活動センターに登録していることが分かる。市民活動センターの建物は歴史的に貴重なものであるとされているが、現在建物自体の保存を目的として登録している団体が全体の中で2名+1団体である。しかし、個人として登録している人物が団体として2重登録するという形になっているため、実質ヴォーリズ建築保存を目的としてひこね市民活動センターに登録しているのは2名である。現在は、建物を保存することを目的とし、ひこね市民活動センターを利用するのではなく、各団体にとってひこね市民活動センターが活動の拠点、交流の場として認識されていると考えられる。

表 3-1 ひこね市民活動センター登録者名簿

登録番号	活動内容など	登録番号	活動内容など
1	国際交流・人権・環境・子ども支援	25	ヴォーリズ保存の会・近江中世城跡琵琶湖一周のろし駅伝
2	個人・県立大学	26	情報交換
3	個人・PTA	27	かるた販売
4	個人・JC	28	学生勉強会
5	個人・JC	29	個人・企画
6	環境・雨壺山整備	30	個人・環境整備・音楽
7	個人・JC	31	男女共同参画・国際交流
8	個人・イベント協力	32	個人・環境・子ども・福祉・まちづくり
9	福祉	33	個人・情報誌・広報
10	サイクリング協会・ヴォーリズネットワーク情報提供	34	音楽
11	不登校支援	35	環境・東山整備
12	環境	36	個人・情報提供・洞窟調査
13	個人・環境整備	37	個人・JC・まちづくり
14	青少年健全育成	38	イタリア研究
15	福祉	39	楽器演奏・パフォーマンス
16	福祉	40	子育て
17	カウンセリング	41	環境
18	不登校支援・教師と保護者研修	42	個人・JC
19	よさこいネットワーク	43	個人・環境整備
20	環境	44	酒類業
21	環境	45	日本文化伝承
22	まちづくり	46	個人・情報
23		47	新団体立ち上げ
24	建築保存	48	研修企画

(3) ひこね市民活動センターの変遷

ひこね市民活動センターで入手した資料²⁾より、ひこね市民活動センター変遷を把握できた。以下はその資料より一部抜粋したものである。

『ひこね市民活動センター設立と経緯』

2000 年

彦根城・城山のふもとにあるヴォーリズ建築である旧滋賀大学外国人宿舎は、取り壊しが決定していましたが、ヴォーリズ建築愛好家を中心とした市民運動により保存されることとなり改装。

2002 年

公設民営の市民活動サポートセンター「ひこね市民活動センター」として会館。当初は事務局機能を担うための組織力が不足していたためセンターとしての役割が十分果たせませんでした。

2004 年 3 月

- ・ 『団体 1』が運営を担当
多様な企画を実践することによりネットワーク作りが可能になりました。
- ・ 滋賀県内 16 の支援センターによる意見交換会に第一回から参加
センターの機能充実と基盤安定を図るため、『ひこね市市民活動センター』の問題と今後の課題を検討する機会を得ました。
- ・ 淡海ネットワークセンター主催の未来塾に参加
県内外のセンター機能を研究テーマに分析し、NPO の基盤づくりと運営を学び、「ひこね市民活動センター」という現場において即実行に移すことができ、センターの改善に結びついた。そのことにより来館者が増え続けていることは私達の喜びと自信につながっています。

2005 年

- ・ 滋賀県内ヴォーリズネットワークに参加
国内のヴォーリズ建築愛好家、団体の来館も増え、センター情報受発信の幅が広がるとともに、「観光のまち彦根」を知っていただくことにもなりました。
- ・ センター設立からの運営協議会を解散するとともにセンター機能の充実のための準備会を 7 回開催
- ・ 4 月より、『自主・自立運営』『情報交換・人材交流』をテーマに再出発することで会員増加につながる
- ・ 『市民活動フォーラム 2005 IN 彦根』での彦根事務局を担当
県内外から約 80 団体、1500 名参加

ひこね市民活動センターの代表 I.K 氏も初めてひこね市民活動センターを訪れた当時の様子について以下のようなことを述べられている。「人がいないから、ただ建物があるだけ。会議³⁾の内容も、こんなところセンターにしたくなかったとか後ろ向きな意見ばかり。だってここ、『団体 1』が集まるっていうても全員集まれへんやん？場所も不便だし、広さもちょっと公民館とか借りてるほうが何かできるし、ただヴォーリズの建築物を保存したい人だけが声上げて、ひこね市民活動センターにただけやってみんな言うてはって。」

当時、ひこね市民活動センターには複数の団体が登録していたようであるが、それぞれあまりひこね市民活動センターに対して積極的な関与をせず、ひこね市民活動センターとして市民活動団体間の交流の場としての機能ではなく、建物の歴史的価値のために存在していたと考えられる。そのため、代表の発言にもあるように、現状としてひこね市民活動センターは、市民活動センターとして十分な広さが確保されているとは考えにくい。

また、当時の印象として、「2004 年に『団体 1』が主体となって運営していくまでは、センターがあるだけみたいな感じだった。」と発言されている。

その後 2004 年にひこね市民活動センターは解散している。過去のひこね市民活動センターの状況については、当時の登録団体の名簿を入手できなかったためほぼ把握出来なかった。解散後もひこね市民活動センターに登録している『団体 13』の A.H 氏によると、「その頃(解散する以前)のメンバーは私だけ残っている。でもそれは発展的な解消やと思っている。」という言葉からも分かるように、現在のひこね市民活動センターの登録団体は解散後に集まってきた団体がほとんどであると考えられる。

(4) ひこね市民活動センター利用料金

表 3 - 2 はひこね市民活動センターの利用料金表である。

表 3 - 2 ひこね市民活動センター利用料金表

項目		正会員(NPO・サークル)	(一般)	非会員	備考
入会金		¥1,000	¥10,000		
年会費		¥3,600	¥12,000		
		(一ヶ月 ¥300)	¥1,000		
		月一回会館担当			
貸室(一室)	9:00-12:30	¥300	¥500	¥1,500	設備費含む
	13:00-17:00	¥300	¥500	¥1,500	
	17:00-21:00	¥500	¥2,000	¥3,000	
	21:00以降	¥1,000	¥4,000	¥5,000	
	一室一週間利用	¥7,000	¥10,000		
	一室一ヶ月間利用	¥28,000	¥40,000		
		※利用者は事前に予約。予約順に利用できます。			
		※キャンセルは前日5時までをお願いします。			
		※参加者有料の場合は料金の10%を別途徴収します。			
事務局代行	一ヶ月(10:00-16:00)	¥20,000	¥30,000		窓口業務
	一日	¥3,000	¥3,000		
鍵使用	一ヶ月	¥10,000	¥20,000		鍵・センターの管理担当
		※週二回会館担当			

ひこね市民活動センターでは 2004 年 3 月以降、彦根市からの助成金は受給していない。そのため、ひこね市民活動センターの維持に関しては、ひこね市民活動センター独自の運営によって行われている。ひこね市民活動センターの利用料金を主な収入源として維持費を捻出しているのが現状である。

ひこね市民活動センターのような中間支援センターについて、近江ネットワークセンターの H 氏は「一概には言えないが、民間の中間支援センターは資金面を含めたマネジメントなどの課題を抱えている。」と電話ヒアリングで回答されている。ひこね市民活動センターにおいても機能維持のために、センターの利用団体に支えられながら、活動を継続しているのが現状であると考えられる。

3-1-2 ひこね市民活動センターの果たす役割について

(1) ひこね市民活動センターの機能について

I.K 氏に対するヒアリングからひこね市民活動センターの機能として、以下の 4 点が浮かび上がってきた。

センター内での登録団体間の交流の場としての機能

事務局機能を持たないセンター登録団体の事務局としての機能

自力での広報力が低い団体による情報発信の場としての機能

市民活動に興味を持つ人の窓口としての機能

ひこね市民活動センター内での登録団体の交流の場としての機能

ひこね市民活動センター内での登録団体の交流としては、「センターが各団体の交流の場です。」「センターで会うことで、実際に交流することでの情報交換を行って欲しいし、今の世の中にはそういうことが必要だと思う。」と I.K 氏が言うように、管理運営団体としては、ひこね市民活動センターが交流の場としての機能を果たすことを望んでいることが分かる。

また、実際にひこね市民活動センターを通しての交流の結果、市民活動団体間の協力が生まれることもある。例えば、2006 年 10 月 15 日に市民活動センターの庭で行われた『お庭でコンサート』は、ひこね市民活動センターに登録している音楽団体と、ひこね市民活動センターにやってくる個人サポーター同士が協力することによって行われたものである。このようにひこね市民活動センターが交流の場としての機能を果たすことで、各団体同士のつながりが生まれていると考えられる。

事務局機能を持たないひこね市民活動センター登録団体の事務局としての機能

市民活動センターの大きな機能の一つとして、事務局機能を持たない団体の事務局としての機能が挙げられる。I.K 氏は「ちっちゃいグループなんかはセンターが窓口になれば、いちいち仕事に電話出んでもここに連絡してくださいってので OK やし、負担にならんためには...活動したいけど負担になるしっていうのを結構見てきたからね...っていうので地域交流っていう枠が出来ました。」⁴⁾

ひこね市民活動センターを通して、多種多様な人々に『団体 1』だけでなく市民活動をしている団体について多くの人に知ってもらいたいという考えが伺える。

自力での広報力が低い団体の情報発信の場としての機能

I.K 氏は「ちっちゃなグループ活動、サークル活動とかしてる人たちも、事務所もなくやってはる人もいはるやんか？そういう人たちのことも知ってもらおう場。」と、ひこね市民活動センターの情報発信の機能についても述べられている。

しかし、ひこね市民活動センターの情報発信の機能としては、「現状として、センターでの活動は広報ひこねと、各団体の広報に頼るところが大きい。」との I.K 氏の発言にもあるように、ひこね市民活動センターとしては、ひこね市民活動センターを訪れる人に対しての情報発信、もしくは『広報ひこね』⁵⁾を通して果たされている。

市民活動に興味を持つ人の窓口としての機能

I.K 氏によれば、ひこね市民活動センターでの主な市民活動団体の交流の場となる情報交換会には、「2 回に 1 回ぐらいは『広報ひこね』を見て来る人がいる。」とのことである。情報交換会に足を運ぶことで実際に市民活動センターに通うようになり、個人サポーターとしてひこね市民活動センターに登録する人もいるようである。

少数ではあるが、市民が市民活動に興味を持ち、市民活動に参加したいという人と市民活動団体との接点として機能を果たしていることが分かる。

また、ひこね市民活動センター登録団体以外にも開放された空間であるので、市民活動にそれほど高い関心を示すわけでもなく、登録もしていない人々もひこね市民活動センターを訪れ交流の輪が広がっているという現状も明らかになった。

以上のようなひこね市民活動センターにおいては、4 つの機能が明らかになったが、ひこね市民活動センターのマネジメントの面から交流の場が存続していくことはかなりの労力が必要であると考えられる。

(2) ひこね市民活動センターにおける情報発信について

現在ひこね市民活動センターの主な広報媒体として、彦根市の広報誌である『広報ひこね』が挙げられる。I.K 氏は「広報ひこねに載せてもらうのはタダ。」という一方で、「せっかく頑張ってコピーとかを作っても行政にいくと硬くなって紙面に載ってしまう。」「行政の広報物のように、硬い文章ではあまり伝わらないのでは？」と不安な点を挙げられていた。

しかし、ひこね市民活動センターに対する認知度は高まってきている様子が以下の発言から読み取れる。「前までは、私ここにいるで、知ってね！って言わんとアカンかったけど、ここセンターですって。ずっと閉鎖されてて誰も知らない、ひこね市民活動センターやったから、それで 2 年かけて 2 年がかりでやっとちょっとみんなに知ってもらって。今年はあまり何もしないでも、「ごめんなさい、15 日の情報交換会行けません。」言ってもらえる。あ、知っててもらえるんやって。もう定着してきている。」とひこね市民活動センターの利用者が増え、市民にある程度認識されていることに満足な様子を示している。

一方で、以下のような発言もされている。「基本的にセンターで対面して話が進むことが多いので、アンテナを張ってセンターに来てる人はいろいろな情報を仕入れることができるが、全然来ない人に対してはあまり情報は回らない。」とも発言されている。ひこね市民活動センターに立ち寄らない、もしくは市民活動センターの存在を認知していない団体、一般市民に向けての情報発信が必要であると考えられる。このように交流の場には、交流の場自身の存在、そこで活動する団体についての情報発信が必要であると考えられる。

(3) 情報交換会が果たす役割

毎月 15 日にひこね市民活動センターでは情報交換会と呼ばれる、登録団体や一般市民の交流会が行われている。市民活動センターを維持するために参加料として一人 300 円を払い、一品持ち寄り、また一品持ち寄りをしない人にはさらに 300 円を負担するという形態をとっている。情報交換会を行うことで各団体間の交流が深められている。

情報交換会の始まりとして、I.K 氏は以下のように発言されている。「いろいろ顔見知りになって、一回協議会出てみませんかって声かけて誘って、5、6 人集まって、年に一回だけお正月のときは青年会議所が集まって、協議会の代表みたいな人を青年会議所が担当してはって、いろんな人が集まる...情報交換会が年に一回行われているみたいな。そのときだけ、一品持ち寄りで、結構みんながわーわー来はって、この雰囲気いいやん、これを毎月すればいいやんと思って、年にいっぺんといわず、全然知らん人どうしても「そんな活動やってはるんですか」って言うてたから、こんなを頻繁にやれば、ここの利用価値もあると思った。」

参加者は、ここでさまざまな情報を共有することで、各活動を進めていく上での有効な情報や、協力を得ている。実際に、「情報交換会で意気投合することで、活動が異なる団体が『お庭でコンサート』みたいなイベントをしたり、それまで市民活動を行ってこなかった人が市民活動に参加するようになったりする。」



図 3-2 情報交換会の様子

(出所：2007 年 2 月 15 日にひこね市民活動センター内において著者が撮影)

3-1-3 ひこね市民活動センター管理運営団体について

(1) ヒアリング対象者

管理側からみた交流の場の現状・課題を明らかにするために、ひこね市民活動センターの管理運営団体である『団体 1』事務局担当である I.K 氏に対してヒアリング調査を行った。

(2) 『団体 1』の概要

表 3-3 『団体 1』の概要

団体名称	団体1
代表氏名	K.H氏
活動開始年	1993年
資金源	事業費
会員数	会員・準会員を含めて約200名
運営スタッフ	13名
活動目的	青少年健全育成

1993 年に活動を開始し、現在は全国で会員数約 200 名を超える NPO 法人団体である。もともと滋賀県彦根市高宮町で活動をしていたが、現在は規模拡大に伴い東京に本部を設置している。事業としては、青少年健全育成を中心として、国際交流、自然環境保護運動、CAP 活動、地域交流の 4 つの事業部で構成されている。

活動のきっかけとしては、もともとは彦根市高宮町にあった I.K 氏の自宅を子どもに開放するという活動をされていたことが始まりである。I.K 氏は当時のを振り返り、「もともとは青少年健全育成もあえてそういうグループを作ろうとしたのではなくて、自分にとってこれが必要やしとか、家族にとっているしってなって、だんだん家族が、個人と家族。そのころは 3 人やったかな？それが少し大きくなったわけ。10 人 20 人に。家族っていう単位ではなくなったわけ。そしたら、ここに集まる人にとって何が必要かなって思うようになった。」という発言をされた。このことから、もともと市民活動という形にこだわっていたのではなく、自分自身や家族に必要なことから始まって規模が拡大し、現在に至っていることが分かる。

また、現在東京へ本部を移転することになった経緯としては以下のように発言された。「活動したり支援してもらってるのがあるやん？夏の合宿で三重に行ったりとか、県外の人協力してくれてるのが結構あった。資金面でも場所でも。ただ、滋賀県で限定していると、協力しづらい。だから全国でっていう風にしてくれると、もっと楽に協力できると。三重県の団体も『団体 1』さんと組んで、やりたくてもあくまでも県域の活動やから、一緒に事業をやりにくくなる。だから一緒にやるには県内だけっていうのをはずしてもらおうと。東京の方も、何で滋賀県ばかり協力するんやってなる。資金面でも、事務局提供してくれてる人が東京と京都にいる。京都にも同じような活動してる人いるわけやん。不登校でも CAP でも英会話でも国際交流でも。東京にもこっちにもあるのに、滋賀県でなっちゃうから。自分たちの生活している地域でも広がればいいし、もっともっと京都のほうも広がればいいし、九州の人協力してくれはるんやけど、出来たら九州でも広がればいいと思う。じゃあ、内閣府に申請すればいいやんてなった。」滋賀県認証の NPO 法人から、内閣府認証の NPO 法人になることでさらに活動の幅が広がっていることが分かる。このように活動の幅が広がっている。この活動の広がりによって、「ちゃんと自力で給料スタッフにっていう NPO はなかなかないからね。その辺は多分凄いやと思う。助成金も全然もらわんと。」と言うほどの資金力を得られていると考えられる。

(3) ひこね市民活動センターとの関わり

ひこね市民活動センターに関わるきっかけとして、I.K 氏は以下のように発言をされている。

「閉鎖してるひこね市民活動センターってあるわっていう話を聞いて、一回会議出てみようって思って会議に出たんが 3 年前。年に何度か会議開いているって言うてもそのときも 4 人ぐらいしかおらんかったけど。それも一年ぐらい開いてなかった。そんなときに来て、本当にここが必要なんやろうかって最初私は思った。おばけやしきみたいだった。木もぼーぼーやし、それが枯れ果ててうっそうとしていた。誰も入ってないから…。この真っ白な壁にうっそうとしているから、何でこんなところがひこね市民活動センターなん？と思った。それが最初の印象。メンバー表見ても、ほとんどここに来る人なんていないひと

はいない状況。『団体 1』にも高宮に事務所あるし、別に必要ではなかったけどここに事務所を移せば毎日開館ぐらいできますよっていうコトで事務所こっちに持ってこようかみたいな。でも、半年ぐらいはここがなんなのかも良く分からないから、高宮にも事務所を置きながらのこっちだった。高宮にも、代表とか他スタッフいるから、私こっち担当するわってなった。もしなんか連絡あったときに誰かおらんとアカンしていただいたのが最初。」I.K 氏も当初はセンターの役割には疑問を持っていたことが分かる。ここから現状のセンターの果たす役割は『団体 1』がセンターに関わるようになってから形成されたと考えられる。

現在では、I.K 氏がひこね市民活動センターの代表兼窓口となり市民活動団体と市民とのつなぎ役になっている。

「センターにしても窓口って言葉にしてたんやけど、いろいろ書類通すときに代表じゃないと通らなくて、それやったらってことで代表兼窓口ってことになった。せやから、普通組織だってやってる代表って意識は全くなくて、みんなで作っていくもんやん。それが出来るだけ長く続けれるのが大事。その手段として名前がいるのなら、まあいいですよって。だから別に当番製の代表でもええんちゃうって私は思ってる。」

多くの人に作ってってもらうことでひこね市民活動センターが長く続いていくべきであるという I.K 氏の考えが伺える。

(4) 『団体 1』の広報について

『団体 1』の広報についてまとめる。表 3-4 は『団体 1』の事業部ごとの広報媒体に関する表である。

表 3-4 『団体 1』の事業部別広報媒体

事業部	広報媒体
国際交流	・ロコミ
	・チラシを作って公民館とか公の場所に貼る。
自然環境	・市などと協力しているため、ホホコミュニティとしての広報活動はない。
CAP	・ロコミ
	・年に1回ぐらい学校にいくぐらい。
地域交流	・センターでの活動が地域交流なので、センターでの各団体の広報を広報ひこねに載せるなど。

『団体 1』の広報の現状として、I.K 氏の発言を以下に記述する。

「今年はある程度あっちこっち行かんようにしてね、ここにいたらいろんな人から情報

回ってくるし。」「広報に力を入れるより、現場での各活動の充実を図る時期です。」この発言から、『団体 1』にとって現在の広報状況には大きな問題点はなく、活動の基盤を固めることが優先されていることが分かる。

(5) 『団体 1』としてのエフエムひこねの利用について

I.K 氏は「『団体 1』としてエフエムひこねを利用していきたいか？」とのメールでの問いに対して、「ラジオを聴くことがないので、エフエムひこねさんについてはコメントできませんが、せっかく地域のラジオ局なので、私も含めて多くの市民が興味を持つようになれば良いですね。」と回答されていることから、エフエムひこねとは、聴取者としても、市民活動団体としての情報発信の場としてもあまり深く関わってこなかった様子が分かる。

市民活動団体の情報発信媒体としてコミュニティ FM が有効であるならば、より『NPO 法人団体 HO』側からもエフエムひこねに対してアプローチがあることが望ましいと考えられるが、現状として、あまりエフエムひこねの必要性を感じていないのが実態である。

また、『団体 1』が AM ラジオ放送である、KBS 京都に情報を紹介してもらった際のコメントとして、「KBS 京都にイベントを紹介してもらうたびに問い合わせや聞いたという反響があった。」としている。このことからラジオという媒体の影響力については認知してあるはずであるが、「今は動き出すとあかんから。今でさえ手いっぱいやから」という言葉にもあるように、現状として、日常の業務に追われていて、『団体 1』側から新しくエフエムひこねとの関係を構築して、情報を流せるような環境を作ることは困難であると考えられる。

3-2 彦根市における他の交流の場について

彦根市における交流の場として、ひこね市民活動センター以外に『プレイハウス晒庵』や『ひこね「まちの駅」寺子屋力石』などが交流の場として存在していると考えられる。『ひこね「街の駅」寺子屋力石』については、今回諸事情により調査できなかったため、ここでは彦根市の芹川沿いに『プレイハウス晒庵』についてまとめる。

3-2-1 プレイハウス晒庵の概要

プレイハウス晒庵(以下：晒庵)は、『団体 16』に地元の中藪町西自治会が協力し、市の公園予定地内にある旧葬祭事務所の建物を 2 ヶ月がかりで改修し、平成 18 年 9 月 23 日オープンした施設である。鉄骨 2 階建ての 2 階部分約 80 平方メートルに和洋の 2 部屋と台所や簡易トイレをつくり、芹川のけやきの古木で作った会議机も置かれている。⁶⁾

作品の展示や会議、芹川沿いの遊歩道を散策する人々の休憩などの利用を目的としている。

『団体 16』代表 A.Y 氏に対してヒアリングを行う際に実際に足を運んだが、芹川を歩く多くの人々が実際に休憩の場として立ち寄り、休息している様子が伺えた。



図 3-3 晒庵の外観



図 3-4 晒庵の内部

(出所：2007 年 2 月 17 日晒庵にて著者が撮影)

3-2-2 プレイハウス晒庵と市民活動団体の関わりについて

晒庵について発言している団体として、『団体 16』『団体 7』『団体 8』が挙げられる。

『団体 16』については晒庵を設置する際に主体となった団体である。その他 2 団体については竹林整備を進めている団体である。

3-2-1 でも述べたように、晒庵は主に芹川沿いを歩く市民の憩いの場としての機能を果た

しており、この 2 団体はそこにチラシなどを設置することで、市民にそれぞれの活動を認知、参加してもらおうと試みたと考えられる。この点から晒庵でも今後市民活動団体の交流の場となる可能性が考えられる。

3-3 本章のまとめ

本章では、主にひこね市民活動センターと市民活動団体の関わりと、交流の場としてのひこね市民活動センターについて考察を行った。また、管理運営団体である『団体 1』の概要、ひこね市民活動センターとの関わり、エフエムひこねの利用に対する考察を行った。

その結果、ひこね市民活動センターにおいても情報交換会で交流が行われているが、その情報は発信されにくいというのが現状である。また交流の場として、民間の中間支援センターとして資金面での課題や、市民活動センターの交流の場として大勢が集まるスペースが確保されていない現状が明らかになった。さらに、ひこね市民活動センター内で行われた情報交換が外部に届きにくいという現状も明らかになった。そこで、交流の場に求められる機能として、資金や交流するスペースの他に、交流の場で行われた情報交換を外に発信するという『情報発信』が必要だと考えられる。そこで、本研究では次章で彦根市を中心とした放送を行っているコミュニティ FM であるエフエムひこねに着目し、市民活動団体の新たな広報媒体となる可能性について検討していく。

また、ひこね市民活動センター以外の交流の場として、晒庵に着目し市民活動団体による利用について考察を行った。その結果、晒庵は市民活動団体がチラシを置くなど情報交換を目的として利用していることから、市民活動団体の交流の場として今後機能していく可能性があると考えられる。

第三章 脚注及び引用、参考文献

- 1) 登録者名簿は 2006 年 9 月 19 日現在のものである。登録番号 23 については記載がなかった。
- 2) 「ひこね市民活動センターの設立と経緯」という資料を 2006 年 9 月 1 日ひこね市民活動センターで入手した。
- 3) ひこね市民活動センター発足時から年に数回、ひこね市民活動センターの運営についての会議がされていた。I.K 氏が初めて参加した運営会議も約 1 年ぶりの会議であり、人数もあまりいなかったそうである。
- 4) 地域交流の枠というのは、I.K 氏が事務局を勤める『団体 1』の一事業部である。

- 5) 滋賀県彦根市発行の行政誌。毎月2回自治会(町内会)に参加している家庭に無料配布される。もしくは、自治会に参加していない企業など『広報ひこね』を求める団体などに対して無料配布を行っている。
- 6) 朝日新聞(滋賀),2006-09-22 夕刊 13 面参照。

第四章

エフエムひこね側からみた 市民活動団体情報発信の可能性について

第四章 エフエムひこね側からみた市民活動団体情報発信の可能性について

第四章では、市民活動団体の情報発信媒体として、コミュニティ FM であるエフエムひこねに注目し考察を行う。

4-1 エフエムひこねの概要

エフエムひこねの概要について表 4-1 にまとめる。

表 4-1 エフエムひこねの概要¹⁾

会社名	エフエムひこねコミュニティ放送局株式会社
通称	エフエムひこね
資本金	¥31,800,000
開局日	2002年9月29日
事業形態	民間
役員	代表取締役社長 O.Y氏
放送内容	放送エリア内の市民に密着した情報の提供
放送時間	24時間
放送エリア内人口	18万人

2002 年 9 月 29 日に、全国第 157 番目の局として開局を迎えた。

放送内容は、表 4-1 にもあるように、他のコミュニティ FM と同様に市民に密着した情報の提供を行うことを掲げており、市民に役立つことという点で市民活動団体とのつながり可能性があるのではないかと考えられる。

4-2 エフエムひこねとまちの関わり

4-2-1 番組の特徴

表 4-1 にもあるように、原則的に 24 時間の放送が行われている。黒く色分けしたものが彦根について情報を流す番組、もしくは彦根の一般市民²⁾による放送である。一般市民のパーソナリティとしては、主に商店街の住民、大学生である。その他にボランティアの技術スタッフとしても大学生を取り入れている。

自社製作番組と他社配信番組を比較すると約 1:2 の割合で他社配信番組が多くなっている。特に、深夜は他社配信番組となっている。また、日曜日は終日他社配信番組で構成されている。

表 4-2 エフエムひこね番組表³⁾

時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日			
7:00	自社製作生番組					他社配信番組	他社配信番組			
						自社製作生番組				
10:00	他社配信番組	自社製作生番組			他社配信番組	他社配信番組				
		他社配信番組				自社製作生番組				
					他社配信番組					
13:00	自社製作生番組									
14:00						自社製作生番組				
	商店街アワー	若手経営者紹介アワー		商店街連盟アワー	自社製作収録番組					
16:00	他社配信番組	自社製作生番組	他社配信番組		他社配信番組					
17:00	彦根こども安全情報									
	自社製作生番組	自社製作生番組	自社製作生番組	自社製作生番組	自社製作生番組					
18:00	インフォメーション彦根									
	他社配信番組			自社製作生番組	他社配信番組					
19:00	商店街アワー(再)	若手経営者紹介アワー(再)		商店街連盟アワー(再)	自社製作収録番組					
	自社製作収録番組					他社配信番組				
19:45	他社配信番組									
12:00										
7:00										

彦根の情報を流すための番組、彦根に住む一般市民による放送。自社製作番組

他社からの番組購入による放送

自社製作番組

4-2-2 まちの出演者に対するヒアリング

エフエムひこねで番組を持つ人物にそれぞれ、エフエムひこねに出演する経緯、番組を通して発信したい内容、エフエムひこね、コミュニティ FM に関してヒアリング対象が持つ考えについてヒアリングを行った。これはコミュニティ FM の特徴の一つである、地元住民による情報発信の現状を把握するためと、エフエムひこねへの関わり方を把握することで市民活動団体のアプローチの仕方を提示出来ると考えたからである。

表 4-3 ヒアリング対応者の属性

ヒアリング日時	対応者	属性
2006年2月24日	E.M氏	彦根市在住、楽器屋店主
2006年2月26日	W.K氏	彦根市在住、旅館店主
2006年2月28日	A.K氏	彦根市在住、酒店店主
2006年10月30日	H.M氏	彦根市在住、大学生

(1) 出演までの経緯

表 4-4 番組出演までの経緯

対応者	コメント
E.M氏	・エフエムひこね出演のきっかけは、局が出していたプルトップ回収のチラシ。
	・「コミュニティFMなので、もっと彦根を盛上げる放送をしてほしい、特に音楽面で」っていうメールを局にしたら、「番組を持ってみませんか？」っていうオファーが来た。
W.K氏	・エフエムひこねの出資者に花しょうぶ通りが入っている。
	・エフエムひこねの社長と知り合い。
	・エフエムひこね立ち上げ時に商店街のイベントがあったので出演したことがきっかけで番組を持たないかという話をもらって商店街アワーに出演するようになった。
A.K氏	・エフエムひこねから番組に出ないかという依頼があった。
H.M氏	・ずっとラジオに出たいと思っていたて、知人の紹介でエフエムひこねを紹介してもらった。

エフエムひこね側からのアプローチと、情報発信したい側の両者からのアプローチが行われている。しかし、H.M氏は「将来ラジオのパーソナリティになりたい。」と言うように、非常に意欲的であることを考えると、E.M氏、W.K氏、A.K氏のように局から話を持ちかけられることがエフエムひこねにおいては一般的であると考えられる。

(2) 番組内容

次に番組内容について、まちの出演者の番組に対するコメントを整理する。

表 4-5 番組内容に関するコメント

対応者	コメント
E.M氏	・路上で音楽活動をしている人の発表の場がなかったので、そういう場所に したかった。
W.K氏	・商店街のことを中心に彦根のことを話している。 ・売り出し、イベント告知などをしている。
A.K氏	・彦根周辺の若手経営者に出演してもらっている。 ・彦根で頑張っている人の情報が少なかった。 ・受け手は頑張っている人の情報を探そうとしなかったし、送り手も発信し ようとしていなかった。
H.M氏	・どうすれば、リスナーに聞いてもらおうと楽しいかを考えている。 ・自分のため。 ・自分のためが世の中のためになると思ってやった。 ・彦根を盛上げようとかは思っていない。それよりも人を楽しませたいと思っ ている。

E.M 氏、W.K 氏、A.K 氏は彦根市民や彦根市で活動している人々のために放送を行って
いるが、H.M 氏は自分の将来のためにエフエムひこねを勉強の場として利用していること
が分かる。

(3) 出演者側から見たエフエムひこねに対する評価点と改善すべき点

表 4-6 エフエムひこねに対するコメント

対応者	コメント
E.M氏	・コミュニティFMはあちこちにあるから差別化を。
	・コミュニティFM同士のネットワークがあればおもしろいと思う。
	・もっと地域の特性を出すべき。
	・もっと彦根に住む人の話が出るような泥臭い放送をしていくべき。
	・e-radiolに比べて範囲の狭いエフエム彦根はもっと地元に着ける。
W.K氏	・学生のための情報とか、彦根のイベントの宣伝とかに絞った番組作りをするべき。
	・大学生が多いのだから、大学生に聞いてもらえる番組づくりをする。
	・コミュニティFMなのに商店街との関わりが少ない。
	・もっと外に音を出して、買い物している人や、歩いている人に聞いてもらえるようにすべき。
	・手作り感があって良い。
	・凄く気軽に参加できる。
	・場所が悪い。
	・人と同じ目線での放送をするべき。
	・スタジオを一階にすべき。
A.K氏	・やって楽しいし、自分にとっても非常に良い経験となっている。
	・酒屋ありきなので、身の丈以上のことをするつもりはない。
	・聞いたらすぐ利用できる。
	・同じ地域の情報の共有が出来る。
	・スポンサーが付きにくい。
	・周りの反応も何かやっとなあめなもの。
H.M氏	・学生を出させてくれる良いメディアだと思う。
	・将来、喋るコトで生計を立てたいので良い経験になっている。
	・もっとバラエティ番組を増やしたらおもしろいし、みんな聞いてくれると思う。
	・コミュニティFMの特徴を活かすのも良いが、もっとエンターテインメント性を強めた方が聞いてもらえると思う。

表 4-6 より、まちの出演者のエフエムひこねに対する意見が明らかになった。プラスの意見としては、親近感や手作り感などが挙げられる。これは、コミュニティ FM の意義である地域密着に沿っていることから、エフエムひこねでも一定の成果を挙げていると考えられる。一方で、マイナスの意見としては、聴取者に定着しているのだろうかという疑問であると考えられる。これらのことから、番組に出演している一般市民から見たエフエムひこねとしては、コミュニティ FM として一定の成果を挙げているが市民はより多くの彦根市の情報、興味ある番組内容を求めているのではないかと考えられる。

4-2-3 放送以外での聴取者との関わり

エフエムひこねでは、通常の放送以外にも年に数回聴取者を交えたボーリング大会を行うなど放送以外での交流も行っている。また、エフエムひこねの特徴として、A.K氏が「ベルロードのたこやきのくる味さんは、ヘビーリスナーの溜まり場になっている。」と言うように、ひこね市内の飲食店店舗では、エフエムひこねの聴取者同士が交流の場として利用されていることが挙げられる。このようにエフエムひこねというコミュニティ FM 局が存在することで市民間の交流が生まれていると考えられる。コミュニティ FM の『地域密着』という目的に沿った事例であると考えられる。

4 - 3 エフエムひこね側の市民活動団体情報発信の意思

2006 年 9 月 19 日にエフエムひこね代表取締役社長の O.Y 氏に対してヒアリングを行った際に、市民活動団体情報発信の意思についての質問を行った。以下はその際の回答である。

- ・ 局としては、門戸は開いている。
- ・ ただ、経営があつてこそなので、市民団体が出演することになってスポンサーがついてもらう、もしくはついてもらう可能性があるような状態が望ましい。

といった意見がみられた。さらに、「門戸は開いているつもりだが、市民団体側が何を思い、考えているのかこちらとしても見えない部分があるので、現在はアプローチをしていない。」という意見もみられた。このことから現状として、エフエムひこね側からの市民活動団体に対するアプローチは積極的でないと考えられる。

エフエムひこねの運営方針

また、経営に関しては、「技術と営業で言えば営業の方が大事。良いものを作るということはもちろん必要ではあるが、放送を作るのにも資金が必要である。電気代一つにしてもそう。「売る」とことをしなければ、何も生まれない。」という意見がみられた。

今後のエフエムひこねの放送

今後のエフエムひこねの放送の方針としては、「今までは、県域に負けない放送というのを目標にやってきたが、これからはエフエムひこねでしか出来ない放送、もっと地域に濃い放送を目指していく。」ということであった。

市民の放送への参加

京都では、特定非営利法人 NPO 京都コミュニティ放送局という NPO 法人の運営によるコミュニティ放送局があり、同局では、時間ごとに定められた番組枠を販売することで一般の人を取り入れるという放送が行われている。

O.Y 氏に対して、京都での事例のように、番組枠を販売することで多くの人にラジオ放送に参加してもらう意思は持っていないのかを質問した結果、「京都のようにはしたくない。」「京都は確かによく言えば、市民参加だがお金を払えば何をやっても良いのかということになる。」「局全体のコンセプトが曖昧になる。」といった回答が得られた。

NPO 京都コミュニティ放送局へのヒアリング調査を行った際に、同局理事である T.K 氏も「番組の審査会みたいなのはあるが、基本的には全員に出演もらっている。ただし、CM 的な放送は禁止している。」と発言されていた。多くの市民が参加しているという事実がある反面、O.Y 氏の指摘する「局全体のコンセプトが曖昧になる。」という恐れにつながると考えられる。また、NPO 京都コミュニティ放送局を対象として 800 世帯に対してアンケート調査を行った、立命館大学産業社会学部津田ゼミで調査の代表であった M.N 氏は「地域のラジオというのに、聞こえる範囲の中に住む人の放送がなかったことが調査のきっかけだった。」とおっしゃるように、可聴範囲内の情報を発信しないという状況も、O.Y 氏の不安と重なる点であると考えられる。

4 - 4 エフエムひこねにおける市民活動団体番組

4-4-1 過去の市民活動団体番組

ひこね市民活動センターでのヒアリングから、エフエムひこねが開局した当初、同局において市民活動団体番組でパーソナリティをされていた A.Y 氏の存在が明らかになった。2006 年 10 月 20 日に A.Y 氏に対してヒアリングを行うことが出来た。A.Y 氏に対する質問としては、過去の市民活動団体番組を行うまでの経緯、番組の様子などについてである。過去の市民活動団体の形態などが明らかになった。

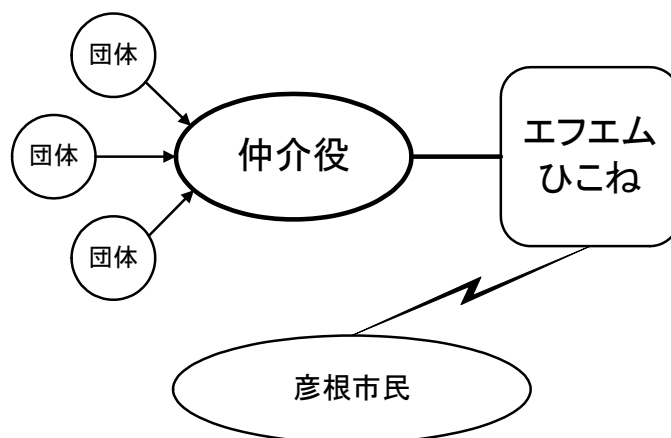


図 4-1 過去の市民活動団体番組の番組形態

図 4-1 は、過去の市民活動団体番組の状況を図示したものである。以前の番組では仲介役となる A.K 氏がさまざまな団体に個別に取材、出演依頼を行い、放送までの準備を整え、放送当日に市民活動団体側が局に出向くという形態をとっていた。

「ほんまは前のようにやりたい。」という意見がみられるなど、A.Y 氏が市民活動団体の番組に意欲的であることが伺える。一方で、「ラジオを止めたのは、選挙に出ることでメディアを使って宣伝していると思われるのが嫌なのと、今まで紹介してきた市民団体、局に迷惑がかかると思ったから。実際に、『これは A.Y さんの番組？ 誰の番組？』みたいに敬遠する団体さんもあって、直感的に身を引こうと思った。」とあるように、番組終了の背景として、番組担当者であった A.Y 氏の周囲への配慮が関与していることが明らかになった。

エフエムひこねにおいて番組を担当していた当時の周囲からの反応としては、「自分もその当時結構顔が広がったから道であったりしたら「ラジオ聴いてるよ。」とか言ってくれた。」など周囲からは好意的に受け取られていたことが分かる。

また、A.Y 氏自身、ラジオをやっていたときの最大の成果として『団体 1』との出会いであることを挙げられている。「最初は、市民活動センターに登録していない一団体に過ぎなかったが、ラジオをやることで知り合って、高宮でやってた『団体 1』がどっかに移転したいという話になってセンターに入ってもらった。」という意見がみられるように、現在のひ

こね市民活動センターの管理運営団体である『団体 1』をひこね市民活動センターと結びつけたことが最大の成果であると考えておられた。「今のセンターには、自分たちの活動の場として利用している人はいるけど、センターの運営を支えようとしているひとはいない。」「I.K さん一人に負担がかかってくる。」という問題点も挙げられていたが、「その分、センターの宣伝、『団体 1』の宣伝、みたいにメディアに取り上げられたりしている。そんなメリット、デメリットがある。」と発言されていることから、A.Y 氏はラジオを通して、市民活動団体、ひこね市民活動センターに貢献できたと考えていることが分かる。

今後のエフエムひこねでの学生による市民活動団体番組を制作することについては、「学生が以前の自分の役をやると学生ノリになってしまう。」「県大生、滋賀大生と言われてもいっぱいいるし、どこで会えるの?と思う。それよりはみんなが知っているような人が良い。もしくは、市民活動センターの中に放送部でも作るとかね。」とのことであった。また、エフエムひこね側としても「局も 10 分か 15 分かのために人は割けんやろうし、市民団体の情報を待っている人もどれぐらいいるのか分からない。」と、市民活動団体番組を行う際の局の経営上の問題点と、放送を聴く人たちに対する疑問を指摘された。

4-4-2 現在の市民活動団体番組

現在、エフエムひこねに市民活動団体の情報のみを扱った番組は放送されていない。現在の市民活動団体の情報は、一番組上で放送されるさまざまな情報の中で週に放送される程度である。

現在、番組で市民活動団体の情報を扱っている、パーソナリティの Y.H 氏に対して現在の番組の状況などについてヒアリングを行うことが出来た。また、ひこね市民活動センターに登録しており、2006 年 11 月からエフエムひこねにおいてボランティアスタッフとしてパーソナリティを任された T.Y 氏に対してのヒアリングを行うことが出来た。

それぞれ、エフエムひこねでパーソナリティを勤めているが、両者の意見を比較することによって、エフエムひこね側、市民活動団体側の接点が模索できるのではないかと考えた。

(1) エフエムひこね側から見た現在の市民活動団体番組について

Y.H 氏に対してヒアリングを行うことが出来た。ヒアリングから市民活動団体を取り上げるに至った経緯、現在の市民活動団体番組の扱いについて明らかになった。

市民活動団体を取り上げる理由

Y.H 氏が市民活動団体を取り上げるようになった経緯、その理由について、「もともと、私の考えとして、「コミュニティ放送」なので、地域密着で市民の活動を紹介していくのが大切だと思ってました。(ただ民法なので、全て無償ではなりたたないので、どこまでタダ

で宣伝して良いかが判断の難しいところですが...) - 中略 - そうしたところ、皆さん、なにかとそれぞれ顔見知りであったり、活動範囲が重なっていたりして「数珠繋ぎ」のように、次々と取材先を紹介してもらえました。」とメールで回答されている。このことから市民活動団体間である程度の交流が行われていると考えられる。

現在の市民活動団体番組の形態

Y.H 氏へのヒアリングの結果、赤井氏と同様に図 4-1 にあるように、Y.H 氏が仲介役となっていることが明らかになった。過去の市民活動団体番組との相違点としては以下の 2 点が挙げられる。現在は、市民活動団体のための番組ではなく、番組上のさまざまな情報の中で週に一度市民活動団体について放送している点、さらには、市民活動団体側から局に出向くのではなく、Y.H 氏が自ら各市民活動団体の所へ取材に出向いている点である。

「取材に行く所も市民活動団体間で数珠繋ぎになって来たからおもしろい。」「行政のところへ行っても縦割りやから横のつながりにつながっていかない。逆に、花しょうぶとか彦根りんごを守る会とかだと、どんどんつながっていく。」というように、市民活動間同士のつながりのおもしろさを実感されている。現在は Y.H 氏が個人的に動くことで市民活動団体の情報が週に一度ではあるが放送されている。しかし、このつながりはパーソナリティ個人のものであり、エフエムひこねとしてではない。このことから過去の市民活動団体番組と同様に Y.H 氏が不在になってしまった場合に、再び市民活動団体の情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性は消失すると考えられる。

(2) ひこね市民活動センター登録者側からみた市民活動団体番組について

T.Y 氏に対しては、エフエムひこね出演までの経緯、番組の内容、ひこね市民活動センター登録までの経緯、ひこね市民活動センターにおける T.Y 氏の役割についてヒアリングを行った。

エフエムひこね出演までの経緯

きっかけとしては、学生パーソナリティであった H.M 氏が卒業を控えており、新たなパーソナリティを探していたところに同大学で知り合いであった T.Y 氏に打診があったことであることが明らかになった。以下、T.Y 氏がエフエムひこねに出演するまでの経緯についての発言である。「学園祭の司会をしたときに、話すのっておもしろいなって思って。話自体はぐずぐずやったんですけど...それで話すのって難しいな、おもしろいなって思っててリトライするチャンスはないかなあと思ってたら、H.M さんかの話が来て出演しようかと思った。」

これは第一章で述べた、他のメディアと異なり、コミュニティ FM においては市民が自

らマイクを持つ機会が多いということが、エフエムひこねにおいても起こっていると考えられる。

番組の内容について

T.Y 氏が担当している番組の基本的なコンセプトとして、『大学生の視点から彦根を盛上げる』という点が挙げられる。以下は近野氏の番組に対する発言である。「彦根を盛上げたってというか、彦根が何か変やなあって気持ちがあって、例えば文化遺産とかはあるけど、それを置きっぱなしにしてるところが多々あって、何でこんないいものがあるのに置きっぱなしにするんやろ？何でこんないいものがあるのにこんなに汚いんやろ？彦根は結構おもしろいのになぁと思う。僕大阪出身で、大阪の方が好きで大阪に帰りたと思うけど、彦根もったいないなぁと思う。」

現在の番組に関しては、情報を発信するだけの今の番組形態に疑問を持っているようである。「ただ情報を流して終わる感じ。自分が喋ってネタが続くんかなあっていう心配もあるけど、「こうこうこんなんがあって、こんなんやってるんですよ。」って言うても、聞いててもおもしろいんかなあって思って。」T.Y 氏も A.Y 氏、H.M 氏と同様に番組のおもしろさについて言及している。彦根市の情報を流すという目的と番組のおもしろさは異なるものだと考えていることが分かる。

「僕は彦根再発見っていうのを思ってるんで。まぁ例えば有名な観光スポットもあるけど、他にも落ち着いて見れるトコがありますよって。彦根市民やから気づかない、外からきたから...今どうかなあと思いつつ考えてるネタが、窓に細い棧があるじゃないですか、あれって遊郭の名残やっていう話を聞いたんですよ。それが、各所にある。それを鑑賞する楽しみみたいな。その鑑賞の仕方とかおもしろいかなあと思うけど、一般受けするんかなあと思って。」彦根市民に自分たちのまちについて、注目してもらおうという思いを持っていることが分かるが話として受け手側に受け入れられるかという不安があることが考えられる。

ひこね市民活動センター登録までの経緯

「もともと、雑誌の編集に関わる仕事がしたくて、エコスタイル⁴⁾っていう自転車屋さんがあるんですけど、そこでこういう仕事がしたいんですって言うたらここから情報発信するときの会報を編集する人間がおらんから手伝いも出来るかもよっていう話をされて、行ってみますっていう話しをしていたら気づけば登録していた。」T.Y 氏の場合、センター登録のきっかけは自分の市民活動を広めたい、情報を集めたいというのではなく、将来的な展望を見据えてのことであることが分かる。

一方で T.Y 氏自身もひこね市民活動センター登録団体の『団体 5』に登録しており、ボランティアや市民活動に興味があると考えられる。それについては、以下のような発言からも明らかである。「流れでセンター登録することになったけど、市民活動に興味がないわけ

ではない。」「もともと母親がボランティアで読み聞かせをやっていて、市民活動とかボランティアとかに対して抵抗はなかった。」

ひこね市民活動センターにおける T.Y 氏の役割について

T.Y 氏のひこね市民活動センターでの役割は、ひこね市民活動センターの広報担当である。「役割的にも広報って言われたんですよ。センターの広報担当みたいな、役職というか、担当というか。」「じゃあ、エフエムひこねでひこねを盛上げるってのに、センターのネタは使えるなあと思って。」また、番組の内容としてひこね市民活動センターの話を取り入れようとしていることが分かる。しかし、「市民活動団体の情報に対するニーズがあるのか？」という問いに対しては「確かにネタにはなるけど、ニーズがあるのかなあ？と思う。」という回答だった。このことから市民活動団体の情報についても、A.Y 氏と同様にラジオ放送として考えた際に、番組が聴取者に受け入れられるか疑問を持っていることが分かる。

(3) 市民活動団体の情報発信の場としてのエフエムひこねの可能性について

現在のエフエムひこねにおいては、市民活動団体に興味を持つ個人からのアプローチが行われていると考えられる。今後は市民活動団体側からのアプローチを行い、エフエムひこねが市民活動団体の情報を収集しやすい状況にすることで、エフエムひこねとして市民活動団体の情報発信について検討されるのではないかと考えられる。

また、エフエムひこねの出演者の意見から、エフエムひこね側の考えとして、市民活動団体の番組を含めた彦根市の情報は聴取者にとってあまり興味のない情報として扱われていることも、市民活動団体の情報発信を妨げる要因の一つであると考えられる。

4 - 5 本章のまとめ

エフエムひこねに出演する市民の中に多くみられた、『彦根市民との距離の遠さ』に関する意見から、現状としてエフエムひこねは彦根市民との関係性が低いのではないかと考えられる。放送規模の小さいコミュニティ FM にとって可聴範囲内の住民に、いかに馴染み深いメディアになるかが重要であると考えられる。そのため、今後さらにエフエムひこね側から市民に対する歩みよりが必要ではないかと考えられる。

次に、市民活動団体の情報の取り扱いについてであるが、過去の市民活動団体番組を担当していた A.Y 氏は、市民活動団体、ひこね市民活動センターに一定の貢献できたと考えていることが分かった。しかし、現状として A.Y 氏は市民が市民活動の情報を求めているのかという点については疑問を持っておられた。また、T.Y 氏も同様に市民が市民活動団体の情報を求めているのかについて疑問を持たれていた。このように、エフエムひこねにおいて番組内で市民活動団体の情報を取り上げにくいと考える出演者がいる一方で、Y.H 氏のように市民活動団体の情報を積極的に取り入れているパーソナリティの存在が明らかになった。エフエムひこねの中でも市民活動団体の取り扱いについては個人の裁量によるところが大きく、メディアとして多くの聴取者に受け入れられると考えられる放送を行うのか、コミュニティ FM のテーマともいえる「地域情報の発信」を行うのか、この両者の間で意見が分かれているというのがエフエムひこねにおける現状であると考えられる。しかし、仮に多くの聴取者に受け入れられる放送番組となることにより、放送の対象とする人物像が薄れることは、番組における特色の喪失につながり、既存のマスメディアと同様に大衆化された番組内容に近づいていくのではないかと考えられる。そのため、エフエムひこね代表取締役社長 O.Y 氏の「地域に濃い情報を発信する。」という方針とのズレが発生すると考えられる。

また、エフエムひこねにおいて市民活動団体の扱いは非常に小さなものである。現在市民活動団体取材し、番組の内容の一部として市民活動団体の情報を取り扱っている Y.H 氏の「行政のところへ行っても縦割りやから横のつながりにつながっていかない。逆に、花しょうぶとか彦根りんごを守る会とかだと、どんどんつながっていく。」と発言にもあるように、彦根市民間での交流は活発であると考えられる。このつながりを利用して、多くの市民にエフエムひこねの存在を伝えていくことで、エフエムひこねという局が市民の中に定着していくのではないかと考えられる。

また、経営について考えた際に、市民活動団体の情報を流すことがもたらす利点は少ないと考えていることが予想される。しかし、エフエムひこねにとって市民活動団体番組を放送することで、市民の生活に入り込んだ放送ができ、まちの出演者の意見にある『彦根市民との距離の遠さ』を解消につながると考えられる。

- 1) エフエムひこねコミュニティ放送株式会社:
< <http://www.fmhikone.jp/index.html>>,2006-12-20
敬称は省略している。
- 2) ここでいう『一般市民』とは、ラジオに出演することで金銭的な利益を得ない、ボランティアとして関わる人々を指す。以降、『一般市民』については同義として扱う。
- 3) 番組表は 2006 年 12 月 21 日現在のものである。
- 4) エコスタイルとは本研究のヒアリング対象者でもある T.H 氏が経営する自転車屋である。

第五章

市民活動団体の 情報発信と交流の場に関する考察

第五章 市民活動団体の交流の場と情報発信についての考察

本章では第二章で示した、類型ごとに交流の場としてのひこね市民活動センターの果たす役割と、情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性について考察していく。

5 - 1 類型ごとの特徴と分類項目について

5-1-1 各類型の特徴について

(1) 勉強会型の特徴

ひこね市民活動センターを活動の場、交流の場として利用している団体を勉強会型として分類した。

勉強会型に分類される団体は表 5-1 の通りである。

表 5-1 勉強会型に分類される団体とその活動目的

団体名	活動目的
団体2	不登校支援
個人サポーター・K.K氏	研修企画
団体3	カウンセリング
団体4	不登校支援・教師と保護者研修
団体5	情報交換
団体6	学生勉強会

さらに、以下にそれぞれの団体についての基礎的な情報を記載する。

団体 2

表 5-2 『団体 2』の概要

団体名称	団体2
代表氏名	Y.Y氏
活動開始年	2004年
資金源	会の参加料
会員数	15、6名
運営スタッフ	数名
活動目的	不登校支援

不登校支援を目的としており、ほぼ月に一度ひこね市民活動センターにおいて活動を行っている。活動の資金としては、毎回参加者から徴収している 500 円であるが、そのうち

の半分近くはひこね市民活動センターの利用料や、会の案内を送付するための費用に当てられている。この会では子どもが対象ではなく、その親を対象として活動を行っている。ここで話し合いをすることで、悩みを内に溜め込まないようにしてもらうことと、多くの人に不登校児に対する接し方などのヒントを得てもらう機会を作っている。

個人サポーター・K.K 氏

表 5-3 『個人サポーター・K.K 氏』の概要

団体名称	個人サポーター・K.K 氏
代表氏名	K.K 氏
活動開始年	2000年
資金源	自己負担
会員数	会員制度ではない。
運営スタッフ	1名
活動目的	研修企画

保険関係の仕事をされており、その経験を活かし多くの人に年金・医療・介護について相談・講演などを行っている。市民活動センターにおいても年金についての講演会を開催された。

団体 3

表 5-4 『団体 3』の概要

団体名称	団体3
代表氏名	N.K 氏
活動開始年	2004年
資金源	自己負担
会員数	なし
運営スタッフ	1名
活動目的	カウンセリング・認知行動療法の普及

パニック障害に関する講演など、活動は一人で行っているが、団体として活動している。認知行動療法は一般的に臨床の部分に重点を置かれているが、『団体 3』では普及に重点を

置くことで、多くの人に認知行動療法についての正しい理解を得てもらうことを目的としている。

団体 4

表 5-5 『団体 4』の概要

団体名称	団体4
代表氏名	K.T氏
活動開始年	1970年代
資金源	会ごとに参加費を徴収
会員数	全国会員は約700名
運営スタッフ	父母の会:12人、教師の会:14人
活動目的	不登校支援・教師と保護者研修

もともとは同和教育について話し合うことを目的に会が発足された。研究会発足後すでに30年以上経過している。現在は全国33府県に約700名の会員を有する。滋賀県では、事務局として彦根、大津、長浜、高島が存在しているが、現在実際に活動しているのは彦根、大津、長浜の3事務局である。活動としては主に、「父母の会」「教師の会」に分かれている。

「父母の会」では、子育て支援を目的としており、悩みを持つ親の相談にのっている。

「教師の会」では、学級崩壊などにより複雑化していく学校事情の中で悩みを持つ教師が集まり、話し合うことで、学級の建て直しへの解決の糸口を模索している。

全国に会員が700名いるが、彦根での活動では、Y.Y氏が中心となっており、実質彦根での運営者側の人数は10数人である。

団体 5

表 5-6 『団体 5』の概要

団体名称	団体5
代表氏名	N.Y氏
活動開始年	2005年
資金源	各自自己負担
会員数	6～7名
運営スタッフ	6～7名
活動目的	情報交換

登録メンバーは現在 6～7 人である。活動形態としては、普段は会員が個人で活動を行い、月一度行われる交流会においてそれぞれの活動報告を行う。その中で会員が興味を持ち、団体として活動することになったボランティア活動に積極的に参加していく団体である。

団体 6

表 5-7 『団体 6』の概要

団体名称	団体6
代表氏名	U.Y氏
活動開始年	2005年
資金源	各自自己負担
会員数	6～7名
運営スタッフ	6～7名
活動目的	学生勉強会

教育に興味を持つ学生が集まり、勉強会を行う団体である。場合によっては討論を行うこともある。所属人数としては 6～7 人であり、前述の『団体 5』のメンバーも複数所属している。

(2) 情報交換型の特徴

ひこね市民活動センターを活動の場として利用していないが、情報交換に訪れる団体を情報交換型として分類した。

情報交換型に分類される団体は表 5-8 の通りである。

表 5-8 情報交換型に分類される団体とその活動目的

団体名	活動目的
団体7	環境・雨壺山整備
団体8	環境・東山整備
団体9	建築保存
団体10	まちづくり
個人サポーター・K.S氏	個人・企画
団体11	楽器演奏・パフォーマンス

さらに、以下にそれぞれの団体についての基礎的な情報を記載する。

団体 7

表 5-9 『団体 7』の概要

団体名称	団体7
代表氏名	O.K氏
活動開始年	2004年
資金源	年会費
会員数	12名
運営スタッフ	12名
活動目的	雨壺山・竹林整備

雨壺山の竹林整備を行う団体である。活動開始は 2004 年 6 月である。現在、活動は月に 2 回で、構成メンバーは 12 人である。チップーと呼ばれる竹の粉砕機を使用する際に人手を求めており、2006 年 10 月 7 日に初めてチップーを使用した。それ以外の活動日は基本的に構成メンバーのみで行われている。

以下は、10 月 7 日に行われた竹林整備の際の人手募集のために配布されたチラシ³⁾より抜粋したものである。

市街地のオアシス雨壺山は、彦根城などとともに市が管理する基幹公園です。2 年前にボランティア・グループを結成、彦根市と『樹林保全委託契約』(無償)を結んで、現在約 2 ヘクタールの荒廃竹林を『里山』に復元する作業を続けています。

団体 8

表 5-10 『団体 8』の概要

団体名称	団体8
代表氏名	K.S氏
活動開始年	2006年
資金源	年会費
会員数	15名
運営スタッフ	8名
活動目的	東山整備

2006 年 8 月に発足。現在は会員数 15 名で活動を行っている。『団体 8』の現状を、会の広報誌⁴⁾より抜粋する。

ある森林整備を進めておられる NPO の方や『みんなで始めよう森づくり活動公募事業』(県の補助金事業)のお誘いをいただき、町内外の有志 10 余名が集まり、会設立の話し合いを 2 回もち、上記の名称⁵⁾も決め、現在その趣意書を配布しながら入会をお願いしているところです。

また、同団体では伐採した竹で作る竹炭の販売も行っている。

団体 9

表 5-11 『団体 9』の概要

団体名称	団体9
代表氏名	M.N氏
活動開始年	2005年
資金源	ほぼ自己負担
会員数	1名
運営スタッフ	1名
活動目的	建築保存

ひこね市民活動センターには団体として登録しているが、活動は M.N 氏個人である。団体として活動している理由としては、イベント開催時にブースを設ける際に個人では出展できない場合があることや、団体名にしている方が活動を理解してもらいやすいからというものである。

M.N氏は、「団体名で登録しおくと、対外的に何かやるときに便利なんで『団体 IS』として登録している。」と発言されている。『団体 9』は、現在は個人での活動を行っているが、「『団体 9』の場合、去年の屋台村のときに、個人ではブースが出せないからということで一応団体を作って…。だから所属しているのは僕一人。団体にしておけば、今度の高島である市民フォーラムみたいななんも出せる。ところが、僕の名前だと出せない。個人名だとブースを割り当ててもらえない。」という活動する上での利便性を考えて団体を名乗っている。

団体 10

表 5-12 『団体 10』の概要

団体名称	団体10
代表氏名	K.T氏
活動開始年	2004年
資金源	助成金など
会員数	30数名
運営スタッフ	8名
活動目的	まちづくり

NPO 法人団体である。2000 年に前身となる団体を発足。2004 年から『団体 10』として、滋賀県からの NPO 法人認証を取得し、滋賀県豊郷町を主な活動の場としている。会員数は 30 数名であるが、実働会員は実質 10 名程度である。その活動目的としては、町内外へ地域の魅力を発信していくというものである。主な活動としては、空き家空き蔵整備事業、商工会や民間の団体が一つになっていこうと企画された『夢街道とっとまつり』という夏祭り、秋のオータムフェスティバルにバザーの出展。そのほかにも、彦根発祥の遊びであるカロムの大会である『とよさとカロム大会』の開催、ハロウィンを意識した『コスモス&パンプキンフェスタ』などを開催している。空き家空き蔵整備事業では、滋賀県立大学の有志による『とよさと快蔵プロジェクト』という組織が関わることで、学生の力も活動に取り入れている。

個人サポーター・K.S氏

表 5-13 個人サポーター・K.S氏

団体名称	個人サポーター・K.S氏
代表氏名	K.S氏
活動開始年	不明
資金源	自己負担
会員数	1名
運営スタッフ	1名
活動目的	企画

甲冑作り、陸舟奔車製作、屋形船を彦根城の堀に浮かべるなど多岐に渡る。活動開始年については趣味の延長で始められたことであるため、把握できなかった。

団体 11

表 5-14 『団体 11』の概要

団体名称	団体11
代表氏名	D.T氏
活動開始年	2005（バンドとしては。）
資金源	ちんどん屋としてのお礼
会員数	3名（バンドメンバー）
運営スタッフ	1名
活動目的	楽器演奏・パフォーマンス

2002 年ごろから活動を開始するが、現在のように『団体 11』として活動を始めたのは、2005 年からである。活動頻度は異なるが、月に一度、多いときで月に一、二度ちんどん屋として活動を行っている。以前は固定メンバーが不足しているため、パフォーマンスを行うたびにメンバーが変更していることがあったが、現在パフォーマンスを行うメンバーは主に 3 人となっている。

(3) 独自型の特徴

ひこね市民活動センターに登録しているが、ひこね市民活動センターを通しての情報交換にあまり積極的でなく、活動の場としてもひこね市民活動センターの利用度は低い団体を独自型として分類した。

独自型に分類される団体は表 5-15 の通りである。独自型に分類される団体はセンター以外に事務局を持つ団体ばかりである。

表 5-15 独自型に分類される団体とその活動目的

団体名	活動目的
団体12	福祉
団体13	環境
団体14	環境
団体15	福祉
団体16	環境

さらに、以下にそれぞれの団体の基礎的な情報について記載する。

団体 12

表 5-16 『団体 12』の概要

団体名称	団体12
代表氏名	Y.R氏
活動開始年	2000年
資金源	助成金、施設利用費
会員数	80名
運営スタッフ	8名
活動目的	福祉

NPO 法人団体である。『1999 年に、高齢者の社会問題を研究するグループが立ち上がり、高齢者問題をテーマに、介護保険制度をわかりやすく紹介する「寸劇」を、市内各所で上演する活動を行った。翌年、そのグループのメンバーを中心とした 20 名で活動をスタートさせた。その後、介護保険サービスを提供する中で、法人化の必要性を強く感じ、2001 年 4 月からは、特定非営利活動法人として活動している。

彦根市に活動の本拠地を置き、(1)高齢者支援 (2)子育て支援 (3)障害者支援 の 3 事業を展開している。『団体 12』の支援サービスの発端は、高齢者の支援に始まる。介護ヘルパーの派遣など、訪問介護事業から、対象を子育て・障害者へと拡大してきた。活動拠点の

「あったかファミリーステーションぽぽハウス」では、高齢者と障害児のデイサービスと宅老所、認可外保育などの関連活動を行い、高齢者・障害者・子ども、の3者が共に支えあう「共生型ケア」を目指している。『団体 12』にスタッフとして登録している人は 80 名だが、実際に活動している人は 50 名程度である。メンバーの中には、高齢者だけでなく、若いお母さんたちもいて、活動年齢層は幅広い。介護報酬や県・市の補助、寄付金、利用者の負担金など、事業費総額は約 5000 万円となっている。活動施設は、JR 南彦根駅西口前の民間ビルを使い、最適の立地条件をうまく利用している。』⁸⁾

彦根市が指定管理者制度を導入することにより、2006 年 4 月より彦根市北老人福祉センターの指定管理者として施設の管理運営を行っている。

団体 13

表 5-17 『団体 13』の概要

団体名称	団体13
代表氏名	Y.H氏
活動開始年	1985年前後
資金源	ガラスの体験料
会員数	会員制度ではない。
運営スタッフ	1名
活動目的	環境問題に対する関心の普及

工房を持ち、主に一人でガラス教室を行っている。ガラスづくり体験を通して、参加者に環境について考えてもらう機会を設けるということを目的としている。石鹼運動が盛んな当時、活動に積極的に参加。また、ヴォーリズ建築であるひこね市民活動センター保存のための署名運動にも参加した。現在は、石鹼運動を行った当時の意志を引き継ぎ環境の大切さについて、ガラスを通して市民に普及していくことを目的とし、ガラス体験教室などを行っている。

活動のきっかけとしては、偶然リサイクルガラスの展示を訪れたことである。その展示に刺激を受け、ガラスを始めることを決し、愛知県岡崎市までガラスを習いに行き、行政の力に頼らず現在の場所にガラス工房を開くまでに至った。行政との関わりとしては、以前は彦根市がガラス体験教室の一般募集を行い、その広報をすることで『団体 GA』に協力していた。また、リサイクルガラス展などがあると『団体 13』での作品を展示するということも行われている。

補助金をもらおうと行政の言うことを聞かないといけないとの理由で、行政からの補助金は一切受けていない。

団体 14

表 5-18 『団体 14』の概要

団体名称	団体14
代表氏名	T.H氏
活動開始年	2002年
資金源	会費
会員数	20名
運営スタッフ	12名
活動目的	自転車生活の普及と実践

自転車生活を広める、啓発と実践を通して地球環境に優しいまちづくりを目指し、活動を進めている。サイクリングの企画などを行っている。

団体 15

表 5-19 『団体 15』の概要

団体名称	団体15
代表氏名	O.M氏
活動開始年	1985年前後
資金源	助成金
会員数	施設利用者8名
運営スタッフ	常勤:2名 非常勤:5～6名
活動目的	福祉

当初の設立目的としては、障害が重い人、また、精神的に不安定になりやすい人がゆったり作業出来るような場所にするという目的で設立された。しかし、現在の政府が自立支援法の施行に伴い、現状のままでは『団体 15』は閉鎖を迎えることになるため、他の作業所との合併など作業所存続の方法を現在模索している。作業内容としては、障害者による手芸縫製である。

団体 16

表 5-20 『団体 16』の概要

団体名称	団体16
代表氏名	A.Y氏
活動開始年	2005年
資金源	会費
会員数	20名程度
運営スタッフ	20名程度
活動目的	環境

NPO 法人団体である。『団体 16』の前身である、『芹川を美しくする会』が、2005 年に滋賀県からの NPO 認証を受けて、法人化された。活動目的としては、『美しい芹川を後世に残す』というものである。基本的には毎月一度行われる芹川沿いの清掃活動であるが、その他にも、こども環境創作狂言『芹川』を行い、子どもたちに芹川に対して興味を持ってもらうだけでなく、狂言を通して芹川の良さを多くの人に知ってもらうことを目的とする。

また、地元自治会と協力して、芹川沿いを散歩する人たちの憩いの場となる『晒庵』を設置。また、子どもたちが安全に遊べる場として『いちごパーク』という公園を整備するなど、芹川周辺で活発に活動を進めている。

その他、『団体 16』の事業としては、芹川自然観察会、芹川大好き会事業、けやき倶楽部事業など、芹川の環境を多くの人に見てもらうという事業を行っている。

5-1-2 分類項目について

市民活動団体からみた交流の場としてのひこね市民活動センターの現状と課題を明らかにするため、類型ごとに『ひこね市民活動センターとの関わり』に関するコメントを分類する。

また、市民活動団体の情報発信の現状と今後の情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性を考察するために『情報発信意欲』『情報発信の内容』『利用広報媒体』『エフエムひこねに対する利用意識』に関するコメントの分類を行う。

それぞれの項目選定理由は以下に記す。

交流の場に関する項目

ひこね市民活動センターとの関わり

市民活動団体側からみた交流の場としてのひこね市民活動センターの現状を把握し、今後の市民活動団体の求める交流の場について考察していく。

情報発信に関する項目

情報発信意欲

市民活動団体側からの情報発信意欲を明らかにする。

情報発信の内容

具体的に発信していく内容を明らかにすることで、求める情報発信の内容がエフエムひこねの性質に沿ったものであるかについて考察を行う。

利用広報媒体

市民活動団体の利用広報媒体を把握することで、エフエムひこねとの関わりについて考察を行う。

エフエムひこね利用に対する意識

エフエムひこね利用に対する意識を明らかにすることで、今後の市民活動団体の情報発信媒体としてエフエムひこねの利用に対する市民活動団体側からの意識を明らかにする。

彦根市における市民活動団体の求める交流の場と、情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性について明らかにする。

なお、表に記載されているコメントについては、コメントを要約している。「」内は発言をそのまま抜き出している。発言者の名前が記載されていない場合は、主なヒアリング対応者の発言である。また、発言中、引用した資料内にある団体名、個人名については、団体名については団体番号で、個人名についてはイニシャルで表記している。

5 - 2 類型ごとにみた交流の場としてのひこね市民活動センターについて

ここでは、類型ごとに交流の場としてのひこね市民活動センターに対する利用意識について考察を行う。

5-2-1 勉強会型

勉強会型の交流の場に関するコメントについて表 5-21 に整理する。

表 5-21 勉強会型の交流の場に関するコメント

団体名	コメント
団体2	・こういう会をしたいと思ってたが、場所がなかった。そのときにセンターを紹介してもらった。
	・人数がだんだん多くなってきて、部屋が狭くなってきた。
個人サポーター・K.K氏	・活動の場所として使っている。
	・交流の場として使っている。
団体3	・事務局として使っている。
	・活動の場所として使っている。
	・情報発信の場として使っている。
団体4	・活動の場所として使っている。
団体5	・センターに来ればミチの情報は分かる。
	・活動の場所として使っている。
団体6	・活動の場所として使っている。

活動の場として利用している団体

- ・ 団体 1
- ・ 団体 4
- ・ 団体 6

『団体 1』、『団体 4』は、毎月一度開催されるセンターでの情報交換会に、調査期間であった 2006 年 9 月～12 月までの間に欠席していたため、交流の場としてひこね市民活動センターを利用していないと判断した。

また、『団体 4』は情報交換会に出席しているが、代表の U.Y 氏が、「センターを利用しているのは場所が目的であるから。」としていることから主に活動の場として利用していると考えられる。

交流の場として利用している団体

- ・ 個人サポーター・K.K 氏
- ・ 団体 3
- ・ 団体 5

個人サポーター・K.K 氏

「この情報交換会で来られた方何人かと、たまたま年金の話になって、これの趣旨の話をチラッとお話したんですね。それやろ、やろっていう風になって、今回やることになった。」と発言されているように、ひこね市民活動センターでの交流を通して活動の機会を得ているので、口コミを広報媒体としている K.K 氏にとっては、ひこね市民活動センターの中での交流は同時に情報発信にもなっていると考えられる。

団体 3

「市民活動センターさんのほうでやってくれるとありがたいなぁと思って。やってくれはると思うけど、どこまでやってくれてはるかはわからない。どこまでそれを真剣にやってくれてるかわからない。」とひこね市民活動センターからの情報発信に期待していることが分かるが、ひこね市民活動センターの行う広報の不透明さに対する不安に対しても発言されている。そのため、ひこね市民活動センターで行われた講演の広報について、「1 回目は広報を前面に出さんとセンターに任せた。全面的に任せたんやけど、全面的に来なかった。一人しか来なかった。」という発言につながっていると考えられる。

また、ひこね市民活動センターを情報発信媒体として使う理由としては、「僕はこっちを整える方に必死やから、これもし、あれもしやとめちゃめちゃ忙しい。」と一人での活動の限界があるからだと考えられる。

団体 5

ほぼ毎月一度、メンバー間での会議が行われている他、情報交換会にメンバーが出席するなど、ひこね市民活動センターでの交流を行うことで情報交換を行っていると考えられる。

事務局としても利用している団体

- ・ 団体 3

団体 3

『団体 3』の連絡先がひこね市民活動センターとなっていることなどから、『団体 3』として、ひこね市民活動センターを事務局として利用していると考えられる。

まとめ

表 5-22 勉強会型の交流の場についてのまとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	主に、活動の場としてのみ利用している団体と、交流の場としても利用している団体で半数に分かれた。
ひこね市民活動センター利用目的別の団体数	活動の場として利用している団体：3団体
	交流の場として利用している団体：3団体
	事務局として利用している団体：1団体

勉強会型のひこね市民活動センターの利用目的としては、活動の場としての利用、交流の場として利用している団体がいる一方で、交流を通して自分の活動を広めようとしている団体の存在も明らかになった。しかしそれは、ひこね市民活動センター内での情報発信であり、外部に発信するものではない。ひこね市民活動センターを通して外部に発信しようとしている『団体 3』にとっては、ひこね市民活動センターの情報発信の機能の充実を求めていることが明らかになった。

5-2-2 情報交換型

情報交換型の交流の場に関するコメントについて表 5-23 に整理する。

表 5-23 情報交換型の交流の場に関するコメント

団体名	コメント
団体7	・チラシをセンターに置いた。
団体8	・センターに登録することでいろんな人の知恵を借りたい。
団体9	・写真を撮ることで各団体のバックアップをしている。
団体10	・JCに誘われて行くようになったのがきっかけ ・センターに登録することで新たなつながりが出来る。
個人サポーター・K.S氏	・センターに登録することで新たなつながりが出来る。 ・センターに登録したのは通りすがったことがきっかけ。
団体11	・ここにいたらいい出会いがある。

表 5-23 より情報交換型は他団体との交流に対して積極的であると考えられる。

まとめ

表 5-24 情報交換型の交流の場についてのまとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	交流の場としてのみの利用するという団体と、交流を通しての他団体に対する情報発信が行われていた。
ひこね市民活動センター利用目的別の団体数	活動の場として利用している団体： 1団体 交流の場として利用している団体： 7団体 事務局として利用している団体： 0団体

全ての団体においてセンターはさまざまな団体との交流の場としての役割を果たしていると考えられる。『団体 7』については人とのつながりについては言及されなかったが、実際にセンターの情報交換会に訪れ、竹林整備の参加を呼びかけるなど、活動のためにセンターでのつながりを作ろうとしていることが分かる。

『団体 8』、『団体 10』、『個人サポーター・K.S 氏』、『団体 11』の 4 団体は、人との出会い、つながりについて言及していることから、情報交換型の特徴としては、ひこね市民活動センターでの交流を通して自分の活動の協力者を求めている点であると考えられる。

また、『団体 9』は「写真とか撮って発表するのは苦じゃないので、今日みたいに撮ってあげて後から提供してあげる。」というように、活動の一環として、ひこね市民活動センターの登録者の活動を撮影している。さらに、交流の場としてひこね市民活動センターを利

用することによりこういった活動の機会も得ていると考えられ、ひこね市民活動センターを交流の場としても利用していると考えられる。

5-2-3 独自型

独自型の交流の場に関するコメントについて表 5-25 に整理する。

表 5-25 独自型の交流の場に関するコメント

団体名	コメント
団体12	・センターも情報発信の場として利用している。
	・センターだけでは、情報を伝えたい人に行き渡らない。
団体13	・センターにはあまり行かないで、何かあったときに協力する形にしてる。
	・昔、エヴァグリーンのスペースを今のセンターのようにしようとした。
	・昔、ヴォーリズ建築であるセンターを保護しようと運動した。
団体14	・最近は情報交換会にも行ってない。
団体15	・センターに行くには人手が足りない。
団体16	・センターは場所的に人が集まりにくい。
	・NPO芹川としては、ここ(晒庵)が一番。

本研究では、2006 年 9 月～12 月に毎月行われる情報交換会に出席していない団体を『独自型』と分類したが、実際に『団体 12』以外のコメントの中からもひこね市民活動センターを交流の場として利用するという意識は低いと考えられる。

まとめ

表 5-26 独自型の交流の場についてのまとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	センターにはほぼ登録しているのみである。
ひこね市民活動センター利用目的別の団体数	活動の場として利用している団体：0団体
	交流の場として利用している団体：0団体
	事務局として利用している団体：0団体

『団体 12』では、ひこね市民活動センターの利用に関して、「あそこで全部発信するのは大変なんで、あそこはあそこで利用させてもらってありがたいんですけど、やっぱりそこだけでは網羅できない。公民館とかの施設に置いててもやっぱり全部は網羅できないのでそれがちょっと悩み。」とひこね市民活動センターについて、多様な情報発信媒体の中の一つと考えていることが分かる。

『団体 12』のように、ひこね市民活動センターを交流の場の一つと考えている団体が存在する一方で、『団体 14』『団体 13』のように、積極的に交流の場として利用していない団体、『団体 16』のようにひこね市民活動センターの必要性を感じていない団体が存在することが明らかになった。『団体 15』については、団体の存続が急務であり、そのために交流の場での情報交換よりも現在の活動に力を入れることが重要であると考えていると予想される。

5-2-4 彦根市における市民活動団体の交流の場についてのまとめ

実際の意見をみても、情報交換型が最も交流の場に対して利用意欲が高い。勉強会型の中には、活動の場としての利用以外にも、交流の場としての利用を行う団体もみられた。独自型については全体的に交流の場としての利用意欲が低かった。このことから、ひこね市民活動センターは全ての団体にとって必要な交流の場であるとはいえないと考えられる。

情報発信意欲との比較によって、彦根市の市民活動団体が情報交換を必要としていないのか、現在の交流の場が利用していない団体の求める交流の場ではないのかについてみていく必要がある。それによって、交流の場には情報発信の機能が必要かについて明らかになると考えられる。

5 - 3 類型ごとにみた情報発信媒体としてのエフエムひこねの可能性について

5-3-1 情報発信意欲について

ここでは、類型ごとに情報発信意欲について考察を行う。

(1) 勉強会型

勉強会型の情報発信に対する意欲についてまとめる。表 5-27 は、勉強会型に分類した各団体の情報発信意欲に関するコメントをまとめたものである。

表 5-27 勉強会型の情報発信意欲に関するコメント

団体名	コメント
団体2	・ こういう会をどうやって知ってもらったらよいか考えた。
	・ こういう会が表立って来てくださいと宣伝するのもおかしい。
	・ 広報をしすぎると興味本位の人の方が来る恐れがある。
個人サポーター・K.K氏	・ 知りたい方がいればどんどん伝えたい。
団体3	・ 今年度は、みんなが片手間にしかない普及をメインで据えてみようと思って。
	・ 正しい情報を伝えていけたら良い。
団体4	・ 徐々に広がっていく方が良いかもしれない。
団体5	・ 広報は全然やって欲しい。
団体6	・ 誰でもかれでも来て欲しいわけではない。
	・ 大人数ではやりたくない。

表 5-27 より、勉強会型に分類される団体間でも、情報発信への意欲に関するコメントで相違が見られることが分かる。

さらに、ヒアリングデータを分類していった結果、勉強会型の中でも、情報発信意欲が高い団体、情報発信意欲がやや高い団体、情報発信意欲が低い団体、に分類されることが明らかになった。

情報発信意欲が高い団体

- ・ 個人サポーター・K.K氏
- ・ 団体 3
- ・ 団体 5

個人サポーター・K.K 氏

興味を持つ人に情報を伝えていきたいという話をされる一方で、「いろんな方とお会いしましたけど、興味がないっておっしゃった方は少ないですね。」という誰もが興味を持つ話であるという自信が伺えることから、多くの人に情報を発信していきたいと考えていることが分かる。

団体 3

著者が認知行動療法について「市民の人にもっと知ってもらいたいのか？」という質問にたいして、「あるね。だから市民向けの講座を今年から始めてるんやけど、...中略...正しい情報を伝えていけたら良い。」している。

団体 5

メンバーの U.Y 氏が「こないだ決まったのが、『団体 5』の広告を作るためにパソコンの技術をマスターしようということ。」

また、代表の N.Y 氏は「逆にやってる内容が学生向けだったりするんで、『団体 5』の活動を知ってからセンターに来てくれれば、それこそ市民活動センターでやってることをすることもできるんで、そっちのほうの方が合ってるなぁと思えば、そっちのほうにいかけても構わないんで。この会が、『団体 5』のためのきっかけになるんじゃないかと、ここ全部のきっかけになればよい。ただ、団体に頼りっぱなしじゃなくて、自分でなんかしようという気持ちがあればよいと思う。団体に頼られっぱなしになると、それぞれが、他のメンバーも頼ってるっていうよりは、「どう？」っていうスタイルが多いので、そういうのであれば。」と発言されている。

さまざまな人が団体に関わることで、『団体 5』のメンバーに対する刺激と、ひこね市民活動センターへの好影響に期待しているからであると考えられる。

このことより、この 3 団体は情報発信への意欲が高いと考えられる。

情報発信に対する意識がやや高い団体

情報発信に対する意識がやや高い団体として分類したのは、あまり多くの人に情報が伝わるのを望んでおらず、情報を求めている人に対してよりの確にいきわたることを望んでいると考えられるからである。

- ・ 団体 2
- ・ 団体 4

団体 2

代表の Y.Y 氏は、『団体 2』について「本当に悩んでいる人のものでないと。」という発言をされている。このことから、ただ情報を発信するだけではなく、本当に悩んでいる人に情報を伝えたいと考えていることが分かる。

また同氏は、「冷やかし半分でも困る。本当に悩んでいる人のものでないと。」と発言されている。

団体 4

事務局担当 Y.Y 氏は「仮に 30 人、40 人来たとしても支えられへんでしょ。好きなことも出来へんし。」「一人話聞くだけでも大変やからね。一回喋りだすと 2 時間ぐらいいはかかるからね。」と発言されている。

この 2 団体は、団体の規模、対面式で参加者の相談を聞くという活動の性質から、悩んでいる人に情報を伝えたいと考えている一方で、丁寧に話を聞ける現在の活動状況の喪失について拒否感を持っていることが分かる。

情報発信意欲が低い団体

- ・ 団体 6

団体 6

ごく少人数での勉強会を行うというのが活動の目的であるので、情報発信をして会の存在を知ってもらうということに関しては否定的である。代表の U.Y 氏が「そこはもう、勉強っていう色が強くて、がちり勉強しようみたいな。文献を読みあったり、各自興味もっていることを調べて発表したり。『団体 6』の方は誰でもかれでもってことはないですね。」「少数で、ちゃんと勉強をやりたいと思ってる人に集まってもらうんはいいんですけど、その代わりやることはちゃんとやって欲しい。」と発言されているように、出来るだけ勉強する空間を守ることで自分たちの活動のしやすさを求めているために、あまり情報発信意欲は高くないと考えられる。

まとめ

勉強会型の中でもその活動目的、規模などにより情報発信意欲に相違が見られることが分かった。その要因として、活動の性質、団体の規模など考えられる。

情報発信意欲の高い団体では、多くの人に情報発信をしたいという傾向がみられ、情報発信意欲のやや高い団体、情報発信意欲が低い団体では、多種多様な人々に対する情報発信というよりも、自分たちの活動を本当に求めている人々に対して情報発信したいという傾向があると考えられる。

(2) 情報交換型

情報交換型の情報発信に対する意欲についてまとめる。表 5-28 は、情報交換型に分類した各団体の情報発信意欲に関するコメントをまとめたものである。

表 5-28 情報交換型の情報発信意欲に関するコメント

団体	コメント
団体7	・チップパー(竹を砕く機械)を入れる時に人手が欲しい。
団体8	・活動を広く呼びかけたい。 ・これからも事務局と分担して広報を行っていく。
団体9	・ほんとはあちこちの公民館とか役所とか借りて、写真展と、販売なんかもやりたい。 ・練習の場だけでなく、必ず発表する場がある。 ・とにかく名前を売るのが仕事 ・露出していかないといけない。
団体10	・音楽イベント時に、音楽好きの人に来て欲しかった。 ・地域の広報誌があれば、使いたい。
個人サポーター・K.S氏	・情報を外に発信していきたい
団体11	・何も無いときはゲリラでやろうと思うんや。 ・自分たちでチラシを配って、自分たちの宣伝をした。

ヒアリングより、情報交換型に分類される団体間でも情報発信への意欲に関するコメントで相違が見られることが明らかになった。

ヒアリングデータを分類していった結果、情報交換型ではどの団体においても情報発信に対する意欲は高いと考えられる。しかし、『団体 7』と『団体 10』は常時というよりは、特定のイベント時において人を募集していることが分かる。

団体 7

「月 2 回定期的に活動するときもチラシを配布して人手を募集しているのか？」という質問に対して、「いや、それはしていない。」と発言されている。このことから、チッパーを入れるときにのみ積極的に広報活動をしていると考えられる。

団体 10

同団体主催の音楽イベント時の広報を振り返り、「あの人らやったらもっと呼べると思ったんやけどなぁ。」「誰でもええし人呼ぶってのが嫌やってん。音楽好きっていう人が来てくれたら絶対気にいらはるから、そういう人に来て欲しかった。いやいや義理で来てもらうのめかなんし、だから選んで紹介してた部分があるし、逆に、選んでるっていうのはこっちの感性でだけやから、ほんまは好きな人がいてはるかもしれん。僕らが特に好きじゃなさそうやなぁとか。そんなん関係なしに、バーって言うてもよかったんかな？」と広報活動がうまくいかなかったことについて発言されている。また、K.T 氏の「地域の広報誌があれば使いたい。」という情報発信意欲は、同団体の活動目的である、『地域に対する思いを持って、町内外へ地域の魅力を発信し、活気あるまちづくりをすすめていく。』⁶⁾という活動の目的に起因していると考えられる。

団体 8

『団体 7』と『団体 8』は同じ竹林整備を活動としているが、『団体 7』は『団体 8』のように人の募集を行っていない。これは『団体 7』は活動を 2 年以上続けており、普段の活動の人数として満足しているからだと考えられる。

一方で、『団体 7』は、活動を開始したばかりであり、活動をするとともに活動に必要な人手を確保する準備期間でもあるからだと考えられる。それについては、『団体 8』事務局担当、F.K 氏が電話でのヒアリングに対して、「広報をしているのは人力が必要だから。」と発言されている。

個人サポーター・K.S 氏

自身の活動について「情報を発信していきたい。」と発言されている。

団体 11

「自分たちでチラシを配ってて、自分たちの宣伝をしてたん。それを見て、5 月の 4 番町のお祭りに呼んでもらったり。」と自ら情報発信し、その結果、バンドの出演する機会を得ていることが分かる。

まとめ

情報交換型は勉強会型とは異なり、全体を通して情報発信への意欲が高い類型であると考えられる。特定の人々に対して情報発信したいというよりも、出来るだけ多くの人々に対する情報発信を求めていると考えられる。

(3) 独自型

独自型の情報発信に対する意欲についてまとめる。表 5-29 は、独自型に分類した各団体の情報発信意欲に関するコメントをまとめたものである。

表 5-29 独自型の情報発信意欲に関するコメント

団体名	コメント
団体12	・アピールがへた。
	・広報誌を配ってはいるが、本当に必要なところに情報が行ってるかというところと分からない。
	・市民の人らまで手が届かない。
団体13	・工房が出来た当初、さまざまなメディアに取り上げられたが、そのときに周りからだいぶ叩かれた経験がある。
	・何人もスタッフがいて、広報のかかりとかあったらいいけどいない。
	・もっと宣伝した方が良いのかもしれないと思う一方で、もう十分頑張ったという思いもある。
団体14	情報発信に関しては直接的なコメントはない。
団体15	・宣伝とか何とかはあんまり...
団体16	・芹川の良さをみんなに知ってもらいたい。
	・みんなに気付いていただいて活動を広げられたらなぁと思っている。

表 5-29 より、独自型に分類される団体間でも、情報発信意欲に関するコメントで相違が見られることが分かる。

さらに、ヒアリングデータを分類していった結果、勉強会型の中でも情報発信意欲が高い団体とそうでない団体に分類されることが明らかになった。

情報発信意欲が高い団体

- ・ 団体 12
- ・ 団体 14
- ・ 団体 16

団体 12

「急務に困っている人を助けたい。としている一方で、「アピールが下手。」と発言されている。また、「広報誌は配っているが、本当に必要なところに行ってるかというところ...。」と的確な情報発信が不足していると考えていることが分かる。また会話の中で、『団体 12』は彦根市に限らず滋賀県全域を対象に広報をしていることが明らかになった。

団体 14

情報発信に関する直接的なコメントはなかったが、(3)で見るように新聞、広報ひこねなどさまざまな広報媒体を使っていることから、情報発信意欲は高いと考えられる。

団体 16

「芹川があって、彦根城があって、自然にめぐまれた災害のないいいところ、人の気持ちもおおらかで、本当にいいところなんだっていうのを全国の人に知ってもらいたい。」と幅広い情報発信を求めていることから、情報発信意欲が高いと考えられる。

情報発信に対して迷っている団体

- ・ 団体 13

団体 13

Y.H 氏が「ほんとはもっとたくさんの人に...このごろちょっと先が見えてきたから、もっとたくさんの人に知らせてやりたいなとか、こんなに子どもが喜ぶんやから、もっともっと宣伝してたくさんの人に来てもらってやりたいかなあと思いながら、思いながら、私にしたらもうこれで 100 点満点かなと思う部分もある。普通のおばさんがこんだけしてきたんやから、上を見たらキリはないけど、私がしてきたことを見たら、これで私はもう十分してきたんやわと思う。そんなにおごりたかく、滋賀県の子ども全部に伝えようとは思わない。例えばたまたま来はった子が、喜んでこんなガラスの棒が欲しいって持って帰るやんか。で、それを知ってる子が 10% ぐらい、彦根の子でもそれぐらいかなあ？みん

なにいき渡ってへんやんか。そうすると、せめて彦根の子にはここにガラスの工房があった、夢のようなガラスの魔法のようなのを知らせてやったら良かったかなあと思う。そう思いながらまあ、何にもせんよりも 10%の子にでも知ってもらったっていうのが普通のおばさんがしたコトにしてはそれでももうええのかなあ。そう思ったら、自分で自分に 100 点満点かなって思う。今やってるコトを思いつかんかったら何もしてない。」と発言されていることから、情報発信の必要性を感じる一方で、自分一人で出来ることはもう十分やったという思いを持っていると考えられる。

情報発信意欲が低い団体

- ・ 団体 15

団体 15

「今、自立支援法が施行されて、今、こういう福祉の小さい作業所は問題なんですよ。この 2 年で人を増やさないと存続できないので悩んでる最中なんです。ここに来てるのは 8 人で、本当に小さい作業所なんです。このままでは、この 2 年で閉鎖になってしまう。」「この 2 年が勝負なんです。だから、宣伝とか何とかはあんまり今は...。」と発言されているように、自分の作業所の存続に対して緊急に対策を講じなければならない時期で、広報活動にはあまり気を配っていただけないと考えられる。

まとめ

独自型においては情報発信意欲に大きな相違がみられた。『団体 12』のように、的確なところへ情報を発信したいという発言のあった団体と、『団体 16』のように、幅広く情報を発信していきたいという意見がみられた。さらに『団体 13』『団体 15』のように情報発信に積極的でない団体も存在しているなど独自型の中でも多様な意見がみられた。

特に、『団体 13』『団体 15』においては、交流の場の利用意識に対しても消極的な団体であったことから、情報交換自体の必要性が低いと考えていると予想される。その他の団体に関しては、交流の場としてのひこね市民活動センターの利用意識は低かったが情報発信意欲は高いことから、求める交流の場と、現在の交流の場で何らかのズレが生じていると考えられる。

(4) 情報発信意欲についてのまとめ

勉強会型、情報交換型は全体的に情報発信に対する意識も高い傾向がみられたが、勉強会型は本当に情報を求めている人々への情報発信、情報交換型においては、出来るだけ多く人々への情報発信を求めていることが明らかとなった。また、独自型においては情報発信に対して積極的な団体と消極的な団体の両方の意見がみられた。独自型の交流の場の利用を考慮すると、情報発信意欲の高い団体に関しては現在の交流の場ではない異なった交流の場を求めていることが考えられる。また、情報発信意欲の低い団体に関しては、交流の必要性が低いと考えていると予想される。

このことから、交流の場に情報発信の機能が付加されることで、さらに多くの団体が交流の場に訪れるのではないかと考えられる。そこで、情報発信の内容、現状の広報媒体を把握し、情報発信意欲との関連性を見ていく必要がある。

5-3-2 情報発信の内容について

ここでは、市民活動団体の求める情報発信の内容について考察を行う。

(1) 勉強会型

表 5-30 は勉強会型に分類した各団体の、実際に情報として発信したい内容に関するコメントをまとめたものである。

表 5-30 勉強会型の情報発信の内容に関するコメント

団体名	コメント
団体2	・一人で悩んでいる人に対しては会があることを何か発信できればと思う。
	・インフォメーション程度で良い。
	・こういう支援をやってて、大体月1回活動してますっていうのを言えたら良い。
個人サポーター・K.K氏	・年金、医療、介護の話。
	・また、いつでも私を呼んでください。いつでも私はお話しますよって思う。
団体3	・認知行動療法のPR
	・認知行動療法の会を開くときの告知
団体4	・一人で悩んでいる人にこういう場がありますよっていうのは言いたい。
団体5	・一緒に活動してくれる人が欲しい。
	・自分でやりたいことを持ってる人ならなおさら嬉しい。
	・「こんな見つけて来たけどどう？」みたいな建設的な意見を持つ人が来てくれると嬉しい。
団体6	・勉強する意識が高い人が集まってもらうのは良い。

さらに、各コメントをまとめ、運営スタッフの募集、参加者の募集、普及型、その他に分類した。

運営スタッフの募集

団体の運営に携わる、運営スタッフを募集している団体である。運営スタッフの募集についてコメントしているのは以下の団体である。

- ・ 団体 5

団体 5

「自分で何かやりたいことを持ってる人ならなおさらうれしい。で、やりたい気持ちがあるけど、やり方知らないしなっていう人が来てくれれば、ここにいろんなつながりありますから、何か出来るかもしれませんから、そういう風な気持ちを持ってる人が来てくれたら凄くうれしいですし、メンバーも何がやりたいとかないうちに、その人に触発されてやる気になるっていうのが私の狙いだったりするので、全体の目的よりも、それをみんなですべてやって、個人で気づくところを私は持って欲しいと思っている。」としている。この発言からも分かるように、自分たちと共に活動する人を募集していると考えられる。

参加者の募集

団体が主催した会への参加者の募集をしている団体である。参加者の募集についてコメントしているのは以下の団体である。

- ・ 団体 2
- ・ 個人サポーター・K.S 氏
- ・ 団体 3
- ・ 団体 4

勉強会型の大多数はここに分類される。活動の基本的な目的として、悩みを持つ人を救うということが挙げられる。また、この 4 団体の活動の形態として、団体の開く会に参加者が訪れるというものである。そのため、この 4 団体に関しては、会に参加する人を求めていると考えられる。参加者の募集に関しては、『団体 2』『団体 3』『団体 4』において、イベント告知の情報を発信したいと考えていることが分かった。

普及

多くの人に広く自分の活動を広めたいという『普及』についてコメントしているのは以下の団体である。

- ・ 団体 3

団体 3

「僕も学会発表してたんですけど、今年度は学会発表を少なくして、普及っていうてみんなが片手間にしかない普及をメインで据えてみようと思って。」としている。認知行動療法の普及に重点を置くことで、多くの人に知ってもらおうと考えていることが分かる。こ

のことは情報発信意欲につながっていると考えられる。

その他

- ・ 団体 6

団体 6

『団体 6』に関しては、5-3-1 でも述べたように、現在の規模を保って勉強会を行いたいという理由で、さらなる情報発信への意欲が低く、したがって情報発信の内容に関するコメントも表 5-27 にもあるように積極的なものではなかった。

まとめ

団体により情報発信の内容は異なるが、勉強型の傾向として、団体の運営する会に参加者が訪れるという、参加者の募集についてコメントしている団体が多いことが分かる。勉強会型の性質上、情報発信の結果、協働する人を募集するのではなく、勉強会型があらかじめ用意した『活動の場』に自分たちの活動を求める人が参加するという形態を求めていると考えられる。

(2) 情報交換型

表 5-31 は情報交換型に分類した各団体の、実際に情報として発信したい内容に関するコメントをまとめたものである。

表 5-31 情報交換型の情報発信の内容に関するコメント

団体	コメント
団体7	・チップパー(竹を砕く機械)を入れるときに人手が欲しい。
団体8	・竹林整備をする人手が必要。
団体9	・建築の写真を撮って、啓蒙活動という緩い保存活動をしている。
	・撮ったらどんどん発表していかないとダメなんで。
	・写真を発表しないと良いことも悪いことを評価してもらえない。
	・自分の活動、写真について説明する。
	・絵描きさんでも何でもそうですけど、とにかく名前を売らないと。
団体10	・イベント時の集客に使いたい。
	・(音楽イベントの時に)音楽好きの人に来て欲しかった。
	・まちのPR
個人サポーター・K.S氏	・一緒に活動をしてくれる人が欲しい。
	・自分の活動。
団体11	・自分たちの活動の宣伝。
	・ちんどん屋についてみんなに知ってもらいたい。

各コメントをまとめ、さらに運営スタッフの募集、参加者の募集、普及、に分類した。

運営スタッフの募集

団体の運営に携わる、運営スタッフを募集している団体である。運営スタッフの募集についてコメントしているのは以下の団体である。

- ・ 団体 7
- ・ 団体 8
- ・ 個人サポーター・K.S 氏

団体 7

「来た人に、ああこんなやってんのかと思ってもらったら会員になってもらって、この会はもともと無一文の会やから、みなさんに年間 1 万円を払ってもらってる。」と発言し

ている。『団体 7』は特定のときにしか広報活動を行っていないが、活動資金の面からも運営スタッフが増加することを望んでいると考えられる。

団体 8

『団体 8』については、趣意書 7)の一文を引用する。「ご入会いただける方は、恐れ入りますが、下記発起人までご一報いただければ幸いです。」このことから、活動していくうえで運営スタッフの募集を行なっていることが分かる。

個人サポーター・K.S 氏

「時間とお金は何とかできたとしても、一緒にやってくれる人が少ない。」「メディアに出ても、何かやるときに見に来るひとはいても、一緒にやる人はあまりいない。」と発言されているので、K.S 氏と活動を共にする協力者を求めていると考えられる。

参加者の募集

団体が主催した会への参加者の募集をしている団体である。参加者の募集についてコメントしているのは以下の団体である。

- ・ 団体 7
- ・ 団体 8
- ・ 団体 10

団体 7

直接的な発言はなかったが、2006 年 10 月 7 日の竹林整備の際に、チラシを配布し、竹林整備への参加者を募集している。このときの竹林整備においては、レンタルしてきたチャップーを利用するために多くの人手を必要としていた。しかし、普段の活動では『団体 7』のメンバーのみで活動をしており、参加者の募集は行っていない。

団体 8

『団体 7』と同様に、団体が発行している広報誌の中で竹林整備への参加者を呼びかけている。しかし、表 5-28 から分かるように『団体 7』とは異なり、普段の活動からも竹林整備に参加する人手を求めていると考えられる。

団体 10

入手した資料の中に『まちの PR』を掲げてあったほか、『夢街道とっと祭り』『カロム日本選手権大会』『パンプキンフェスタ』などのイベントを行っており、その際の集客が課題

であると考えられる。『団体 10』が主催した音楽イベントに関して思うように集客できなかったことについて発言されている。

また、電話でのヒアリングに対して K.T 氏は、「イベントの告知はしているが、仲間の募集は積極的にはしていない。口コミで自然と広がる程度。」と発言されている。

普及

多くの人に広く自分の活動を広めたいという『普及』についてコメントしているのは以下の団体である。

- ・ 団体 9
- ・ 団体 11

団体 9

「『団体 9』の方は保存というよりは建築の写真を撮って、啓蒙活動という署名を集めたりするのではない緩い保存活動なんです。」とヴォーリズ建築の価値を、写真を通して普及させていくことについて発言されている。また、普及とは異なるが、「必ず発表する場があるんです。必ず発表する。そうしないとだんだん内に籠ってしまう。良いことも悪いことも評価してもらえない。」「とにかく名前を売ることが仕事なので。」と発言されているように、写真家としてより多くの人に作品を見てもらい、評価を得たいと考えていることが分かる。

団体 11

メールでの活動目的についての質問に対して、「みんなにちんどん屋を知ってもらいたいというのはあります。」「ちんどん屋のことを知ってもらいたいというのと、みんなに喜んでももらいたい、おもしろいことをしたいというのがあります。」と発言されていることから、発信する内容としてはちんどん屋の普及が挙げられる。

まとめ

情報交換型の情報の発信内容では、運営スタッフの募集、参加者の募集、普及、がほぼ均等にみられた。勉強会型と異なり、活動の場が多岐に渡るため、団体により活動の性質が大きく異なっていると考えられ、それぞれ情報発信の内容も異なっていると予想される。

(3) 独自型

表 5-32 は独自型に分類した各団体の、実際に情報として発信したい内容に関するコメントをまとめたものである。

表 5-32 独自型の情報発信の内容に関するコメント

団体名	コメント
団体12	・急務に困っている人を助けたい。
	・自分たちの活動のスタンスを知ってもらいたい。
団体13	・ガラス工房の宣伝。
団体14	・イベントの告知に使いたい。
団体15	・こういうところがあるのも知ってもらえたら良い。
団体16	・芹川の良さをみんなに伝えたい。

各コメントをまとめ、さらに運営スタッフの募集、参加者の募集、普及、に分類した。

運営スタッフの募集

団体の運営に携わる、運営スタッフを募集している団体である。独自型の中では運営スタッフの募集についてコメントしている団体は見られなかった。そのため組織として運営に支障がないほど成熟している団体が多いのではないかと考えられる。

また、『団体 13』の Y.H 氏は、「私は助手は一人か二人でよい。」と発言され、多くの仲間を必要としていないことが分かる。また、この助手についてもガラス体験教室に来る生徒に手伝ってもらうことが多いため、現状としてこれ以上の人手を募集していないと考えられる。

『団体 15』では、代表が高齢のため後継者問題が存在する。そのため、『代表 15』に限っては運営スタッフの募集を行っているといえるかもしれないが、現在は、外向けに広報を行っているということはないことと、他団体との合併も模索していることから、必ずしも運営スタッフの募集は行っていないと考えられる。

参加者の募集

団体が主催した会への参加者の募集をしている団体である。参加者の募集についてコメントしているのは以下の団体である。

- ・ 団体 12
- ・ 団体 14

団体 12

「急務に困っている人を助けたい。上の子が悪くて、下の子を預けたいとか、そういう困ってる人に手を差し伸べたいからいろんな窓口がある。」と発言されている。このことから、運営スタッフの募集というよりも、急務に困った人に利用してもらいたいという、活動への参加者を求めていると考えられる。

団体 14

「自転車生活を広める啓発と実践が目的やから、ようするに自分で楽しいことを実践して、人がやっても楽しいやろうなあっていうのを啓発というくくりでやりませんか？って。だからサイクリングっていうのも自分で楽しいことに人を絡めていくみたいなの。」という発言をされていることから、実践という部分でイベントへの参加者の募集を求めていると考えられる。

普及

多くの人に広く自分の活動を広めたいという『普及』についてコメントしているのは以下の団体である。

- ・ 団体 13
- ・ 団体 14
- ・ 団体 15

団体 13

「私は作家でもないし、職人でもない。私はガラスを通して物を大切にするっていうのをみんなに広めてもらうための...それが私の仕事、運動やと思っている。」これは Y.H 氏が参加した石鹼運動に端を発しており、「その石鹼運動をやってパワーの方を、石鹼じゃなしに運動の方を音頭の方を頑張って続けただけやわ。行動する方をな。」と、石鹼運動で培った『物を大切にする』という運動の流れでガラスを通して、環境の大切さについて普及活動を行っていると考えられる。

団体 14

「自転車生活を広める啓発と実践が目的やから、ようするに自分で楽しいことを実践して、人がやっても楽しいやろうなあっていうのを啓発というくりでやりませんか？って。」と自転車生活の啓発であると発言されている。このことから自転車での生活の普及を目的の一つとして活動していると考えられる。

団体 15

「こういう事情をちょっとでも知ってもらうのも大事だと思います。」と、国の法改正により存続が危うい小さな団体があることを知ってもらいたいと考えていることが分かる。

まとめ

独自型は、運営スタッフを求めていることが分かった。ひこね市民活動センターでの交流もほとんど行っていないことから、各組織ごとにそれぞれ必要な団体間での関係構築が完成している、また、多くの利用広報媒体を得ていることからひこね市民活動センターを利用する必要性が低いのではないかと考えられる。

また、普及についての意見が他の類型よりも多くみられた。普及に関しては『団体 14』では情報発信意欲が高くなっているのに対して、『団体 13』『団体 15』の2団体については、情報発信への意欲が低かった。そのためこの2団体に関しては、自分で手の届く範囲での、口コミ程度の情報発信を求めているのではないかと考えられる。

(4) 情報発信の内容についてのまとめ

情報発信の内容に関しては、勉強会型と独自型に『参加者の募集』が多くみられるのに対して、情報交換型は運営スタッフの募集も参加者の募集と同等数見られた。このことから情報交換型が積極的にセンターでの交流を行う要因の一つとして、活動を共にする運営スタッフの募集を求めているためであると考えられる。

また、独自型には比較的多く『普及』に関するコメントがみられ、市民活動団体との交流による情報交換よりも、一般に向けた情報発信を目的とするため、交流の場の利用があまりないと考えられる。

5-3-3 利用広報媒体について

ここでは、類型ごとに市民活動団体の利用広報媒体について考察を行う。

(1) 勉強会型

勉強会型の利用広報媒体について考察を行う。表 5-33 は勉強会型に分類した団体の利用している広報媒体¹⁾である。

表 5-33 勉強会型の利用広報媒体

団体名	口コミ	チラシ	広報誌	広報ひこね	新聞	記者発表	テレビ	FMひこね	その他ラジオ	HP	他団体の広報	その他
団体2											滋賀県不登校連絡協議会の会報誌	
個人サポーター・K.K氏												
団体3												
団体4												本の出版
団体5											滋賀大学にサークルとして登録	
団体6												

多くの団体が口コミ、チラシを利用しているが他の媒体に関してはあまり利用していないことが分かる。また、個人での活動をしている K.K 氏や、情報発信意欲の低い『団体 6』では、利用広報媒体数が少ない。

『団体 2』、『団体 3』、『団体 4』はチラシを配布しているが、『団体 5』では、活動の状況、メンバー募集など会の存在を知ってもらい賛同する人には、メンバーになってもらうという広報誌を配布している。

また、表 5-334 は、勉強会型に分類した団体の利用広報媒体に関するコメントをまとめたものである。

表 5-34 勉強会型の利用広報媒体に関するコメント

団体名	コメント
団体2	・新聞に載せてもらおうかと思ったが単発では意味があるか分からないと思いやめた。
	・あんまり、わーっと来られても対応できない。
	・広報ひこねに載せるのは、イベント的なもの。これは継続的なものなので。
	・口コミは信用度が高い。
	・こんなんで大々的に宣伝して、こんなもんかと思われても嫌だった。
	・ピラを巻いて見た人から口コミが始まる。
個人サポーター・K.K氏	・こんなんありますって言うのではなく、たまたま出会って話をする内に話が進む。
	・センターの情報交換会に来られた方何人かと、たまたま年金の話になって、これの趣旨をチラッと話したんですね。それやろうっていう風になって、今回やることになった。
団体3	・宣伝はあまり得意ではない。
	・僕は、講演の方を整えるほうに必死やから、これもして、PRもしてやとめちゃめっちゃ忙しい。
	・広報ひこねにも載せてって言うたんやけど、載せてもらえんくて。
	・前回センターに広報は任せたが、一人しかこななかった。それでもう任せるのはやめようって。基本的には自分のとこで。
団体4	・除々に広がっていくのが良いかもしれない。
	・広報ひこねに載せてもらって一回女の人 came。あれは感動したわ。
	・仮に30人、40人来ても支えられない。
	・一人の話聞くだけでも大変。一回喋り出すと2時間ぐらいいかかるから。
	・出したいけど、一回出すにも郵送費がかかる。
	・広報ひこねはタダやけどね。
団体5	・ミチのためのきっかけでなく、センター全部のきっかけになれば良い。
	・学校主催の新入生歓迎のオリエンテーションとかに学校に登録してる団体は何か出来る。ブースを持てたり。宣伝のチラシを学内に貼ってくれたり。
団体6	・多すぎると個人が埋もれてしまう。
	・実質活動は7人ぐらいでそれでやっという感じっていうか、個人が埋もれない。
	・わーって人が集まる勉強とは違う。
	・集まりすぎると、BENZOの良さがなくなる。

ヒアリングより勉強会型の中でも利用広報媒体へのコメント別に分類を行った。

口コミに対する信頼を示した団体

- ・ 団体 2
- ・ 個人サポーター・K.K 氏
- ・ 団体 4

団体 2

代表の Y.Y 氏は「こういう会はあまり表立ってやるのもどうか？来てくださいて宣伝するのもおかしい。本当に悩んでる人が気安いとなると、やっぱり口コミかなあ？となった。」と発言されている。また、メンバーでもある Y.Y 氏のご主人は「友達が新聞記者やってるから載せてもらおうかと思ったが、ちょっと待てよ単発で載せて終わるなら効果があるのかないのか分からない。継続でやっていこうと思うとちょっと新聞ではないのかなあと思った。そこはやっぱり口コミかと思った。あんまり広めてもわーっと来られても対応できん。」と、口コミへの信頼を示すとともに、活動の規模に見合った広報が口コミであると考えていることが分かる。

個人サポーター・K.K 氏

「助けたいっていう思いがあるので、こんなんありますじゃなくて、こういう人たちにたまたま出会って、...僕は媒体として人を使っている。」という発言にもあるように、人との出会いを大切にしていることが分かる。保険の販売を職業とされているので、実際に人と会うことで信頼を気付いてからの方が話をしやすいからだと考えられる。

団体 4

事務局の Y.Y 氏が「基本的に口コミで広がっているから。一応案内は出しているが、そういうのは徐々に広がっていく方が良いのかもしれない。自然体の方が良い。」と発言されているように、口コミの徐々に広まっていく良さについて述べられている。

この 3 団体に共通しているのは、口コミによる人同士のつながりに信頼を示している点である。

また、『団体 2』『団体 4』については、5-2-1 で情報発信意欲がやや高い団体、として分類した 2 団体であり、本当に悩んでいる人が気軽に足を運べる活動の場を維持するために、口コミの利用が最適としていえると考えられる。

人数の制約について発言した団体

- ・ 団体 2
- ・ 団体 3
- ・ 団体 4
- ・ 団体 6

団体 2

口コミへの信頼度を示した、『団体 2』は、「あんまりわーっと来られても対応できない。」と直接的に自分たちの対応力に関する発言をされている。

団体 3

「僕はこっちを整える方に必死やから、これもし、あれもしやとめちゃめちゃ忙しい」と発言されている。

団体 4

「仮に 30 人、40 人来たとしても、支えられへんでしょ。好きなことも出来へんし。」という発言をされている。

この 3 団体は、いずれも人数的な対応力について不安を抱えていることが分かる。勉強会型の情報発信に対して積極的になれない団体、また、情報発信したいがそこまで出来ないと考えている団体については、人数の不足が団体の情報発信の妨げになっていると考えられる。

団体 6

「そこはもう、勉強っていう色が強くて、がっちり勉強しようみたいな。文献を読みあったり、各自興味もっていることを調べて発表したり。『団体 6』の方は誰でもかれでもってことはないですね。」と自分たちの活動の良さを守るという目的があることが分かり、情報発信の意欲も低いことから、上記の 3 団体とは異なり情報発信に関して不満、課題などが存在していないと考えられる。

資金面での制約について発言した団体

- ・ 団体 4

団体 4

会の案内の郵送について、「出したいけど、一回出したら郵送費がかかるやん。ほんで、彦根市内は、教育委員会を通してただなんや。でも、印刷費だって、紙代だって、いるわけで、親とかには基本的には手渡しできないんで、郵送になる。大体一回郵送するのに、¥2,000～¥3,000 はかかる。最低ね。それでもうギリギリ。彦根広報はただやけどね。やっぱ広げようと思ったらそれぐらいのお金がいるっていうのも一つネックに、難しいところではある。」と発言されている。

よりの確な場所への情報発信の必要性を感じているが、そのための資金が少ないというのが現状であると考えられる。

その他

- ・ 団体 5

団体 5

利用広報媒体に対して直接的な発言は見られなかったが、『団体 5』のメンバーである U.Y 氏は、「こないだ決まったのが、『団体 5』の広告を作るためにパソコンの技術をマスターしようということ。」と発言されている。発足が 2006 年 10 月であり、ヒアリング時点では発足後 1 ヶ月未満であったため、広報を含めて活動自体これから模索していく団体であると考えられる。

広報ひこねの利用について

次に、ひこね市民活動センターの主な広報媒体である、『広報ひこね』に関する考察を行う。

『広報ひこね』を利用している団体

- ・ 団体 4

『団体 4』が『広報ひこね』を利用する理由としては、活動をしている中で一度『広報ひこね』を見てきた女性がいることが大きな理由である。「そのとき始めて、広報も役に立つんやな、と思って毎掲載せてもらっている。」と発言されている。

『広報ひこね』を利用していない団体

- ・ 団体 2
- ・ 個人サポーター・KK.氏
- ・ 団体 3
- ・ 団体 5
- ・ 団体 6

『広報ひこね』の利用に関して、特徴的な意見がみられたのは『団体 3』である。『広報ひこね』にも載せてって言うたんやけど、載せてもらえんくて。」「男女共同参画的に間違っていないとかね。こないだも喋ってたらそんなこと言われたり。」と『広報ひこね』の利用に前向きである一方で、行政からの受け入れが行われていないという状況が明らかになった。

まとめ

勉強会型の課題として、資金面での課題と人手の不足という課題が明らかになった。口コミへの信頼を示す団体が存在しているが、現状として口コミに頼らざるを得ないのが現状ではないかと考えられる。

また、『広報ひこね』を利用している団体は、勉強会型に分類した 6 団体中 1 団体であった。情報発信への意欲から考えると、勉強会型にとって『広報ひこね』は彦根市全体に配布されるために、的確な情報発信を望む勉強会型にとっては媒体であると考えられる。

『団体 3』は、『ひこね市民活動センター』に事務局を置き、出来る限り自力での広報をされているが、自分の活動で手いっぱいという意見もみられた。交流の場に情報発信の機能が付くことで『団体 3』のような市民活動団体にとって、より利用しやすいものとなると考えられる。

(2) 情報交換型

情報交換型の利用広報媒体について考察を行う。表 5-35 は情報交換型に分類した団体の利用している広報媒体である。

表 5-35 情報交換型の利用広報媒体

団体名	口コミ	チラシ	広報誌	広報ひこね	新聞	記者発表	テレビ	FMひこね	その他ラジオ	HP	他団体の広報	その他
団体7												
団体8												
団体9											イベント主催者の広報	
団体10											町の広報誌	
個人サポーター・K.S氏												
団体11												

団体によって利用している広報媒体数が大きくことなることが分かる。また、『団体 9』や K.S 氏のように個人で活動している団体は、利用広報媒体数が少ないことが分かる。

『団体 7』が新聞や広報ひこねを使っているのは、代表の O.K 氏が昔新聞社に勤めており、「新聞は強い、あとで読んで残るからね。新聞をやった者の偏見かもしれんけど。」と新聞など紙媒体に対しての信頼度が高いからであると考えられる。また、『団体 GO』が『広報ひこね』を利用しているが、チラシを『広報ひこね』に挟んでもらうという形で『広報ひこね』を利用している。

『団体 10』は、「タルタルーガが一番ニュース性があり、テレビなどにも取り上げられる。他のはどこでもやっていること。」タルタルーガとは学生による蔵を改築し住宅にするというプロジェクトの一環で蔵を改築し、オープンさせたバーであり、そのプロジェクトの話題性でメディアに取り上げられることが多いようである。

また、表 5-36 は、情報交換型に分類した団体の利用広報媒体に関するコメントをまとめたものである。

表 5-36 情報交換型の利用広報媒体に関するコメント

団体名	コメント
団体7	・チッパーを入れるときにチラシや記者発表をする。
	・新聞は後で読んで残る。
	・エフエムひこねに出向いていく暇はない。
団体8	・何にしてもこれからである。
	・あまり手が回らない。
団体9	・一日でダブルヘッダー、トリプルヘッダーがあつてなかなか売り込みをかける時間がない。
	・自分の仕事もある。
団体10	・新聞も一社か二社が載せてもらったことがあるが、なかなか思うようには...
	・町内向けに発信することが多い。
	・新聞折込もお店情報ばかり。イベント情報は載らない。
個人サポーター・K.S氏	・最後は人同士のつながり
	・時間とお金は何とか出来ても、一緒にやってくれる人が少ない。
	・メディアに出ても、何かやるときに見に来る人はいても一緒にやる人はあまりいない。
団体11	・チンダンバンドのためになることはやった方が。
	・ちんどん屋をやって人と出会うのがおもしろい。

ヒアリングより情報交換型の中でも利用広報媒体へのコメント別に分類を行った。

口コミへの信頼を示した団体

- ・ 個人サポーター・K.S氏
- ・ 団体 11

個人サポーター・K.S氏

「新聞などのメディアに取り上げられたが、情報を発信しているって人だけで、その人の背景が見えない。」「最後は人同士のつながり」と発言されているように、口コミによる

人同士のつながりを信頼していることが分かる。

団体 11

「最近、いろいろなところに出演されていらっしゃいますね。」という著者の発言に対して、代表の D.T 氏は「ありがたい。そこでまた出会うのがおもしろい。」と、人同士のつながりのおもしろさについて発言されている。

人数の制約について発言した団体

- ・ 団体 7
- ・ 団体 8
- ・ 団体 9

団体 7

『団体 7』は特定のときにのみ人手を募集している。エフエムひこねの利用について質問した際に、同団体代表 O.K 氏が、「今はちょっとこっちから行く暇がない。」と発言されている。また、「同志が増えればこっちの活動も助かるわけだからね。」と発言されている。このことから活動の中においても人手が足りていないと考えられる。

団体 8

事務局 F.K 氏に対する電話でのヒアリングの際に、「あまり広報にも手が回らない。」と発言されていることから、情報発信したいが現状の広報が限界であると考えられる。

団体 9

M.N 氏が一人で活動をされているため、現状の活動が限界であると考えられる。

その他

- ・ 団体 10

団体 10

活動目的が『町内外への地域の魅力の発信』であることから、町内向けの発信もされていると考えられる。ただし、K.T 氏が「新聞にも一社か二社載せてもらったことはあるが、思うようにはなかなか...。」と広報の現状について満足しているわけではないことが分かる。

『広報ひこね』の利用について

次に、ひこね市民活動センターの主な広報媒体である、『広報ひこね』に関する考察を行う。

『広報ひこね』を利用している団体

- ・ 団体 7

『団体 7』の『広報ひこね』の利用としては、チッパーを利用する際に普段活動している会員以外の人にも協力してもらうための広報の一環であるが、『広報ひこね』の本文に内容を掲載するのではなく、『広報ひこね』に折込チラシとして添付するというものである。

『広報ひこね』を利用していない団体

- ・ 団体 8
- ・ 団体 9
- ・ 団体 10
- ・ 個人サポーター・K.S 氏
- ・ 団体 11

勉強会型のように、『広報ひこね』を利用するにあたり、不安や不満といった発言は見られなかった。情報交換型は、全体を通して情報発信への意欲が高かったにも関わらず、『広報ひこね』を利用している団体は、6 団体中 1 団体であることが分かった。

まとめ

情報交換型は勉強会型に比べて多くの広報媒体を利用しているが、ひこね市民活動センターの主な広報媒体である『広報ひこね』についてはあまり利用されていないことが分かった。

(3) 独自型

独自型の利用広報媒体について考察を行う。表 5-37 は情報交換型に分類した団体の利用している広報媒体である。

表 5-37 独自型の利用広報媒体

団体名	口コミ	チラシ	広報誌	広報ひこね	新聞	記者発表	テレビ	FMひこね	その他ラジオ	HP	他団体の広報	その他
団体12											近江ネットワークセンターなど	行政からの取材
団体13												滋賀県立大学の新聞
団体14												
団体15												
団体16											健やか金城の会の紙	橋の横に看板を設置 子ども狂言

独自型の利用している広報媒体は多岐に渡る。独自型は、表 5-35 にもあるように多くの広報媒体を持ち、活動しているのでひこね市民活動センターも多様な広報媒体の一つであると考えられる。

また、表 5-38 は、独自型に分類した団体の利用広報媒体に関するコメントをまとめたものである。

表 5-38 独自型の利用広報媒体に関するコメント

団体名	コメント
団体12	・急務に困っている人を助けたい。
	・世帯数個別に配布したいが、資金はそんなにない。
	・広報ひこねなど行政的なところには頼っていない。
	・知ってもらいたい予算とか、ツールがない。
団体13	・メディアとかに出るのはめんどくさいのもあるし、昔叩かれた経験があるので。
	・広報は流しても受け手のことが分からない。
	・口コミは凄い
	・もっと宣伝した方が良いのかもしれないと思う一方で、もう十分頑張ったという思いもある。
	・市からガラスづくりの体験教室の依頼があるときは、広報ひこねに載せてもらっている。
団体14	・広報ひこねは良い。
団体15	・宣伝とかよりも、ここが存続していくかいかないかの方が緊急なので。
団体16	・芹川の良さをみんなに知ってもらいたい。
	・子ども狂言を通して、全国の人に発信している。
	・広報ひこねは使ったことがない。

表 5-38 より、独自型の利用した広報媒体は多岐に渡っていることが明らかになった。しかし、情報発信への意欲が低かった、『団体 13』、『団体 15』の 2 団体の現状は表 5-37 とは異なることが明らかになった。

団体 13

現在は、「メディアとかに出るのはめんどくさいというのもあるし、もっと大きな理由として、彦根は出る杭は打たれるみたいな感じなので、そういうのにならんこうと思う。」とあるように、現在はメディアへの露出を控えていることが分かる。また、「エヴァができた当初、NHK をはじめとするテレビや新聞に取り上げられてひっぱりだこだった。」とあるように、メディアを使った経験というのは主に工房開始時に集中していると考えられる。

現在は、「やっぱ口コミは凄い。」と発言されているように口コミへの信頼度が高いと考えられる一方で、現在の他の広報活動に関しては、「ここの情報はなぁ、それぞれちっちゃいところからやわ。このごろ私はなぁ、言われるともういいって言うてるんやわ。何かを見て、わーっと来る人より、「良かったよ」っていうて聞いてきはる人のほうが...口コミ...石鹼運動のときもそうやったけど、私ら口コミっていうのがものすごい大事やったの。なん

かのコマーシャルよりも、コマーシャルは半分だましみたいなのもあるから。口コミは良いと思うから勧める。悪かったら勧めへんやんか？その口コミが大事。」と、積極的な広報は避けていることが分かる。この理由として、「コマーシャルせんとアカンとなると、こっちもやる？売ろうとするとまた広げんとアカン。こんだけのもんをまた広げるとなると教える方がやっぱり力が入らんくなるやんか。こんだけで頑張って子どもに教えてるのに、作品も作って宣伝もせんとアカンとなると...私はいつでも思うん、それをしたら私は教えるときにしたってなんにしたらって 100%教えられんなって。」という発言をされている。また、「そらここに何人かたくさんスタッフがいてな、広報の係りとかあったらええけどな、そんなコトよりもここに来た子どもたちと遊ぶほうが好きやろ？」と、広報に重点を置くよりも子どもと遊ぶ時間に重点を置く方が良いと考えていることが分かる。

団体 15

以前施設で飼育している猫がいくつかのメディアで取り上げられたようである。しかし現在は情報発信への意欲が低いため、主に口コミに頼っていると考えられる。

『広報ひこね』の利用について

次に、ひこね市民活動センターの主な広報媒体である、『広報ひこね』に関する考察を行う。

『広報ひこね』を利用している団体

- ・ 団体 13
- ・ 団体 14

『団体 13』の『広報ひこね』利用に関して、代表の Y.H 氏は「子どもたちのガラス体験を彦根市が開いてくれてる。それで私に協力してくれている。ガラス教室をしはる。それを彦根市が負担してくれる。子どもたちが彦根市に寄せはるやん？」と発言されている。このガラス体験を行う際に、『広報ひこね』に体験教室の人数募集が掲載されている。

また、『広報ひこね』に最初に掲載した際の話として、「役所の人是最初、「そんな ¥2,000 なんかでこうへんで。そんなん広報載せてもしゃーないで、来はらへんで」て言うてはった。その時は市が ¥2,000 の内の ¥1500 を持たはってん。で、個人の負担金は ¥500 やってん。「そんなん来はらへんで、まゝ、来んかったら数の埋め合わせは市の職員がやったらええか。」と思ってはった。ほんで、出してみはったん。そしたら、その出した日にスグ埋まってしもたん。「うわ、こんなんなるんか！」って言う裏話を私に聞かせてくれはったんやな。実はこんなこと思ったのにつて。それから毎年、いつから受付しますっていうの

を出しとくとその日のうちに朝でバツと埋まってしまう。」ここでは、市民のガラスに対する感心の高さについて述べられているが、『広報ひこね』の情報発信力の高さを感じさせる事例である。

また、『広報ひこね』利用に関して、『団体 14』代表の T.H 氏は「他にも載せてって事柄が多いから、選ばれるなあ。空いてるときはすっと入るけど、ちょっと無理って言われるときもある。1 ヶ月半か 2 ヶ月前から言うてなアカンやん？ 僕は、計画性なかったら結構急に決まることがあるからな。でも、広報ひこねはいいよ。絶大やな。全然人数が桁ちゃうもん。」「凄いよ、4、5 人が 40、50 人になる。」と、利用できないときもあり、掲載してもらうには 2 ヶ月前からの準備が必要であるという課題が挙げられる一方で、広報媒体としての情報発信力の高さについては信頼度が高いことが分かる。

『広報ひこね』を利用していない団体

- ・ 団体 12
- ・ 団体 15
- ・ 団体 16

『団体 12』は、「広報ひこねに載せてもらうにはスペースとか時期とかタイミングがあるし、スペースがないって言われたら無理やし。どっちかっていうと、行政的なところには頼ってないっていうか...。」「あれはねえ、かなり早く出さないとあかんとかの制約がいろいろある。」「こういうのも一回行政の検閲があるんです。回覧にまわしてもらおうと思ったら、見せないといけない。だから、やっぱりそこらへんの思いがズレたりする。センター⁹⁾があまりにも知られないこととか、指定管理者っていうのが知られてないので、私たちのスタンスを知ってもらいたくて、自治会回覧をしたいということで、自治会を使おうと思ったら行政の許可が要る。許可をもらおうと思ったら行政の検閲がいる。」と、行政に頼ることでの動きづらさ、自分たちの発信したい情報と食い違う恐れについて述べられていることから『広報ひこね』の利用に関しては消極的であることが分かる。

『団体 15』では、「自立支援法で、ここがなくなってしまう可能性があるので広報はしていないので、広報ひこねも使っていない。」という理由で『広報ひこね』は利用されていない。

『団体 16』の、「広報ひこねは使ったことがない。」という発言から、『広報ひこね』の利用は行われていないことが分かった。「芹川があって、彦根城があって、自然にめぐまれた災害のないいいところ、人の気持ちもおおらかで、本当にいいところなんだっていうのを全国の人に知ってもらいたい。」と彦根の良さ、芹川の良さについて発言される一方で、「そういう居心地がいいっていうのをずっと続けたい。それは、個人単位ではなく、小さなエリア。中藪西っていうエリアで共有して欲しい。」と発言されている。『広報ひこね』では、

市民活動団体の情報は主にイベントの情報が掲載されている。そのため、彦根の良さ、芹川の良さを伝えたいという、A.Y 氏の意味と『広報ひこね』の性質は異なったものだと考えられる。さらに芹川の清掃については、先のコメントにもあったように、居心地の良さを中藪西地区で共有して欲しいと考えを持っているため、『広報ひこね』に情報を掲載するというよりは、『健やか金城の会』という金城小学校が作成している紙面への掲載を選択していると考えられる。

まとめ

『広報ひこね』を利用している団体は、独自型と分類した 5 団体中 2 団体であった。利用している団体のうち、『団体 13』については、現在は利用していないということなので、現在は実質 1 団体となっている。そのため、独自型においても『広報ひこね』の利用が積極的になされているとはいえない。

『広報ひこね』に対する考え方は、各団体によって異なることが明らかになった。『広報ひこね』への信頼を示す団体が存在する一方で、『広報ひこね』の使いづらさ、情報の食い違いを恐れて利用していない団体が存在していることも明らかになった。

(4) 利用広報媒体についてのまとめ

利用広報媒体について

実際に利用している広報媒体数は、全体的に独自型が最も多く、次いで情報交換型、勉強会型が最も少なかった。情報交換型は情報発信意欲が高いにも関わらず、主に人手が不足しているために活動が手一杯で、情報発信を積極的に出来ないということが考えられる。情報交換型は運営スタッフの募集を 3 類型の中で最も募集していることから、活動の中で人手の不足が活動の支障となる要因であると考えられる。また、全類型を通して口コミへの信頼がみられた。

また、勉強会型、情報交換型は主に口コミやチラシを利用しているが、独自型の情報発信に積極的な団体は新聞、テレビ、HP など、より多くの人に幅広く情報の届くメディアを利用していることが分かる。このことから、これらの団体はひこね市民活動センターを交流の場として情報交換を行わなくても、自身の利用している広報媒体で幅広い範囲に情報を伝達できる能力を持っていると考えられる。

『広報ひこね』について

ひこね市民活動センターの主な広報媒体である『広報ひこね』の扱いについては賛否両論であった。少なくとも全ての団体において、積極的な利用が出来るメディアではないこ

とが明らかになった。広報誌として大きな効果が得られると発言した団体が存在する一方で、自分たちの意図しないことが伝わってしまう恐れがあると発言した団体の存在も挙げられる。情報発信の媒体として『広報ひこね』は効果的であると考えられる団体も存在したが、利用をしていない団体の方が現状としては多く存在した。このことから、必ずしも『広報ひこね』が市民活動団体にとって有益な情報発信の媒体ではないと考えられる。

5-3-4 エフエムひこね利用について

ここでは、市民活動団体のエフエムひこね利用について考察を行う。

(1) 勉強会型

勉強会型のエフエムひこね利用に関するコメントについて表 5-39 に整理する。

表 5-39 勉強会型のエフエムひこね利用に関するコメント

団体名	コメント
団体2	・以前、エフエムひこねで会の情報について流してもらおうか考えたことがある。
	・口コミの大きい版がラジオかなあ。
	・連絡先を伝えるなどインフォメーションを流したい。
	・相談事はラジオでは言いにくい。
	・どこに言っていいかわからない。
	・どういう風に情報を言ってもいいかわからない。
個人サポーター・K.K氏	・エフエムで自分の活動の話をしていい。
	・聞いた方がすぐレスポンスできるっていういい媒体かもしれない。
	・エフエムひこねを聞いて何か一ついい話があればまた聞こうと思う。
団体3	・お金を払えばエフエムで活動の話をしてもらえる。
	・エフエムは会社なので、基本的に経営のことしか考えてない。
	・アカペラをやっているが、エフエムひこねから月何万とかで、自分たちの音楽を発信しないかという話が来たことがある。
	・ほんまは使いたかったんやけど、気が回らなかった。
	・エフエムはイベント情報は募集している。
団体4	・情報を流してくれるなら流して欲しい。
	・こういう会があることを言いたい。
	・本当に情報を流してくれるのか？
	・エフエムで流す効果があるのか？
団体5	・インフォメーション程度の情報を流したい。
団体6	・誰でもかれでもってことはない。

ヒアリングより、勉強会型のエフエムひこね利用の可能性として、イベント情報の告知、自分の活動を話す場、利用に関して消極的、という3パターンの意見がみられた。

イベント情報の告知

- ・ 団体 2
- ・ 団体 3
- ・ 団体 4
- ・ 団体 5

団体 2

『団体 2』では以前、「こんなことやってるっていうのを一回エフエムひこねで知らせてもらっても良いかなあと思っていた。」「そのままズルズルきている」と発言されていることから、利用の意思はあるが機会がなかなかないことが分かる。

また、メンバーでもある Y.Y 氏のご主人は、「インフォメーション程度で良い。」「相談事はラジオではしにくいし、関係ない人にとってはどうしたらいいねんてことになる。」

団体 3

「ほんまは使いたかったがそこまで気が回らなかった。」と発言されている。これは、2006 年 10 月 15 日の講演会の広報についての発言であるが、「使っていきたいなあ。なかなかこう縁遠くてね。」とさらに発言されている。

また、「窓口とか積極的に広報してくださいっていうのは言うてはるんやろうけど。ただそんなにエフエムひこねを聴かん。」と発言されている。自らの情報発信の場として利用していく意思を見せる一方、馴染みが薄いので情報発信媒体として利用するのに抵抗感があるのではないかと考えられる。

団体 4

「一番言いたいのは、今の学校に対して自分の意見を持っていたり、不満を持っていたり、悩みを持っていたり、本来地域や学校の中で解決していけたら良いんやけど、なかなか今はさっきの親じゃないけど、学校と良い関係じゃないじゃないですか？で、そういう方々に一人で悩まないでっていうこういう場がありますよっていうのは言いたいけど。」と、発信したい情報の内容について発言された。

団体 5

「情報を流す媒体としてエフエムひこねの利用は考えられるのか？」という質問に対して、「私はありだと思います。」と発言している。

また、同団体のメンバーである U.Y 氏は、「こういうサークルがあって、こういう活動をして、いついつこういう活動があるので来てくださって感じですね。ただ、いついつやりますってのがないときは、こういうサークルがあって、こういうのしてますっていう

のを言う。」と、発信したい情報の内容について発言された。

自分の活動の話をする場

- ・ 個人サポーター・K.K 氏

個人サポーター・K.K 氏

「エフエムひこねを使って、彦根市民に年金の話をしてくださいってというのは可能ですか？」という問いに対して、「いいですよ、全然そんなのは。」と発言されている。

同じコミュニティ FM 局である、NPO 法人京都コミュニティ放送局²⁾では、例えば、坂本龍馬の話のみで構成される番組が存在する。京都の事例では、一定の金額を払えば自分の番組を持てるために、趣味の放送も可能であると考えられるので、エフエムひこねとは事例が異なったものとして扱わなければならないが、エフエムひこねでも他のラジオ局同様にゲストとして、さまざまな人が出演している。K.K 氏も同様にゲストとして出演し、自らの活動の話をするということは実現可能であると考えられる。

利用に関して消極的

- ・ 団体 6

団体 6

活動の目的より、団体として少数で活動することを望んでいるため、エフエムひこねの利用については前向きではない。代表 U.Y 氏は活動をするにあたり、「僕は大人数ではやりたくないんですけどね。」という発言からも、エフエムひこねの利用への意識は低いと考えられる。

また、エフエムひこねに対するコメントから、窓口が分からない、エフエムひこねの市民活動団体への関心に対する疑問、エフエムひこねの広報力に対する不安、など、市民活動団体の情報発信媒体としてエフエムひこねを利用することに対して否定的な意見がみられた。

窓口に対する不安

団体 2

エフエムひこねに対する不安として、「どこに言って良いか分からない。」とされている。以前は、Y氏という知り合いがいたようだが、現在ではその人物がいないためエフエムひこねとの関係性も薄くなっていると考えられる。

エフエムひこねの市民活動への関心に対する疑問

団体 3

「エフエムひこねってというのはどうしたらお金をもうけるかっていうのを考えているところやから。市民活動のイベントをPRすることに反対ではないんやけど、積極的ではない。」と、エフエムひこね側にとって市民活動団体の情報の有益性について否定的に発言されている。ただし、「イベントありますよってというのは募集している。」と地域情報としての市民活動団体のイベント情報は受け入れられると考えていることが分かる。

団体 4

「こないだも教育基本法反対のことを滋賀のFMに言うたけど、アカンて言われたぞ？」と、FM滋賀で断られたことから、エフエムひこねでも同様に断られるのではないかと考えているとみられる。

その他

『団体 2』、『団体 5』では、ラジオを通して喋る際にうまく喋れるか分からないといった不安について発言がみられた。

まとめ

イベント情報の告知としてエフエムひこねを利用したいと考えている団体が多く見られた。しかし、窓口に対する不安、エフエムひこねの市民活動団体に対する興味について疑問を持つ団体もみられた。

(2) 情報交換型

情報交換型のエフエムひこね利用に関するコメントについて表 5-40 に整理する。

表 5-40 情報交換型のエフエムひこね利用に関するコメント

団体名	コメント
団体7	・来て下さいといわれれば行くが、こちらからは行かない。
	・つながりがないし、どこに連絡しても良いか分からない。
	・ボランティアなどに関心がなさそう。
	・市民の役立つ情報を流してほしい。
団体8	・エフエムひこねは知らない。
団体9	・とにかく名前を売ることが仕事なので出演依頼が来たら出る。
	・出演しようと思っても窓口が分からない。
団体10	・以前、知り合いが出演した際に聴取者からの反応があまりよくなかった。
	・以前出演したときは、凄く緊張した。
	・エフエムひこねはどんだけの人が聞いているか分からない。
個人サポーター・K.S氏	・エフエムひこねはまちのラジオなので、人の背景も見えてよいと思う。
	・エフエムひこねも経営なので、自分のしたいことと局の思惑が一致するか分からない。
団体11	・出演したらおもしろそうだと思う。
	・ラジオ出演は話題になる。
	・エフエムひこねは自分たちの活動に興味があるのか？

ヒアリングより、情報交換型のエフエムひこね利用の可能性として、イベント情報の告知、利用に関して消極的、その他、という3パターンに分類されることが分かった。

イベント情報の告知の場としての利用

・ 団体 8

団体 8

代表の K.S 氏はエフエムひこねについての認知はされていなかったが、エフエムひこねが彦根を盛上げようとしているラジオ局だと告げると、「それは良いですね。」「広報活動というのは、ちょっと持っていると全然違う方面の方からもアクセスがあるからねえ。」と、

発言されたことから、情報発信の場の一つとしてエフエムひこねの利用に前向きであると考えられる。また、活動の性質から竹林整備への参加者の募集の場として利用できるのではないかと考えられる。

利用に関しては消極的

- ・ 団体 7
- ・ 団体 10

この 2 団体については、あまりエフエムひこね利用に積極的ではない。『団体 7』代表 O.K 氏は、窓口の問題を挙げられている。『団体 10』代表 K.T 氏は、エフエムひこねの広報力に対して疑問を持っていることが分かった。それぞれについては、後述する。

その他

- ・ 団体 9
- ・ 個人サポーター・K.S 氏

団体 9

「とにかく名前を売るのが仕事なので。」と言うように、名前を売るための情報発信の場として、エフエムひこねの利用に対して積極的である。

個人サポーター・K.S 氏

「口コミだと、袋町に住んでいる小島さんの息子さんだ、みたいにイメージが沸く。エフエムひこねは町のラジオなので、そういう人の背景も見えて良いと思う。」とエフエムに対するプラスのイメージについて発言されている。エフエムひこねの利用に関する発言は特になかった。

また、表 5-40 から分かるように、窓口が分からない、エフエムひこねの市民活動団体への興味に対する不安、エフエムひこねの広報力に対する不安、など、エフエムひこねについて認知していない『団体 8』以外の全団体で、情報発信の場としてエフエムひこねを利用することに対する否定的な意見がみられた。

窓口が分からない

- ・ 団体 7
- ・ 団体 9

団体 7

「まだ、今のところそういうつながりがないというか、どこに連絡してよいかもわからないからね。」と発言されている。

団体 9

「エフエムひこねとの関係は、著者を通してが一番近い。」と発言されている。著者は本研究にあたりエフエムひこねでも取材を行っている。その関係が一番近いと発言されている。松居氏はセンターに登録している団体のさまざまな活動を写真に収めており、センターに登録している団体との関係は深いと考えられる。仮に団体とエフエムひこねがつながっていれば、そこからエフエムひこねと関わっていくことも可能である。このことからエフエムひこねと市民活動団体の関係はほとんどないと考えられる。

エフエムひこねの市民活動団体への関心に対する疑問

- ・ 団体 7
- ・ 個人サポーター・K.S 氏
- ・ 団体 11

団体 7

「取材してる側の感心だと思う。向こうが考えてることが分からないっていうのもある。ボランティアとかには関心がないメディアなんだろうとこっちは受け取る。地域のメディアだというのなら、向こうからアプローチがあつてね、やりましょうみたいになったら、こっちはおおいにありがたいし、ぜひやってもらおうという話になる。でも、そういう気はないやろうなあ、っていうのが今の関係やわね。そういう関係で、果たして市民のメディアと言えるのかどうかね。今日ちょっと足を運ぶなりね、市民の暮らしに役立つ情報を流して欲しいというのが本音。そういう姿勢で電波を使って欲しい。」というように、エフエムひこねの市民活動への関心に対する疑問を持っていることが分かる。

個人サポーター・K.S 氏

『個人サポーター・K.S 氏』は「エフエムひこねも経営なので、自分が出演して話したい

ことと局の思惑が一致するとは限らない。」と発言されている。

団体 11

メールでのヒアリングの際に、「自分たちに興味があるのか？と思うことはある。」と回答されている。

エフエムひこねの広報力に対する不安

- ・ 団体 10

団体 10

「これは前岡村が個人的にやったんやけど、オールディーズのライブやったんやけど、その PR も兼ねて、喋らしてもらえるっていうて、エフエムひこねで招待券を 3 枚か 5 枚やったか忘れたけどプレゼントしますって言うたんやけど、全然こーへんねん。挙句の果てには、パーソナリティが叩き売りみたいに「タダです」ってガンガン言うて、で、どんだけの人が聞いているかっていうのが...。」と、友人が出演した際のエフエムひこねでの反応を知り、エフエムひこねの影響力について疑問を持っていることが分かる。

まとめ

イベント情報の告知の場としてエフエムひこねを利用したいと考えている団体は 1 団体で、利用に関して消極的な団体が 2 団体でみられた。

(3) 独自型

独自型のエフエムひこね利用に関するコメントについて表 5-41 に整理する。

表 5-41 独自型のエフエムひこね利用に関するコメント

団体名	コメント
団体12	・窓口が分かりにくい。
	・昔、エフエムひこねに出演したことがある。
団体13	・エフエムが出来たときに、フリマの様子を流していた。
	・商店街の中でラジオを流してその中に広告を入れたら良いと思ってた。
	・赤井くんが番組を担当していた当時は、センターでエフエムひこねを盛上げようとしていた。
	・紙に残らないので、良い情報も途切れたら終わり。
	・エフエムひこねで情報を流した方が良いのかとも思うが、もう十分だとも思う。
団体14	・エフエムは自分たちの場合、広報をする上ではちょっと違う。
	・市民活動系とリスナーがつながりにくいのではないかな？
	・イベント情報を流してもらうこともあったが、反応はゼロに等しい。
	・車に乗る人なら聴くが、自転車では聴かない。
団体15	・宣伝とか何とかは今はあまり…。
団体16	・2年ぐらい前に出演した。
	・芹川の良さをエフエムひこねで言ってあげたい。
	・コンタクトを取ろうと思えば取れるがなかなかそういう機会がない。

独自型では、エフエムひこねへの出演経験を持つ団体ばかりであるが、エフエムひこねの利用に関して消極的な意見が目立った。その意見としては、窓口が分からない、エフエムひこねの広報力に対して疑問がある、情報発信自体に消極的、その他、といったものである。

窓口が分からない

- ・ 団体 12

団体 12

「そのとき使っていた、市会議員の赤井君が担当のとき。」と過去の出演経験があることが明らかになったが、同時に「エフエムでも、この時期にこういうことをっていうタイムリーなことをここに言えばよいとかいう窓口も分かりにくいですね。」と発言されている。

出演経験がある団体でさえ、エフエムひこねとの接点がないというのは、過去の市民活動団体番組を担当していた赤井氏のように個人的なつながりはあるが、市民活動団体とエフエムひこねと自体には関わりがないという現われであると考えられる。また、エフエムひこねの利用を含めた情報発信の場について、「情報を発信するのは市民団体でええねんけど、それを手助けしようとか、そういう発信の場が必要やとは市民団体は常に思ってるんやけど、なかなかそういう発信の場所っていうのを提供してもらわないと出来ないっていうのが大きい。」と、発言されている。このことから、情報発信に対する意思は持っているが、その場がなかなか与えられないという現状が明らかになった。そのため、市民活動団体が情報発信する際には、大きな努力が必要であると考えられる。

エフエムひこねの広報力に対する疑問がある

- ・ 団体 14

団体 14

「エフエムは広報媒体としてどうかな…。市民活動系とリスナーがつながりにくいんじゃないかな？僕らサイクリングやん？やっぱ車乗る人が多い。そうするとつながりにくい。」
「イベント情報を発信するとき、「じゃあ、言うたるわ。」みたいなこともあったけど、エフエムからの反応はほぼゼロに等しい。凄く少ない。」と、ラジオと自転車の相性の悪さ、エフエムひこねの広報力への疑問について述べられている。

情報発信自体に消極的

- ・ 団体 13
- ・ 団体 15

団体 13

「エフエムひこねでダーツと宣伝した方がええんかなあとも思うけど、やっぱしなあ...とか思ってたけど、うーん...。」と悩まれている理由としては、「工房が出来た当初、NHKをはじめとするテレビや新聞に取り上げられてひっぱりだこだった。そのときに周りからだいぶ叩かれた経験がある。」ということと、「もっとたくさんの人に知らせてやりたいなあとか、こんなに子どもが喜ぶんやから、もっともっと宣伝してたくさんの人に来てもらってやりたいかなあと思いつつ、思いつつながら、私にしたらもうこれで 100 点満点かなあと思う部分もある。」という、一定の満足を得られたためによる情報発信への意欲の低下も関連していると考えられる。

団体 15

「今、自立支援法が施行されて、今、こういう福祉の小さい作業所は問題なんですよ。この 2 年で人を増やさないと存続できないので悩んでる最中なんです。ここに来てるのは 8 人で、本当に小さい作業所なんです。このままでは、この 2 年で閉鎖になってしまう。」と発言されているように、宣伝より活動の継続を課題に挙げておられた。さらに、「センターにはあまり行ってないのですか？」という問いに対して、「そっちに行くこっちに人が足りなくて...。」と発言されているように、人を集めるにも、そのための人手が確保し出来ない現状があることが分かる。

その他

- ・ 団体 16

団体 16

「彦根自慢が出来るような、まずそれを『団体 16』が、エフエムひこねでも言ってあげたいと思いますけどね。」と発言される一方で、「なかなかそういう機会がない。」とも発言されている。窓口は分かる一方で、エフエムひこねにつながるきっかけがないために利用するには至っていないことが分かる。

まとめ

窓口が分からない、広報力に疑問を持ちエフエムひこねの利用に消極的となっている団体がある一方で、情報発信への意欲の低さからエフエムひこねの利用に関しても消極的である団体が存在した。こうした団体には、ただ情報発信の場として門戸を開いておくだけでなく、現在の番組の形態のように、局側からのアプローチによって情報発信の場が生ま

れると考えられる。

また、情報発信媒体として利用したいと考えている団体もきっかけのなさからエフエムひこねの利用にまでは至っていない。エフエムひこねからのアプローチがあればこういった団体も出演すると考えられる。事実、ヒアリングの後日に利用に関して消極的であった『団体 13』では、エフエムひこねからのアプローチがあったことでエフエムひこねに出演するに至っている。

(4) エフエムひこね利用についてのまとめ

エフエムひこねの利用に関しては、利用したいという意見が多く多くの団体で見られる一方で、窓口が分からない、エフエムひこね側の市民活動団体への関心に対する疑問、広報力に対する疑問、などの市民活動団体側からみたエフエムひこねの課題も明らかになった。このことから市民活動団体にとってエフエムひこねは利用しづらい媒体であることが分かった。しかし、『地域情報の発信』を行うコミュニティ FM である以上、エフエムひこねが彦根市で活動する市民活動団体にとって利用しにくいメディアであることは望ましくないと考えられる。

5-3-5 彦根市における市民活動団体の情報発信媒体についてのまとめ

彦根市における市民活動団体については、情報発信意欲が高い団体が低い団体よりも多いことが明らかになった。しかし、類型によって情報発信の対象や内容が異なっていると考えられる。勉強会型においては、自分たちの情報を求めている市民に絞った参加の募集を求める傾向がみられた。情報交換型においては、参加者としての市民だけでなく、運営側に協力してくれる協力者を求めていると考えられる。独自型においては、勉強会型と同様に市民に対しての情報発信を望むと考えられるが、より多くの市民に対して、自分たちの活動に参加してもらえる情報発信を望んでいると考えられる。

利用広報媒体に関しては、全体的に勉強会型、情報交換型、独自型の順に利用広報場体数が増加している傾向がみられた。活動の性質から、勉強会型はじょじょに広まる広報で、情報を求めている人に行き渡る広報を求め、情報交換型は多くの人に行き渡る広報を求めていると考えられ、そのために交流の場への参加も積極的であると考えられる。さらに独自型については、情報交換型以上に広報媒体を利用しており、多くの人に対する情報発信を求めているため、交流の場の利用以外の手段での広報に力を入れていると考えられる。

これらのことから、市民活動団体の情報発信媒体としてのエフエムひこねの利用類型ごとに異なってくると考えられる。勉強会型は、口コミなどじょじょに広まる広報を求めている一方で、エフエムひこねについてはイベント告知をする際に利用したいという意見が多かったことから、利用可能であると考えられるが、同時にエフエムひこねに対する疑問点や不安な点に対する意見がみられた。情報交換型に関しては、エフエムひこねに対して評価する意見がみられる一方で、疑問点や不安な点がみられた。こういった点が改善されない限り、今後の市民活動団体側からの積極的な情報発信媒体としてのエフエムひこね利用は望めないと考えられる。また、独自型については利用広報媒体を多く持つ団体や、情報発信すること自体に消極的な団体もみられることから、今後も積極的なエフエムひこね利用は望みにくいと考えられる。

5 - 4 類型ごとのまとめ

5-4 では、補足的に各項目について類型ごとにまとめる。

5-4-1 勉強会型

表 5-42 に勉強会型についてまとめる。

表 5-42 勉強会型のまとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	主に、活動の場としてのみ利用している団体と、交流の場としても利用している団体で半数に分かれた。
情報発信に対する意識	意識の高い団体： 3団体
	やや高い団体： 2団体
	迷っている団体： なし
	消極的な団体： 1団体
情報発信の内容	運営スタッフの募集を目的としている団体： 1団体
	イベント参加者の募集を目的としている団体： 4団体
	普及を目的としている団体： 1団体
	その他の内容を発信したい団体： 1団体（情報発信に消極的な団体）
利用広報媒体	最も多く利用されている広報媒体： 口コミ
	個人で活動している組織の媒体数： 1～4種類
	団体に活動している組織の媒体数： 1～5種類
	その他： イベント告知を望んでいる団体がいる一方で、大勢に来られると対応できないという意見もみられた。
広報ひこね利用に対する意識	『広報ひこね』を利用している団体： 1団体
	その他： 情報発信に対する意識は比較的高い類型であるが、『広報ひこね』を利用している団体は1団体であった。
	その他： 『広報ひこね』が活動に活かせたと話す団体がいる一方で、利用しなかったが利用できなかったと話す団体もいた。
エフエムひこね利用に対する意識	イベント告知をしたい： 4団体
	活動の話をしたい： 1団体
	利用に関しては消極的： 1団体
	その他： なし
エフエムひこね利用に対する不安	窓口が分からない： 1団体
	エフエムひこねが市民活動団体に興味があるか分からない： 2団体
	エフエムひこねの広報力に疑問がある： なし
	その他： 出演した場合うまく喋れるか分からないという意見がみられた。

勉強会型の市民活動センター利用としては、主に活動の場としての機能を求めているこ

とから、勉強型の求める交流の場とは、各団体の会に参加する参加者との交流の場であると考えられる。現在は市民活動センターがこの運営側と参加者が集う場としての役割を果たしている。今後、勉強会型のような団体が彦根市で発足した場合、ひこね市民活動センターの利用価値は十分あると考えられる。しかし、勉強会型の例外的に見られた『団体3』のような団体が現れた際には、ひこね市民活動センターは『広報ひこね』以外の広報利用についても検討すべきである。

勉強会型は広報に関しても活動の場への参加を呼びかけるものが多く、その広め方もじょじょに広めたいという傾向がみられた。また、エフエムひこねの利用に関しても同様にイベントへの参加者の募集が情報発信の内容としてみられた。エフエムひこねではコミュニティ FM として、地域情報を発信している。勉強会型の求める情報発信の場が、自分たちの活動の場まで招くインフォメーション程度のものであるので、エフエムひこねが勉強会型の情報発信媒体となりうるが、ヒアリングより、窓口がわからない、自分たちの活動に興味があるか分からないと発言する団体があるなど、エフエムひこねに対する不安も見られたため、今後エフエムひこね側からのアプローチが必要であると考えられる。

5-4-2 情報交換型

表 5-43 に情報交換型についてまとめる。

表 5-43 情報交換型のまとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	交流の場としてのみの利用するという団体と、交流を通しての他団体に対する情報発信が行われていた。
情報発信に対する意識	意識の高い団体： 6団体
	やや高い団体： なし
	迷っている団体： なし
	消極的な団体： なし
情報発信の内容	運営スタッフの募集を目的としている団体： 3団体
	イベント参加者の募集を目的としている団体： 3団体
	普及を目的としている団体： 2団体
	その他の内容を発信したい団体： なし
利用広報媒体	最も多い利用広報媒体： 口コミ
	個人で活動している組織の媒体数： 2種類
	団体で活動している組織の媒体数： 3～6種類
	その他： 人数が多くないので、広報に力を入れられないという意見がみられた。
広報ひこね利用に対する意識	『広報ひこね』を利用している団体： 1団体
	その他： 情報発信に対する意識は全団体で高かったが、『広報ひこね』を利用している団体は1団体のみだった。
	その他： 『広報ひこね』を利用していない理由として特徴的なものは見られなかった。
エフエムひこね利用に対する意識	イベント告知をしたい： 1団体
	活動の話をしたい： なし
	利用に関しては消極的： 2団体
	その他： 名前を売るためにとにかく人前に露出していくことの必要性についてコメントがあった。
エフエムひこね利用に対する不安	窓口が分からない： 2団体
	エフエムひこねが市民活動団体に興味があるか分からない： 3団体
	エフエムひこねの広報力に疑問がある： 1団体
	その他： エフエムひこねを知らないという意見がみられた。

情報交換型にとってのひこね市民活動センターの役割は、他団体との交流の場であることが明らかになった。また、交流によって自分たちの活動への協力者を積極的に求めていると考えられる。そのため、情報交換型は勉強会型よりも他団体とのつながりが強いのではないかと考えられる。

また、情報交換型では情報発信が不要とする団体は存在しなかった。このことより、情報交換型は他の類型と比較した際に全体として情報発信への意識が高いと考えられる。また、勉強会型に比べて、『団体 8』の「活動を幅広く伝えたい。」という発言に代表されるように、幅広い情報発信を求めていると考えられる。情報交換型の情報発信したい内容としては運営スタッフの募集、参加者の募集、普及と活動により幅広くみられた。

エフエムひこねの利用に関しては、情報発信媒体の一つとして考える一方で、窓口が分からない、自分たちの活動に興味を持っているか分からないなど、市民活動団体にとってエフエムひこね側の考えが不透明であるため、情報発信媒体として認識されにくいと考えられる。これを解決するために、エフエムひこね側からのアプローチが望まれる。

『広報ひこね』に関しては、全体として情報発信意欲が高かったにも関わらず、6 団体中 1 団体しか利用していない。これは市民活動団体にとって、『広報ひこね』が利用しづらいメディアであると考えられ、現状においてひこね市民活動センターを利用しての情報発信を行う上で、『広報ひこね』しか持たないひこね市民活動センターは情報発信媒体として利用価値は低いと考えられる。しかし、ひこね市民活動センターが情報発信の機能を高めることにより、多くの人が市民活動センターを訪れるようになれば交流の輪が広がり、交流の場として利用している情報交換型にとってはメリットがある。

市民活動団体だけでなく、交流の場がエフエムひこねを利用し広く市民に呼びかけることで、交流の場としての機能をアピールされ、情報交換型の求める交流の場が形成されるのではないかと考えられる。

5-4-3 独自型

表 5-44 に独自型についてまとめる。

表 5-44 独自型まとめ

項目	傾向
ひこね市民活動センター利用目的	センターにはほぼ登録しているのみである。
情報発信に対する意識	意識の高い団体： 3団体
	やや高い団体： なし
	迷っている団体： 1団体
	消極的な団体： 1団体
情報発信の内容	運営スタッフの募集を目的としている団体： なし
	イベント参加者の募集を目的としている団体： 2団体
	普及を目的している団体： 3団体
	その他の内容を発信したい団体： なし
利用広報媒体	最も多い利用広報媒体： 10種類
	個人で活動している組織の媒体数： 8種類
	団体で活動している組織の媒体数： 4～10種類
	その他： 個人で活動しているのは『団体13』であるが、活動にある程度満足したため、現在はほとんど口コミだけの利用しか行っていない。
広報ひこね利用に対する意識	『広報ひこね』を利用している団体： 2団体
	その他： 2団体中の1団体は『団体13』であるが、現在は『広報ひこね』についても利用していない。
	その他： 広報ひこねへの信頼を寄せる団体がいる一方で、自分たちの言おうとしていることが、『広報ひこね』に掲載するための検閲で変わってしまうと否定的な意見もみられた。
エフエムひこね利用に対する意識	イベント告知をしたい： なし
	活動の話をしたい： 1団体
	利用に関しては消極的： 2団体
	その他： 市民活動にとって、エフエムひこねを含めた情報発信の場がなかなかないとコメントする団体のみみられた。
エフエムひこね利用に対する不安	窓口が分からない： 1団体
	エフエムひこねが市民活動団体に興味があるか分からない： なし
	エフエムひこねの広報力に疑問がある： 1団体
	その他： エフエムひこねでの情報発信の前に、情報発信すること自体に消極的な団体のみみられた。

独自型の利用広報媒体は多岐に渡る。多くは新聞、テレビ、ホームページなど、より多くの人に幅広く情報の届くメディアを利用していることが分かる。このことから市民活動センターを情報発信の場として利用しなくても、自身の利用している広報媒体で幅広い範囲に情報を伝達できる能力を持っていると考えられる。しかし、現在では情報発信の意欲が低い団体も見られ、そういった団体は主に口コミを主な媒体としている。また、『広報ひこね』については、独自型においても傾向として他の類型と同様に少数の団体でのみ利用されていた。

情報発信の内容についても、イベント時の参加者募集をしている傾向がみられた。こういった、イベント情報は地域情報としてエフエムひこねを通して情報発信できるのではないかと考えられるが、独自型の利用広報媒体の多さや、情報発信意欲自体が低い団体がみられることなどから、現状としてはエフエムひこねの利用が絶対に必要であるとは考えにくい。また、「窓口が分からない」、「エフエムひこねの広報力に疑問がある」など、局側からのアプローチの少なさから、市民活動団体にとってエフエムひこねは利用しにくい媒体となっていると考えられる。独自型には彦根市だけでなく、滋賀県全域や全国に目を向けて活動している団体がみられるため、エフエムひこねでの情報発信の需要が他の類型よりも低いと考えられる。

第五章 脚注及び引用、参考文献

- 1) チラシはイベント時の参加者募集を呼びかける資料とし、広報誌は、活動の目的などイベント募集に関わらず、会の活動全般に関する資料とした。
- 2) NPO 京都コミュニティ放送局
<<http://radiocafe.jp/index.html>>,2006-6-15
- 3) 2006 年 9 月 15 日に入手。竹林整備への参加者を呼びかける内容となっている。
- 4) 佐和山の森だより NO.9。2006 年 10 月 7 日に入手。
- 5) 上記の名称とは、『団体 8』という団体名である。注釈の番号は著者が付け足した。
- 6) 2005 年に当時の滋賀県知事と、『団体 10』代表 K.T 氏との対談時に K.T 氏が話された内容の要約された文書より一部抜粋。2006 年 11 月 8 日に入手。
- 7) 2006 年 10 月 7 日に入手。
- 8) 特定非営利活動法人 NPO ぽぽハウス,
<<http://www.pref.shiga.jp/f/rosei/senoir/04popo.html>>,2006-9-30
- 9) ここでいうセンターとは、『団体 12』の拠点である彦根市北老人福祉センターのことを指す。注釈の番号は著者が付け足した。

第六章

結論

第六章 結論

6 - 1 各章のまとめ

第一章

本研究における、背景、目的、意義について述べた。また、市民活動の定義づけ、彦根市における市民活動団体の交流の場について述べ、情報発信媒体としてコミュニティ FM へ注目することについて述べた。

第二章

本研究の調査、分析方法について述べ、市民活動団体側のヒアリング対象の類型化を行った。

第三章

彦根市における市民活動団体の交流の場として、市民活動センターについての概要、現状把握を行った。また、市民活動センターの管理運営団体である、『団体 1』と市民活動センター登録団体との関わり、ひこね市民活動センターを通して情報発信について考察を行った。さらに、もう一つの交流の場としてプレイパーク晒庵について考察を行った。

第四章

エフエムひこね側から見た市民活動団体の情報発信の場について考察を行った。

第五章

市民活動団体側からの情報交流の場、情報発信の場について各団体を類型化することによって、詳細に考察を行った。

6-2 彦根市における今後の市民活動団体の交流の場について

6-2-1 彦根市における交流の場の必要性について

彦根市における交流の場の必要性については、類型ごとに異なっていることが明らかになった。勉強会型については、活動の参加者との交流を行う場を求めていると考えられる。情報交換型については、交流の場においての情報収集、情報発信の他に、活動への協力者を求めている傾向がみられた。独自型については現在、本研究で取り扱った交流の場の利用はないが、交流の場の他に对外向けに情報発信の機能を求めていると考えられる。

このことから彦根市における交流の場の機能として、交流の場で行われた情報交換を外に発信するという情報発信の機能加わることによりさらに交流の場は活発になると考えられる。この情報発信によって、交流の場の存在や、情報が彦根市に行き渡り、その情報を得た市民、市民活動団体が交流の場に加わると考えられるからである。

6-2-2 交流の場としてのひこね市民活動センター

ひこね市民活動センターの利用については類型ごとに相違がみられることが分かった。交流の場として利用している団体は主に情報交換型に分類される団体である。また、勉強会型の一部もまた交流の場として利用している。しかし、勉強会型全体をみると交流の場としても活動の場としての利用をしているという傾向がみられた。独自型については、ひこね市民活動センターは登録しているが利用については認められず、その理由については団体により多様な意見がみられた。このことから、情報交換型と勉強会型の一部にとってひこね市民活動は交流の場としての機能を果たすと考えられるが、一般的に民間の中間支援センターの資金難といわれていることから、この交流の場を継続していくことには大きな労力が必要であると考えられる。また、ひこね市民活動センター代表の言葉から、市民活動センターとしての広さについても課題があると考えられる。今後、多数の団体が情報交換会を訪れる状況が発生した際には、ひこね市民活動センターの広さだけでは十分ではないと考えられる。

6-2-3 彦根市における今後の市民活動団体の交流の場について

彦根市における市民活動団体の交流の場は、一般的な市民活動センターのように交流の場の機能など多様な機能が一極に集中するのではなく、ひこね市民活動センターをはじめとする、晒庵や、力石など分散型に分散していると考えられる。それぞれについてはそれほど大きなスペースを保有していないが、分散されることによりそれぞれ交流の場としての機能が保たれていると考えられる。そのため、今後の彦根市における交流の場の課題の一つとして、こういった分散的な交流の場がいかに結束し交流の場同士の情報交換を進めていくかであると考えられる。

6 - 3 彦根市における今後の市民活動団体の情報発信媒体について

既存の文献では、コミュニティ FM は市民参加型のメディアだといわれているが、実際にヒアリングを行った結果、エフエムひこねは、地域メディアとしての機能を持っているが、現状として市民活動団体が利用しやすいメディアであるとはいえなかった。

エフエムひこねはコミュニティエフエムでありながら、市民との関係が薄いメディアであると考えられる。しかし、現在の市民活動団体を取材しているパーソナリティがいるように、地道に取材していくことで彦根市民との交流が生まれ、まちのラジオとしての認識も増すのではないかと考えられる。そこで今後はエフエムひこね全体として市民活動団体に注目していくことが望まれる。

エフエムひこねとしては、コミュニティ FM に見られる経営上の課題を抱え、市民活動団体の情報を流すことは利益が発生しづらいと考えていると予想されるが、今後、より市民もしくは市民活動団体を取り込んでいかなければコミュニティ FM としての意義が弱まるのではないかと考えられる。エフエムひこね代表取締役社長 O.Y 氏の言葉にある『エフエムひこねらしさを出す。』というためにも、彦根市の情報を流すことが必要ではないかと考えられる。

6 - 4 今後の課題

今回は彦根市における交流の場として、ひこね市民活動センターを、情報発信媒体の可能性としてエフエムひこねを対象としたが、彦根市においても今後、晒庵や力石など他の交流の場について、また異なる情報発信媒体について調査、研究していく必要がある。また、今後の市民活動団体の発展を考えて、他の地域においても市民活動団体の交流の場と情報発信の媒体について調査する必要がある。

- APPENDIX -

1. 調査協力依頼書
2. 市民活動団体に対するヒアリング項目表

はじめに

はじめまして、滋賀県立大学、環境科学部に所属している森友秀と申します。現在、私は市民団体さんとコミュニティ FM というまちの小さなラジオ局との関わり方について調査し、卒業論文にしようと考えています。

現在、彦根市民活動センターに登録されている市民団体さんがイベントやボランティア募集の告知をする際には、センターでの情報交換会や、「広報ひこね」などを利用されています。しかし、センターの中での情報交換や行政紙を通してだけでなく、もっと多くの人に各団体さんの活動を知ってもらう場があっても良いのではないのでしょうか？

私はその情報発信の場として、市民団体さんと同様に彦根を盛り上げようとしている「FM ひこね」が最適なのではないかと考えています。**市民団体さんと FM ひこねが協力することは、彦根を盛り上げていく大きな力になる**、と思います。そこで、各市民団体さんのお話を聞かせていただき、FM ひこねを利用した各市民団体さんの情報発信について考えていこうと思います。

この調査の目的

この調査は・・・

各市民団体さんが広報面でどんな問題を抱えていらっしゃるのかを明らかにする。
各市民団体さんの新たな広報媒体として、FM ひこねを利用することが出来るかを明らかにする。

という2点を目的として、主に各団体の代表者の方、個人サポーターとしてセンターに登録しておられる方にお話を聞かせていただきたいと思います。

みなさん、お話を聞かせていただけないでしょうか？

この調査の結果次第では、FM ひこねを通してみなさんの活動を彦根市民に伝えていく機会が得られるかもしれません。

各団体の主に代表者の方、個人サポーターの方には、後日こちらからご連絡をさせていただくかもしれませんが、その際よろしければご協力ください。

また、はじめにも述べましたが、この調査結果を基に卒業論文を執筆しようと考えています。

この調査に関してご質問、ご意見のある方は、下記までご連絡ください。

みなさんお忙しいことと存じますが、何卒ご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

滋賀県立大学 環境科学部 環境計画学科 環境社会計画専攻
近藤研究室所属 森友秀

：

E-mail：

市民活動団体に対するヒアリング項目表

現在の広報媒体

Q1.どんな広報媒体を利用しているか？

Q2.なぜその広報媒体を利用するのか？

活動内容・活動範囲・伝えたい内容・伝えたい範囲・伝えたい人・経費・時間・労力...その理由

Q3.いつその広報媒体を利用しているのか？

イベント告知、ボランティア募集...

Q4.センターの利用

いつ利用する？なぜ利用する？どんな利用をする？利用する以前との違いは？

エフエムひこねの利用

Q8.市民団体と同じ彦根市で地域密着型の放送を目指す FM ひこねの利用はありえるか？

Q9.利用する際の出演形態は？

自分の番組 頻度(基準:商店街アワー)・放送料金(基準:京都)・施設代
ゲスト

Q.10 エフエムひこねに対する不安は？

窓口が分からない、どのくらい広報の効果があるのか？

Q11.どんな内容を放送したい？

イベント告知・ボランティア募集・日々の活動

属性

Q12.いつごろから活動を始めているのか？

Q.13 会員はいるのか？また何人ぐらいいるのか？

Q.14 運営スタッフは何人いるのか？

謝辞

本稿は、滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻における研究成果を学位論文としてまとめたものである。

本研究の遂行ならびに本論文作成にあたり、テーマの設定、論の構成、プレゼンテーション等、全てにおいて終始適切かつ御懇切丁寧極まる御指導御鞭撻、さらに指導に際して厳しくも温かいお言葉を賜りました滋賀県立大学環境科学部環境計画学科環境社会計画専攻近藤隆二郎助教授には、謹んで深甚なる敬意を表します。

本研究を進めるにあたり、お忙しい中ヒアリング調査に快くご協力いただいたエフエムひこねの代表取締役社長小幡善彦氏、並びにエフエムひこねスタッフのみなさまに深く感謝いたします。また、ひこね市民活動センター代表である伊藤久美子氏、並びにひこね市民活動センター登録のメンバーの方々にご協力いただいたことを深く感謝いたします。

また、同様に本研究を進めるにあたり貴重な助言、参考資料を賜った立命館大学産業社会学部津田正夫教授、並びに研究生の松浦希氏に深く感謝いたします。

この一年間、研究ばかりか生活においても温かく見守ると同時に、公私にわたり御協力いただいた、近藤紀章氏、樋口幸永氏、杉本さやか氏、に深く感謝いたします。

また、常に刺激を与えていただいた、同期ゼミ生である、迫間勇人氏、藤関功樹氏、志部谷順平氏、鳥居保人氏、福田絵里氏と一年間研究生活を共に出来たことを深く感謝いたします。

私事になりますが、公私生活において触れ合うことも多く、支えていただいた滋賀県立大学アコースティックサウンドクラブの友人、並びに故郷の友人の皆さまに深く感謝いたします。

最後に、私をここまで育て、学生生活を支えてくれた両親、祖母に心から感謝いたします。

2007 年 2 月 22 日

森 友秀